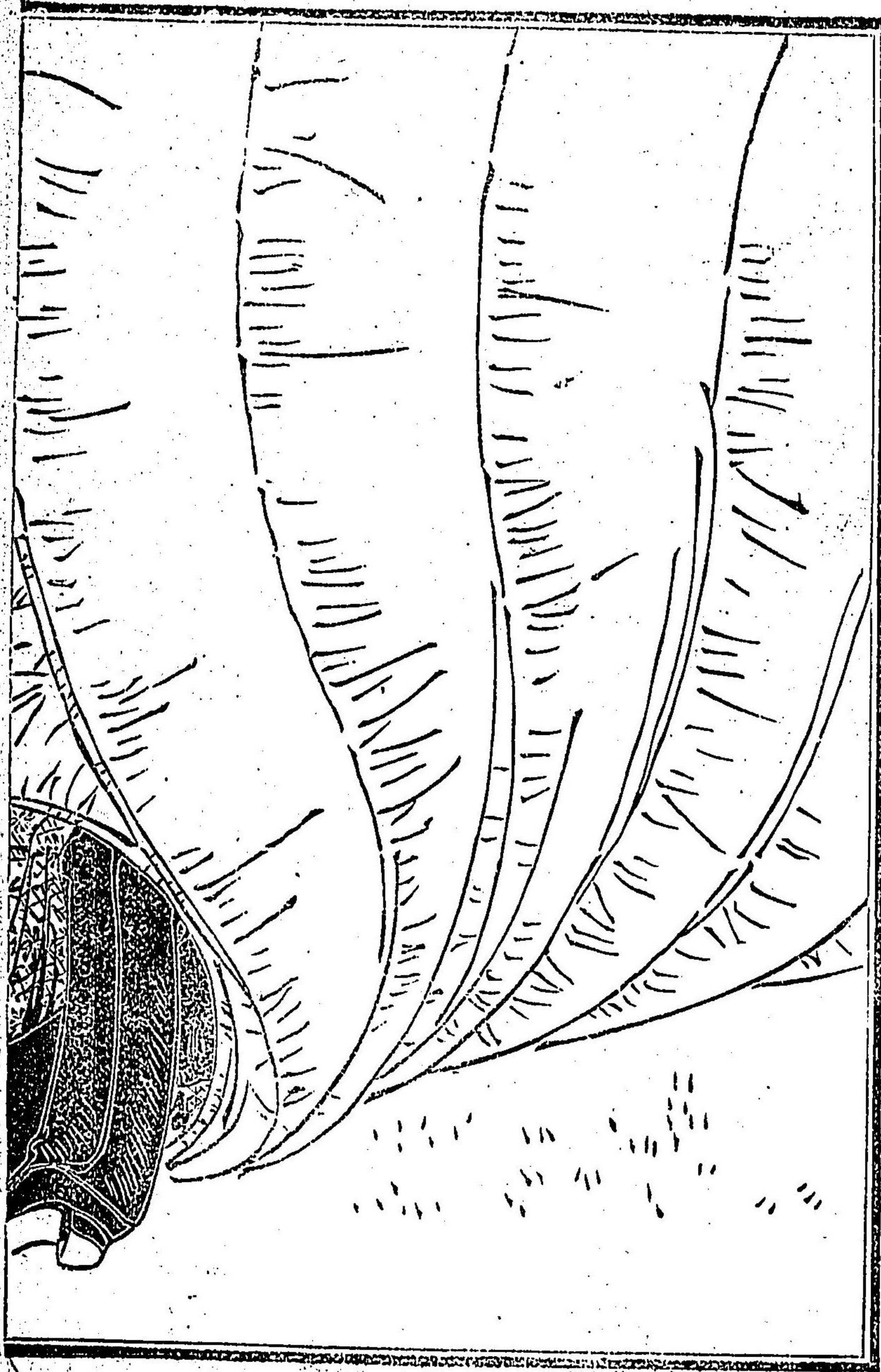


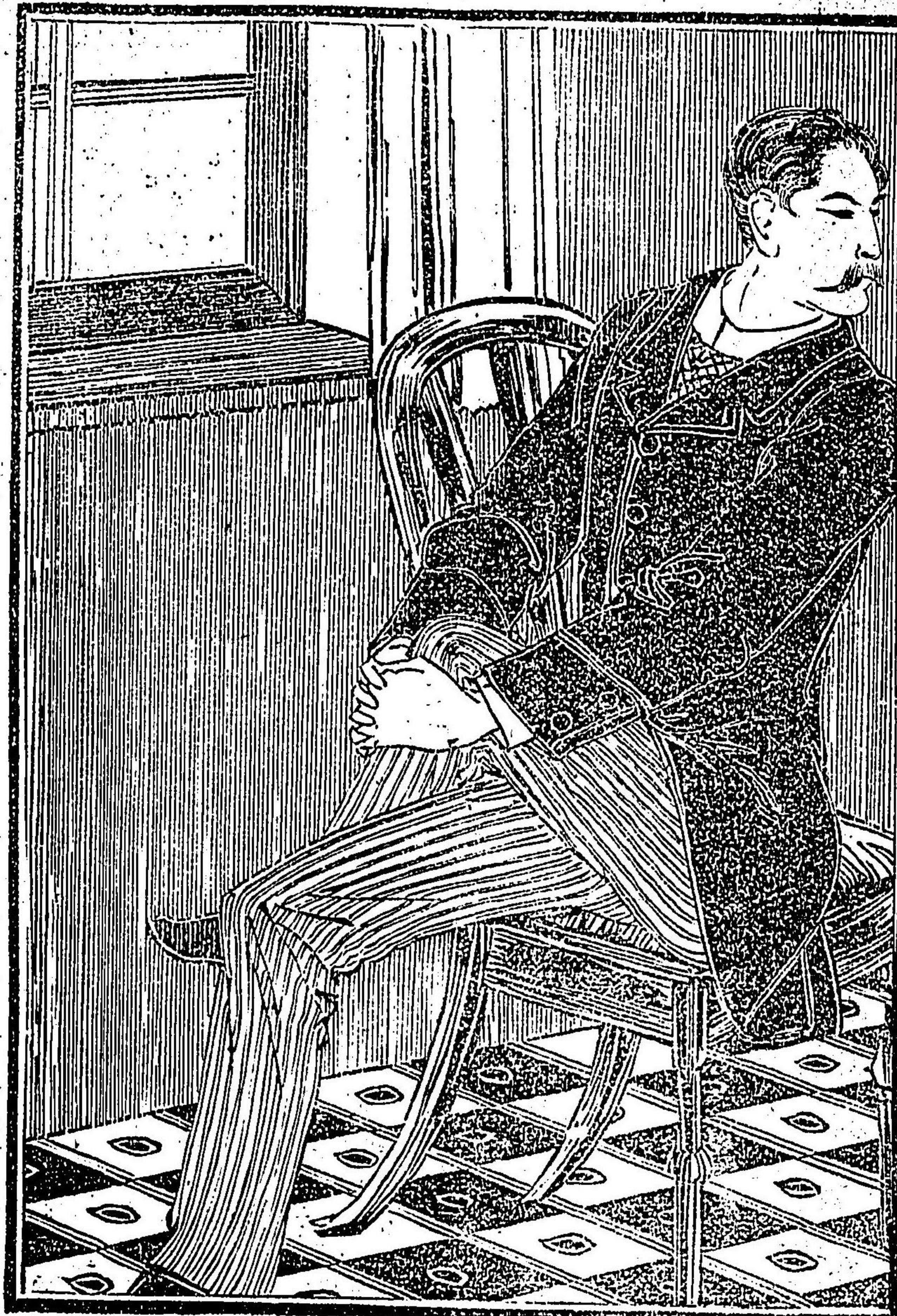
美少年序詞

人情風俗を筆に寫しめて世人の心裡を娛ましめ幼童婦女をして
 教育の階梯と爲さしむるものは即ち小説なり小説の世に裨益なる
 亦大ならずや然りと雖も小説の中にも多く男女の淫奔を掲げ風俗
 腐敗に係る事柄を載するものあるは却て教育を破り婦幼をして世
 は眞惡を流さしむるに至るものなり故に或人曰く小説は淫惑の媒
 好にして讀むに易なしと然れども是等は舊來世上に流布する人情
 本と唱へしものにして實に一讀して卷を覆ふに絶ゆ方今小説の盛
 んにして小説は文學上の花と眺め花壇と稱するの好機に適へり是
 れ中古の人情本の如き淫惡の弊害を洗除し小説の小説たる眞味を
 深く作者の筆に込めもて世人等が愉々懐々として心裡を喜ばしめ









持13
709



美少年

明治廿三年一月中旬

三味線堀の近傍

三筋町の隠士識

んと爲すにあり都新聞社の主筆沢香先生泰西の小説を博く閱りて其尤も奇と妙と爲す小説を譯述し時々新聞紙へ登載するもの數十種に至れり就中此美少年と題するものあり先生譯述中にも深く丹精せられたるものなり扶桑堂主人一讀して曰く嗚呼美少年々々此美少年は果して世に愛せらるゝると必定なりと即ち請ひ求めて一冊子と爲すに當り予に託して叙せと予常に多事もて序をものするの閑を得る能ず故に此美少年の頗未如何は暫らく讀者の美目に就て深く愛せられんこと序詞に換へて云ふ

涙香小史譯

一回 (不仕合せ)

昨年の春或夜の事オペラ、コミクと云ふ佛國の名高き芝居に男一人女二人を一組としたる見物あり女は數年前に死亡したる銀行頭取野瀬何某の未亡人なる野瀬夫人と娘紫紋嬢にして男は其叔父野瀬保路なり今宵は兼て保路の眼鏡にて見立たる少年を此樓敷に迎へ給と様子を見たる上にて愈々嬢の許嫁を定めん爲なり少年は未だ來らば三人は心待に之を待てり

野瀬夫人は年四十三なれど其心甚だ若く殊に奇妙な癖ありて何事も穩かなるを好まず芝居や小説に在る如く非常の艱難に逢ひ非常に危き所を潜り身を碎き心を碎くなど總て波風の荒きを好めり去

れど不幸にして今まで一度も左様な際どき場合に出逢たる事なし
 今は一幕済みて次の幕未だ開ざる間なれば夫人は最不満足なる顔
 よて保路に向ひ「チエ保路さん私しほど仕合せの悪い者はありませ
 んよ未だ生れてから不仕合せと云ふ事に逢た事がありませんもの
 保路は例の癖かと思ひながらも姉さん夫ほど結構な事はありませ
 ん不仕合せに逢た事がないの實に仕合せが好いのです(夫)イエ是が
 回り合せの悪いのですよハイ私しは爾思ひます斯うして何不自由
 なく暮すのが運の盡ですよ小説などにある様に泣たり苦んだりす
 るのが本統に面白い生涯ですイエ婚禮も其通りです親の承知せぬ
 のを無理に男が引連れて他國へ出奔し或時は船から大洋へ落され
 たり又或時は山賊に捕はれたり其度に男が命空々になつて救つて
 呉れるなど、芝居でする様でなくてのイエ爾ですよ私しは貴方の
 兄さんと思ひ思はれて婚姻したけれど餘り穩かてホソに不仕合せ

な事だと思ひましたよ親と親とが直に承知して此な目出度い事い
 ないなど、當前の事を云ふのですもの是で、當り前の婚禮ですワ
 (保) 姉さん何と分らぬ事を云ふ人ない夫で、此紫紋嬢も貴方の
 嫌ひな男に遇はれて墮落するが好と思ひますか(夫)爾までも思ひ
 ませんけれどアノ蘇格翁の小説に在る柳姿嬢が荒狂ふ牛に追掛ら
 れる所を其戀人が牛を射殺して助ける様な恐しい波風が是非一ツ
 欲しいと思ひますアノ小説を讀む度に羨ましくてなりませんワ(保)
 左様サ彼の小説で、仕舞に女の發狂し男の泥の中へ埋つて死す
 ますから夫に此頃、生憎荒狂ふ牛もな、サ貴方の様な事を言て
 ん生涯紫紋嬢を一人物で置く外ありません許嫁を定めんとする
 祝事の矢先に當り如何に癖どの言ながら此忌は、き話をされ紫
 紋嬢の聞苦しく思ひしか阿母さん最う大抵にして何か外の事を話
 して下さいと云へど夫人の耳にも掛かず、爾話一の尾を嗣ぎて成

る程牛の荒るの、此頃ありませんけれども、ナニ男が女を助ける
 様な折の幾等もあります。ワ火事で家が家と家の間へ鎖込れるとか
 強盗に縛られて、(保)イヤ最う好加減にお止なさい。今に帆足鋭夫
 が見へますよ。若し貴女の様な話しを聞けば愕然して逃げて仕舞ます
 外の面白い話を仕やうで、一嬢の叔父の仲裁を有難く思ひしか。禮
 云ふ如き目附にて其顔を見上れど、夫人の更に頓着なもオヤ帆足さ
 ん、其様な人ですか。私、幾度かお目にも掛ったけれど、其な譯の
 分らぬ方でないと思つたから、今夜猶ほ篤と見て、嬢の舞にも定めや
 うと思つて居ますのに、眞逆話しに愕然して逃る様な方ではありま
 すまい。アノ方は外務省の試補とやらで、財産も私どもに劣らぬと云
 ふじやありませんか。是から出世すれば、追々世界果までも世張
 する事になりませう。其時は定め、様々の險呑な目にも逢ふだらう
 と思ひますから、私しは夫が願も、くして歸にても仕やうかと云ふ氣

になつたのですのにと、必死に主張する折も、折彼の帆足鋭夫は入り
 来れり先づ夫人に向ひ次に嬢に向ひ終りに保路に向ひ一粒揮の言
 葉にて上品に挨拶すれば、夫人は逃さず押へ留め、子エ帆足さん貴方
 爾は思ひませんか。婚禮の中で一番上等なのは、女が思ひ掛ぬ災難に
 逢て生るか死ぬかと云ふ場合に迫つて居るのを、男が見事に救ひ出
 すとか何とかして、丁度小説にある様な波風のある婚禮をするに、限
 ると保路は心の中にて、ア、最う助からぬと、潜に嘆息を吐けども、帆
 足は嬢を手に入るか失ふか、茲が決所の堺と思へば、日頃口敷なき性
 質なれど、然るべく調子を合せ、ハイ夫が此上もない幸ひです。御承知
 の通り、ホントンの物語には昔し西班牙の人が、女房の氣に入られ度
 ために人知れず我家を焼き、女房が烟に巻れて居る所を助けたとさ
 へ言ますから、未亡夫人は初めて笑顔を作り、ホンニ貴方ばかりは能
 く道理が分ります。貴方ならば話せます。(帆)所が近頃では、火災保険

もあり又放火を罰する法律もありますので(夫)オヤ／＼法律があるからとて貴方は今の言葉を取消すのですか、ア、益々出て益々分らぬは此夫人なりと保路は苦々しく思ひしが此時忽ち舞臺に當りチヤリと火の影見へたれば見物の中にソテ火事だと叫ぶ者あり夫人は聲と共に震い上りて大變です何うしませう火事ですとよと我を忘れて立上り保路は嘲笑ひてソレ貴方は火事などを祈ッて居たから敵面です此通り(夫)ア、恐しいと聲さへ全く變りたれど直に一人の謠者舞臺に現はれ來り何事にもあざざれど驚き騒ぐと勿れと大聲に告げたれば満場漸く安心して復の如くに鎮りたり保路は益々嘲けり姉さん失望せう本統の火事ならば帆足君が此紫紋襪を烟の中から救ひ出し立派な手柄を見せるのに夫人も今は落着きて夫だから私しは不仕合せだと云ふのです私しが居れば折角燃掛けた火事までも消て仕舞ふのですものホン統に憎らしいと思

ひますワ斯く怨めしげに言ひたれど夫人は必ずしも不仕合せにあらず火事は見物の安心せし間に早や其勢ほひを加へ樂屋一面に擴りて満場見す／＼煙の中に埋まりたり幾百万の見物は逃端に迷ひて此儘に焼殺されんとす、ア、煙、ア、焦熱地獄、四面八面より唯助けて呉れエ／＼の聲起るのみ、是ぞ有名なるオビラ、コミク、大

第二回 (人の波)

我れ逃れんと騒ぎ立つ見物の混雑は云はん方なく斯る中にも野瀬保路は事に慣れたる男なれば驚き狂ふ兄嫂を制し止め姉さん靜になさい火事よりは群衆が恐ろしい浮り出れば群衆の爲に踏殺され

ます野瀬夫人は唯無中なり早く／＼此戸を／＼保路さん開て下さい帆足さん開て下さい保路は猶ほ落着きて斯様な時には一人差圖する者がなくては了ぬ思ひ／＼に逃だしては別々に踏殺されるま

の事ですサア姉さんは帆足君に手を引てお貰ひなさい紫紋嬢は私
 しが抱いて一足後から進みます私の差圖に背いては了ませんよ帆
 足親夫は未亡夫人の手を引くを好まず成らば未來の我妻たる紫紋
 嬢を擁へ度く思ふれど役不足を云ふ時に非ず夫人を小脇に擁狭
 めば保路は嬢を抱上り必死の力を肩先に込上て推開かんと櫛の戸
 に突當れど早や戸の外廊下には逃去らんとする群衆推合ひ壓合
 ふ折なれば戸は一寸も開んせざ内より突く一人の力は外より推
 す幾百万の力を押排くに足らず帆足も之に力を合せ金剛力に推出
 せば戸口僅に二尺ばかり開きたり隙を得たりと漕出す帆足に續い
 て保路も突出たれど人波に巻込まれ保路の號令届けばこる踏んど
 すれど足さへも地に附かず帆足は夫人を扶しまし早や幾間かを隔
 てられたり保路は後より仰上つて眺めんにも身體は唯だ人と人と
 に持行ゝるのみ肉薄いて伸るに由なし今は何の暇あつて帆足と嬢

の身を氣遣はんや唯紫紋嬢を放たぬが勢一杯なり若し誤つて身を
 踰限す事も有らば直に踏倒さるゝ事必然なれば唯運を群衆に任
 死は紫紋と共に死ん一人生て返るも詮なしと抱き一儘に聲を張上
 げこん紫紋確乎と握まつて居る手を放すと助からぬぞ恐れるには
 及ばぬ確乎と紫紋は苦しき息の下より私しは大丈夫です阿母さ
 んは何うしました(保)阿母さんは帆足が連れて居るから心配ないど
 云ふ聲さへも万人の叫びに没られ途切々に聞ゆるのみ此時火は
 早や樂屋を焼抜たりと見に一勢急に噴來たる旋風の如き黒烟りに
 今まで儘に残りたる廊下の燭光は忽ち消え前も暗後も暗目に入る
 者は煙の味のみ涙に咽び煙に咽びて推つ壓されつ確倒れ行く暗の
 中ある揉掻き合は唯肉潰れ骨碎くるかと怪しまる此絶命の場合に
 落ては人も唯禽獸のみ共に助くる心は失せ唯だ人を殺して身を助
 げんとす夫は妻の手を放つて悔ひず妻は背なる兒を捨て悲しまず

足に掛る半死の死骸は踏にじつて先に越へ前に遮る老人の身は突
 倒して道を開かんとす友食のみ友倒れのみ誰か他人の難義を思は
 ん嬾は苦しき聲の下にて叔父さん最う私しは助かりません(保)確
 乎せよ確乎(紫)イエ最う助かりませんから貴方は獨りお逃なさい
 私しを捨て下さい放して下さい(保)死なら一緒に確乎せよ必死の
 中なれど保路は猶ほ姪を捨て己れ一人助かると願はず抱たるまゝ
 黒暗々の裏に揉るうち人の津浪は早や渦を巻きて梯子段まで流
 れ寄りたり梯子段は逆落しなり逆巻き落る瀧の如く將棋倒しに倒
 れんとす此所を首尾能く下る時は出口まで程もあらざど先に落
 りたる人々は後より推るゝが辛さに必死の窮策聲を限りに梯子段
 の下は火になつたぞ火になつたぞ降て来れば命がないぞと口々に
 叫び立つる此聲に威されて先なる群衆は又後に向き一生懸命の力
 を以て逆階段を登り来らんとす行く波に歸る浪其突合は最劇し

く不幸にも其間に介まりし人々は前後より挟み打なり身の碎けぬ
 を怪しむのみ彼の保路は運わるく此挟み打の絶所に立つたり逆
 来る人浪の勢ひ強く思はず二三間推戻され又突返されんとする折
 しもア、運の盡かな抱き居たる紫紋嬢をば群衆の中へ取去られた
 り失望絶望男の身として確に受合たる姪を失ひ一人おめくと歸
 らるべけんや共に死ふと決したるに何の顔を下げて助かり歸らん
 我命のあらん限りは群衆を推割くて紫紋を尋ね出さんと今は狂
 氣せし人の如く前後左右に廻回る此時最細き手にて我腰に因負る
 者ありア、嬉しや紫紋なり紫紋にあらで誰か此細き優かなる手を
 持たんや保路は又も扶け上げ紫紋か紫紋か確りせよと云ふに聞取
 り難き幽かな聲にて僅かに「ハイ」と答へたり是にて勇氣百倍し宛も
 大涙に扱手を切るが如く揉に揉んで猛るうち大涙は又前に推し返
 し又も梯子段に近附んとす最う大丈夫だ確乎もよ梯子段を下りさ

へすれば出口へは譯もないからと壁を限りに願ませば紫紋は既に
 氣絶せしか返事もなし動きもせずコソ何うしたと抱上ぐれば人に
 挟まれて重き事戯の如し機を轉がす浪の力浮上らんとして足も
 せず沈んとすれど沈みも遣らず唯半空に支へられたる儘何時しか
 に段を下れり固より大劇場の事にしあれば火の勢ひも未だ茲には
 達せず早や出口は目の前に見ゆるゆゑ又一勢ひ推進みて漸く外に
 は出たれど猶ほ是れ群衆は散じもせず集ひ集へる雑踏は芝居の中
 よりも甚しけれど唯だ人ど人との間に幾分の隙間ありて足も初め
 て地に附けば潜り去るにも便利なり空中は一面に紅の火焰を照ら
 せど保路は見向もせず唯我身と我姪を九死の中より救ひ出したる
 嬉しさに手負の獅の荒狂が如く前後も構はず突退け跳越し漸く
 して稍や人薄き所に出れば茲には夫々手當する人ありて大地に廣
 く薙を敷き怪我人などを積上げ有る故初てホツと息を吐き氣絶せ

第三回 (練り言)

る紫紋を抱降してコソ紫紋最う助かつた確りせよ其聲深く通じて
 か最幽かなる聲にて「ハイ」と答ふる紫紋の顔を初めて見れば個は
 如何に紫紋には非ずして全く見も知らぬ女なり年頃は大抵似寄り
 たれど衣類顔附全く別なりア、何とせんく

全く我姪の紫紋と思ひ命に替て救ひたる其女紫紋にあらで見ず知
 らずの他人なりどい野瀬保路の失望想ふべし餘りの事に去りも得
 やらず女の様子を見遣るにアナ思ひし紫紋嬢に似も附かぬ最
 貧しむなる女なり顔立の美しけれど艱難の中に育ちしと見れば何所
 ともなく悲しげなる相を帯び世に云ふ愁へに寢れし者なり素より
 此芝居に入込み居たる者に人の門に立つ乞食の類に有まじけ
 れど日々人に雇れて僅に其日の命を繋ぐ賤しき身に相違なし我
 より紫紋かど問ひし時ハイと答へて欺きたる其心根こそ憎けれト

稍や腹立しく思ひたれど斯る時に互に救ふが人の務めと氣を取直して聲を和ら前のコノ紫紋でないじやないか私の未だ助ねばならぬ人があるのでは前の介抱の仕て居られぬ其所へ来る巡査にでも頼み家があるなら届けて貰ふが好いと云捨て立去らんとするに女も少しの我に歸り「お差支へがなくば何うかお名前だけお知せを願ひます必ずお禮に上りますから保路の斯る者より禮を受け度の非ざれど此女若し明日よりして口糊に困る身なるも知れず左もある時の助け序てに多少の金子を施さば其上の功德のあらじ佛作つて魂入れぬ世の譬へもある事ゆゑと手早く名札を取出しつ投與へて此所を立去りしが見れば火の早や芝居の入口まで燃に來り邀多の巡査之を圍みて狼に人を近寄せず殊に此火の模様にての紫紋の他人に救はれしか左なくば焼殺されしと必然なり今より火を潜りて入たりとて救ふ事の叫ぶべきにあらずア、如何にせば好ら

んか考へたりとて詮方なし行き難けれど野瀬夫人の許に行き此次第を話す外なし事に由りては我が身が今縁もなき女を助けし如く紫紋も亦縁なき人に扶けられ既に家まで歸りしも計られず兎も角茲に佇立みては徒らに時刻を移すのみなればと進まぬ足を踏めつゝ漸く火事場を遠ざかり野瀬夫人が門口まで歸り來たるに二階の窓より燈火の影見ゆるにぞ扱ころ夫人は帆足鏡夫に救ひ出され無事に宿まで歸りしならめ左すれば鏡夫も猶共に留まれるならん紫紋も果して歸りたるか夫ども獨り火の中に埋められ最早や亡き身となりたるかど轉ど打騒ぐ胸を鎮めて入口の戸を叩けり内より走り來るは兼て知る此家の下僕なりア、お歸り遊ばせ先程から夫人が最う嬢は何うした紫紋は何故遅いと一通りの御心配ではありませんお嬢様も御一緒でせう早く爾申て夫人に御安心させませうと急ぎて内に退かんとす保路の失望は如何ばかりぞア、紫紋は未

た歸らぬと見ゆ何の顔さげて其母に詫んやと殆ど再び馬車に乗りて逃去らんかと惑ふうち早や野瀬夫人は降來れり保路さん紫紋は何うしました紫紋や早く無事な顔を見せてお呉れど狂氣の如く騒ぎ立つを保路は制し止めイヤ姉さん茲では話しても出来ません先づ二階へお上りなさい手を取添へて推遣るに夫人は此一言にて直に紫紋の歸らぬを知り悲しみに心迷ひしかア、此様な事ど知たら自分て手を引て來る者を何故先ア貴方に托せたか私なら一緒に死まず一人助かッては歸りませんと叫びも取へず階子段を驅上れり保路も續て上り行くに帆足親夫も茲に在りて保路の顔色に由り早くも我愛する紫紋嬢の歸らぬを知りたれど親夫は流石に男だけ夫人の如く騒ぎはせず唯心の底にて親ら嬢の手を引ずして母の手を引たるを恨むのみ夫人は前後の會釋もなく保路さん何故紫紋を連れて来ません紫紋は何うしました何所に居ます保路の深き悲しみを隠

せし聲にて何うも私しの運が悪いので群衆の力に嬢の身を取放され様々に探してもしど是まで言て言葉を開きたり若し間違へて外の女を救ひたる事まで話さば了簡狄き夫人の心を益々騒がすのみならずと恐るゝなり(夫)探しても分らぬから其儘捨て歸つたのですか貴方は先ア何の顔で一夫だから言ぬ事が今時の男は唯自分の爲ばかり考へ女などは何うでも好いと思つて居ます昔しの小説などにおる様に命を捨てても女を救ふと仕ないので保路は聞兼て姉さん夫は餘まりです貴方は唯つた今是なる帆足親夫に助けられて歸つた事を忘れましたか若い男の身でありながら四十を越した貴女を救ふのは昔しの英雄が若い女を救つたよりも賞て好い手柄です私一を悪く云ふは御勝手ですが帆足の前をお憚りなさいと充分に嬌むれど夫人は之を耳にも掛すでも紫紋は誰も救つて呉れません今は何所に何うして居ます(保)イヤ誰も救つて呉れぬとは云はれ

ません何いうた事で情深い人が救ひ出し今頃は充分に介抱して呉
 て居るかも知れずまい夫人は此儘なる慰めの言葉に又忽ち勇み
 立ち本統に若し救つて呉れた人があれば私しは我が命を捨てて
 禮をします其様な人に紫紋を遣りたいと思ひますハイ仮令乞食で
 有ふとも其様な人なら救に紫紋の婿にします鏡夫は口數きかされ
 ど嬢が身を氣遣ふ心は夫人にも劣らねば便々此線言を聞く時に
 わらずと保路に打向ひ併し貴方此儘では居られません兎に角二人
 て火事まで引返し直に怪我人などを檢めませう其中に嬢を見留る
 かも知れません(保)や實に爾だ姉さん暫くお待ちなさい是から二人
 で見て來ますからと斯く言ふ折しも戸外にて馬車の停まる音した
 れば保路は早くも聞留め若しや我思ひし如く何人か嬢を救ひ馬車
 にて送り届けしにはあらぬか夫ども嬢の死骸なりせば何とせんと
 氣遣ふ心に迫立られ無言の儘にて下の間に飛下り玄關を開推けば

玄關を押開いて果せるかな年若き一人の紳士嬢を馬車より扶け出
 し痛はしく手を取りて此方へと進む所なり保路は紳士に禮云ふ事
 さへ忘れ「オ、嬢か紫紋か能く歸つて呉れた阿母さんが待つて居る
 (紫)ア、夫で安心しました阿母さんは無事です(保)皆無事だ安
 心しなど云ふより早く手を取りて二階まで引上らんとすれば嬢は
 救はれし紳士に向かひ貴方の御恩は忘れません母にも禮を申させ
 ますから何うか一緒に二階まで出下さいと心を表に現せば保路
 も實にも氣が付き「サア先づ此方へと請じつゝ玄關の明に照し其
 顔を眺め見れば世にも稀なる美少年なり

第四回 (結ぶの神)

紫紋嬢は幸にして助けられ馬車にて家まで届けられたり去れど其
 有様を見れば衣物は裂け髪は亂れ漸くに我身を支ふる計なれば叔
 父保路は我手に扶け支へつゝ彼の少年をも手招きて二階へと登り

たり母なる野瀬夫人は此くど見るより走り寄りて抱かへ先ア能く助かつて呉た能く歸つて呉れた保路さんが邪慳にもお前を振捨唯一人歸つて来たから私しは死ふかと思つて居たの、今時の人は本統に邪慳だよだから私は嫌ひだと云ふのサても先ア助つて呉れて有難い何かへお前を助けて呉れたのは何誰だへ私は期ど昔の小説にある様な殿御だらうと思つて居るよと半ば狂氣の沙汰なれば救ひ呉れたる美少年も順には室の中へ進み得ず手持無沙汰に戸の外に佇立めり叔父保路は腹立しくも思へども夫人の日頃の氣質を知れば其言葉を咎めもせず彼の極り悪げに佇立める少年の傍に寄りサア此方へお這入りなさい貴方の今夜のお手柄の私しども一同に取りてお禮の申やうがありませんと云ひつゝ此方へ引出せり唯見る年の二十四五の上に出し眼爽かにして鼻筋通り締りたる口唇にハ斷乎たる男子の決心を包み秀たる眉の上への風流なる才子

の風采を現す眞に是れ昔しの小説にも有りさうなる一個の美男子なり夫人の一目見て飛立ちつゝ首筋に手を捲きて留め度もなく心の嬉さを注ぎ出すの如何に我子の恩人との云へ殆んど人目をも憚からぬ程なれば保路の苦々しく思ふうち彼の少年も斯くまで深く喜ばるゝを好ぬ如く徐ろに夫人を推退け一粒揮の言葉を以て棄る違慮勝なる様子を見せ口數少なく挨拶せしむ才智の程さへ察せらる保路の此珍しき少年を何者なるぞと眼の隅より眺むるに稍や着古したる服を着け肉衫の襟より袖口まで少しく汚目に見ゆる様富貴の家に育ちたる人への非と素より火事場の混雑に身姿を紊せしに相違の無けれど兎に角我が目鏡にて紫紋嬢の舞にも見立たる帆足鏡未より身分低し察する所る些少の給金にて世智辛く世を渡る商賣會社の書記に非ざれば私立學校に雇るゝ助教師の類なる可し左まで尊敬するに足らざれど何を云ふにも我姪の恩人なり持

なさずには置可きに非ず手を取りて上坐に進めんとする折しも偶と
 氣を附くれば少年の手先を怪我せし者と見ゆ半拭にて堅く縛り其
 上に血の浸み出たるの愈々小説の主人公なり「や貴方の怪我をした
 のですす（少年）ナニ是の僅の傷です硝子窓を叩き破らうとしてツ
 ヒ手の先を切ましたたが怪我の割には血が多くてと云へば紫紋嬢其
 後を繼ぎ私しを助て下さるのに其様な怪我を爲つたのです私しが
 煙に咽て息さへ止らうとした時に此方が鐵の格子に依てある厚い
 硝子を叩破つて下さつたのですでも其所は太い鐵の格子で素より
 出る事は出来ませず様々の辛ひ想ひして終に裏門から救ひ出して
 下さつたが私しも其後の充分に覺へません煙の爲に氣絶して暫く
 何事も辨へずに居ました所ら順て心が覺て見れば救助場の礎の上
 に寐て居ましたハイ其傍に此方が矢張信切に介抱して居て下さい
 ました小年は言譯する如くにイヤ濟ぬ事とは思ひましたたが嬢様が

餘程お疲勞の様子ゆゑ直に救助場へ抱き込みました救助場の役員
 が八ヶまじき事を申すゆゑ私しは嬢様の親戚の者だと申して其
 中へ遣入ましたたが是ばかりはお詫を致します夫人の又も飛立て何
 貴方お詫などと貴方の御信切は親戚も及びません既に此なる保路
 さんは叔父の身でありながら嬢を捨て逃て歸つたのですよイエ本
 統てす全くです夫を貴方が他人の身で救ひ上げて下さるとは實に
 お禮の申し様がありません親戚どころか貴方は私共の命の親て
 す嬢が死ば私しも悲しみに死る所を貴方が助けて下さつたのです
 オヤ先ア私しとした事が未だお名前も伺はずに「ハイ貴方は今か
 ら私共の第一の親戚ですから何うかお名前を伺はせて下さいま
 少年は名前を知すを好まぬ如く暫し迷惑氣に猶豫せしが爾まで
 仰有られては却つて痛み入ます名前は愛宕下秀雄と申す（夫）ア
 秀雄様お名前まで美しく居ッしやると夫人は此少年に醉され

たる者の如し保路は少年の遠慮勝なる様子を見て少く感心する所あり不_レヤ名ばかりでは了_レません私も共から改めてお禮にも上り度と思ひますから御任居を承まはつて置きませう秀雄は少し笑を含みでイヤ住居ですか私には未だ住居が有りませぬ(夫)とは又何う云ふ譯ですか摸様に由では私共へお泊申しても好うございませ(秀)實は斯う云う譯せず私には今日里島から漁車で此巴里へ参り荷物を停車場に遺した儘相當の宿を探しに出で取敢ず大旅館へ宿を定めましたが夫より直に停車場へ荷物を取に引返す途中で兼て音楽が好きですから思はず芝居へ遣入りましたので(夫)オヤ爾でずか貴方が其様に芝居へ遣入る心の起つたのは全く結ぶの神様が引合せたのですハイ全く貴方に紫紋を助けさせる爲ですと早や娘の所夫と定めたる如くに言は保路は我見立なる帆足鏡夫の心中を察し結ぶの神とは何事ぞと眼附にて夫人を叱り留めても貴方は

初めて此巴里へ来た譯では有りますまい(秀)ハイ私には此巴里の生れです三年前にモリス島へ行き其島で商賣を仕て居る従兄の手傳を致して今まで滞留致しましたが此度其従兄が數多の財産を遺して死去しまして其後は私しの外に嗣ぐ者は有りませず去ればとて私しは何時まで其島に居る心も致しませんゆる身代を引纏めて此度歸つて参りましたと云ひつゝチラリと俄の顔を尻目に見たり(保)是を御縁に追々親密なる御交際を願ひますゆゑ先づ私しの姓名をもお知せ申ます私しの瀬野保路とて此なる紫紋の叔父で有ります又茲に居る少年は帆足鏡夫と云ひ紫紋嬢の未來の所夫です近々婚禮して夫婦になりますと保路は事に慣れたる紳士だけ又早くも後々に間違の無き様にと斯は鏡夫を披露したるに此一言は一同の耳障りなり恩人秀雄は思はず色を變へ紫紋嬢は見上げ居たる眼を忽ち下_レ夫人は火ツと怒りて立上れり獨り心に喜ぶは彼の帆

足親夫なりア、夫人は立上りて如何なる事を言ひ出づるや

第五回 (命の親)

親夫は紫紋嬢の未來の聲ですと保路が披露せしを聞き一同の驚く中に野瀬夫人は椅子を厥立て起上りおや保路さん貴方は餘計な事を仰有るではありませんか親夫さんが何てわらうが私共の身に取ては秀雄さんほど大事な方はありません紫紋嬢の命の親ですもの秀雄さんは是からは何うぞ毎日でもお話しに入らやッて下さいませ彼の愛宕下秀雄と云へる美少年は密らす障らすイヤ又伺ふ事に致しませうとて早や立去んとする様子なり親夫も無言ッて居るは作法にあらねば秀雄に向ひてイヤ今夜紫紋嬢をお救ひ下さったのは私共の身に取り此上もない鴻恩ですと言葉短く禮を述べたり此禮は唯だ紫紋嬢は私共の妻ですからと言はねばかりに聞えたり夫人は又も秀雄に向ひ紫紋の命は今日うら貴方の者です何うか御遠慮なくお出を願います夫に又今仰有った通りで見れば貴方には外に御親類もない様に思はれますが(秀)ハイモリダズ島で死んだ從兄がツツター一人の親戚でありました(夫)是からは私共其御親類の代りを致しませう最う譯隔なく親類の附合を願ひます貴方此次には何時入しッて下さいますか(秀)ハイ二三日の中に又嬢様の御機嫌を伺ひに参ります今夜は嬢様も定めてお疲れて有りませうから是でお暇に致しますとて四人に向ひ一様に分れを告げ秀雄は其儘立去れり夫人は忽ち機嫌を悪くし最恨めし氣に保路を眺めて夫御覽なさい貴方が色んな事を云ふ者だから碌々話もせずには歸つたでは有りませんか保路は充分眞面目に成りイヤ姉さん貴女は餘り輕々しく仕過ぎますよ成る程嬢を救ふて呉れたから禮を云ふは好いけれど未だ身の上も分らぬ者に何時でも尋ねて來いなどは

ト作法に負きます夫人は目に角たてオヤ命の親ですもの何時來

たどて構ひません此家は私一の家です私一の氣に叶つた者なら毎日でも呼寄せます(保)イヤ素より貴女の家です貴女が此家の主人です併し私しも餘りに見兼ねる事があれば忠告もせぬならず(夫)イヤ何と忠告なさらふが命の親を引入れるに誰にも遠慮は要りません(保)貴女は無暗に命の親くど仰有けれど私しには胸に落ぬ所がありませ(夫)ナニが胸に落ません貴方が捨て逃て来た者を後から斷り無しに助けて呉れたので悪いのですか(保)イヤ助たのは有難いけれども何故親類だなどと嘘を吐き一緒に救助場へ遣入りました何故此家まで故々連れて参りました紫紋は之を聞兼てイエ夫は私一から願つたのです(保)夫が私の胸に落ぬ何故お前はアノ人にも誰にでも頼て母の許まで使ひを遣て呉れと言はぬ使ひさい寄越せば私が飛て行てお前を救助場から連れて歸る者を(紫)私しは聲の洶るほど貴方や阿母さんと呼ばましたけれど何所に居ッーやる

か分らず無事にお歸りなすつた事か夫ども若し未だ火の中に包まれて居はせぬかと泣てばかり居ました所ろアノ方が阿母さんを探して來て遣うと云ひまゑた夫ども私しは救助場に一人待て居るのは厭ですから兎に角家へ歸つたなら様子が分るだらうと思ひアノ方に手を引て貰ふて馬車の在る所まで來たのです(保)でも馬車がわつたならお前は一人乗て歸るが好い何故アノ男が遠慮もせず相乗をした(紫)其時は未だ私しの氣分が充分直りませんので若し馬車の中で氣絶でも仕てはならぬと思ひ(保)フム夫と一緒に乗たのか嫁入前の女が若い男と差向ひて合乗をして真逆アノ男が得たり賢いと附入てお前の口を吸た譯てもあるまひけれど夫人は鋭く横鎗を入れ貴方じやあるまいし其様な事を仕ますものか自分がするから人までもするかと思つて(保)是は恐れ入る私しが何時其様な事をしましたは早くも言開きて「イエ叔父さんアノ方は馬車

の中でも温和しくして居ました只だ私しに父が未だ活て居るかの兄弟があるかのと其様な事を問ふた丈です(保)それ見た事か彼奴目中々油断が出来ぬ跡取女を助けたらうかと早や嬢の身の上を探りやがる(紫)何故貴方はその様に彼の方を疑ひます兄弟が有かないかど身の上の事を問ふのは當前ではありませんか(保)オヤ紫紋までアノ男の肩を持つのか誰も巳の言葉を信と思ふ者はない言ふだけ無益だからサア帆足君最う歸らふ「帆足銳夫は先母とより我身に最恐るべき戀の敵の出来たるを見快からず思ふ折なればハイ歸りませう」と早速に立上れば嬢の様子を見て氣の毒に思ひしが立ちて銳夫の手を取りつ貴方お心を悪くはなされまますまい手私か他人に助けられて貰つたのは誰の所爲と云ふてもなく唯獨り手に此様な事になつたものですから此優しき言葉に銳夫は宛も憐たる人が水を呑みたる如く蘇生る心地したれど索より居直りて又腰を据

ゑる時にあらねば其儘野勢保路と共に暇を告ぐ此家を立出たり暇の時も夫人は保路を憎む如く口さへも利かさりき頓て二人は半町ばかり歩みしが保路は思ひ出せし如く何ふも姉は狂氣だから因る全くの狂氣だ最うアノ少年を婿にでもする氣で居る君は何と思ふか知らぬが僕は何ふもアノ少年を正直な奴とは思はぬモリス島から今日歸つて来て未だ家がないなどと「僕ハ明日大旅館へ行て聞合せて見る彼奴ハ大旅館へ宿を取たと云ふのだから「夫に君彼奴ハ愛宕下秀雄と名乗つたけれど其様な名字がある者か愛宕下どの町の名だぜ彼奴必ず本名を明してハ自分の素性が分るから好い加減の事を言たのだ口先も旨いし顔も綺麗だけれど彼の様な奴ハ未だ容易に信用が出来ないて斯く語ふ中に二人ハ早や銳夫の宿の前に着たり

保路銃夫の兩人の語ひながら歩むうち早や銃夫が宿の前に着きたり保路の猶ほ話し度き事のある様子にてお前の草臥たから直に寐る積だらうが少し未だ話もある私も一緒に上ッて行かう(銃)サアお上りなさい私も色々御相談がありますからと云ひつゝ内に歩み入りて玄關番に打向ひ下僕傳助の居るだらう(玄關番)イヤ芝居へでも行たど見へ確か日の暮頃に出ましたか未だ歸らぬ様子です若し焼殺されぬかと思ひます銃夫の舌打しつ彼奴下僕の癖に巳が居なくなる直に家を空ける最う暇を出さねば了んサア野瀬さんお上りなさい傳助が歸らぬなら定めし燈りも點てありますまいが(保)イヤ獨身で暮す者の兎角其様な不自由のあり勝の事サ斯う云ふ私も御存じの通り獨身主義で四十を越した今日が日まで妻と云ふ者を持つ唯一人の下僕を使つて洒然と暮して居るが安樂な代りに夜更けて宿へ歸ると燈りまで自分で點ねばならぬ事が

ある夫だから毎でも寸燐を離した事のないサア此を持って行が好す胴の衣裳を掻探り寸燐の箱を取出して與ふればイヤ是の何うも有難いどて銃夫の先に立て二階を上り廊下にて寸燐を摺り我が居室の入口を開きしか「オヤ」是の變だ奇妙だ非常に取散らしてあるがど云ひつゝ進み入て硝燈を火點しつ居間の中を隈なく見回し「ヤア大變だ留守の間に盜坊が這入て金箱まで明てるソレ此通り中に入てあつた金は一文なもだ保路は驚きて「ナニ盜坊が成る程這入たに違ひない隅々までもアノ様に取散してあるからは併し太した事はあるまいナ銃夫は返事もせず金箱の傍に馳寄り熱心に引出の中を檢めるは定めし大金を入ありし故なるべし暫くして言葉を發し此賊の餘程怪しい充分に私しの内幕を知た者です(保)では傳助だらう(銃)私も彼れてはないかと思ひます實は先日會社の株を買ふ約束をし明日其金を拂ひ込む筈で今日の晝頃銀行から取寄せ

て置たのですが不斷ならナニ此金箱に幾等も這入て居ませんけれど今日に限り金貨と銀行券と取雜せて十萬フランク(二万五千圓ほど)から這入ッて居ました(保)ア、夫は大變だシテ傳助は其事を知て居たのか(鏡)ハイ知て居る筈です今日其金を届けて來た時に傳助が取次をしたのですから(保)夫では益々以て傳助に違ひない併しお前は今日何時頃に家を出たのか(鏡)午後四時頃に出た切り今歸るのが初めてです(保)なるほど夫では明るい中に引渡ッて逃たのだナして見ると傳助は芝居に行き焼殺された譯でもあるまい金でも盗んだ奴は用心して其日直に芝居へ行くと云ふ様な事いしなア併し一寸と二万五千圓だから餘程の大金は大金でも夫がお前の身代に障ると云ふ程でもないから(鏡)左様サ身代に大した障りはありませんが今は丁度時節が悪いので實は此様な事が野澤夫人にでも聞えては(保)爾だ姉は全く發狂して居るから又何

な事を云ふかも知れぬお前は斯するが宜らう警察へ訴へて事を表立たりせず其銀行券の番號だけ銀行へ届けて置けば銀行で直に何號の切手が幾等紛失したと云ふ事を一切の兩替店割引店は申すに及ばず金子を取扱ふ商人へ殘らず知らせ遣るから其手形を以て引替に來る奴は直に捕はる筈だ爾せぬと姉はアノ通り了箇の狭い女で直に又お前の事を何の様に云ふかも知れぬ(鏡)爾うしませうけれども今夜の様な事があつて見れば既に夫人には幾分か信用を失つたも同じ事ですから此縁談が破れはしないかと夫が心配でなりません(保)サア其所だテ彼の愛宕下と云ふ美少年が丁度姉の馬鹿氣た心に當はまり小説の様な工合に突然と出て來たから姉は最う夢中に成て居るが夫でも姉の熱心は藪の火の様な者で燃易い代りに消るも早い私の鑑定ではアノ美少年は必ず如何様物だから今に尻尾を顯し姉も受想を突す事になるだらうテ夫に先づ幸

ひな事は紫紋嬢がアノ通り落着た氣象で一寸と見たばかりでアノ美少年に惚ると云ふ心配はない是だけがお前の強みだ私も今度は腹立まされに姉の氣に逆らふ事はかり云って返って立腹させたけれど明朝は姉の所へ行き氣を永くして静々と説諭もし其上に美少年の身の上を探って少しも早く迷ひの醒る様に仕て遣るから(鏡)イヤ貴方が爾まで骨を折て下さらば今夜紛失しただけの金子は何でも有ませんけれども私しは紫紋嬢がアノ美少年に心を奪はれはせぬかと先程から考へて居ますが(保)成るほどアノ野郎一寸と珍しい顔をして居るけれどアノ身姿では決して紳士でない旨く紳士の様な工合に今夜なども口敷を利す遠慮勝にして居たけれどアノが猫を被ッて居るのだ何時までもアノ通りに仕て居る譯には行かぬ其内には地金が出るから假令ひ紫紋嬢が一時心を動かすとしても紫紋は馬鹿でないから迷い切りに迷いはせぬお前は決して失望す

る事はない今までの通り知らぬ顔で嬢の許へ出入するが好い私に醫押だから大丈夫だ彼奴が紫紋を救つた命の親ならお前は母を救つた命の親だ夫立の事に氣の附かぬ紫紋ではないと猶様々に勵したれば既夫も稍や氣力を恢復し紛失せし金の事も亦是より後野瀬夫人に交る掛引の事も總て保路の差圖に隨ふ旨を答へたり是より保路の彼の紫紋嬢と間違て素性も知れぬ貧しき女を救ひたる事などを話せし末夜も更けたれば明日又逢ひて緩々相談せんと約束しつ分れを告げて歸り去れり此時夜は早や二時に近し芝居は猶饑々と燃盛りて曉方までは鎮る可くも見へざり

第七回 (思はぬ客)

婚姻は人間生涯の大事なり好き妻を迎ふる時は生涯極樂の世界に入りし想ひあれど若し過ッて善からぬ妻を娶るときは一身の厄介是より大なるはなし去れば佛國巴里に住む紳士の中には唯我身の

無事安樂なるを願ひて一生妻を迎へぬもあり金さへあらば妻はな
くとも何不自由なく世を送らるべし末期の水を他人に取せるは死
際の遺憾なれど心浮立たる都の人の常として遠く末期の事までも
考へ置く暇はなし末期の爲を思ひて妻子と云へる生涯の厄介者を
作るに及ばずどの其等の人の平生の言草なり彼の紫紋嬢の叔父な
る野瀬保路も其一人なり二十年以前に兄紫紋嬢の父と共に野瀬銀
行と云ふを設け十五年ばかりの間に夥だしき財産を得たれば此上
世を安樂に送るの外此世に何の目的もなく何時まで此急はしき銀
行の事業に使はれんやとて銀行は他人に譲り今全くの樂隠居に
て世を送れるなり年は既に四十五を越したれど若し此身分を以て
妻を求むれば思ふが儘の美人を手に入ると難からじ去れど妻の我
身の自由を殺ぐ劔なりとて鞠むる人あるも其言葉に應ぜず世間の
評にての保路の若き時に身分高き或令嬢と夫婦約束までなしたれ

ど身分の違ふ爲に其約束を果し得ず令嬢の父母の意見に詮方なく
他人の妻となりしより保路の失望の餘り終に生涯妻を持たずと決
心せし由に云ふ人もあれど其評果して實なるや偽りなるや二十年
以前の事とて今誰も知る者なし家に唯だ一人の料理番一人の
従僕一人の馬丁を使ひ一頭の馬を養ふのみ馬車を置くとも差支へ
なき身代なれど馬車に掛るだけの費用の其外の樂みに掛る事とし
此上もなく洒々どせし暮しをなせり去ればとて全く世の人情を知
らぬに非ず我姪なる紫紋嬢を我嬢の如くに寵愛し時々心の中心
て已に一人の息子があれば嬢と夫婦にして遣て老先を樂しむけれ
ど息子のないのの残念だ嬢を他人に遣るのの惜い者だなど、眩く
事もあれど妻のなき身に息子の出来る筈もなし他人を養子に貰ひ
たりとて他人の矢張り他人なる故養子を迎へるほどの熱心もなし
唯だ其心を祝聖觀夫に移し親夫を我子の如く愛し居るなり

夫の扱置き保路の鋭夫に分れて家に歸り翌朝の身体の草臥に漸く
 十時頃起出しが十一時に到りて朝飯の卓子に向ひたり傍に在りて
 給使せる従僕に向ひ何うだ昨夜の火事の何時頃に消たのだ(従)古
 い芝居小屋だけに仲々燃出がありますよ今方ヤツと消たと云ひ
 ますが未だ黒い煙りが見えて居ます何でも三百人以上も焼死で怪
 我人の數が知れぬどの噂です(保)フム夫の大變だ巳も昨夜の
 芝居へ行って居たが怪我もなく歸つたのの幸ひだつた(従)ア、旦那
 様も入しつたのですか夫の先ア怪我がなくて道理でお召物が代な
 しになつて居ると思ひました何でも帆足さんの従僕傳助も昨夜芝
 居へ行たど云ひますが今朝まだ歸らぬ所を見れば彼奴焼殺された
 かも知れませんが保路の夜前傳助が大金を盗み去りし事を知るが故
 に焼殺されしとは思はぬと口さがない従僕などに左様な事を聞か
 べきにあらず殊には此紛失を成るべく表向きにせぬ様にと鋭夫に

約束せし程なれば何氣なき顔にてフム傳助も芝居へ行たのかナア
 (従)確には分りませんが彼奴は日頃から道樂者で善くない者と附
 合て博奕も打ち芝居などへも能く行きます私しは少し貸がある者
 ですから今朝貴方のお目の醒めぬ中に催促に行きました所ろ玄關
 番の言葉では昨日出た切り未だ歸らぬと云ひますから何でも芝居
 て焼殺されたと思ひます左もなければ幾等道樂者でも従僕を勤め
 る者が主人に斷りもなく餘外で泊る筈はありませんと斯く言ふ中
 に玄關の方に當り誰やらん案内の鈴を引く音したれば従僕は取次
 にと立上れり保路は周章で引留めコレく少し待て今日は食事の
 濟次第姉の家へ行き其外にも行く所が有て夜に入るまで歸らぬか
 り誰で有うと留守だと云つて呉れ従僕は心得て立行きしが後に保
 路は首を傾けハアナ今時分來る奴はない筈だが誰だらう事に寄る
 と昨夜の美少年が今朝最う早速姉の許に行き姉を好い加減に迷は

せて猶ほ已までも煙に巻く積もりで番地を聞て尋ねて来たのかも
 知れぬ彼奴ならば充分に身元を取調べて遣らうと思つて居る所だ
 から逢て遣ても宜いがオヤ意外に手間が取れるぞ留守だと斷つて
 も先が聞かぬと見る彼奴でなければサツサと戸を叩いて来れば好
 のにと眩く中に従僕は上り来り一枚の名札を差出したり保路は受
 取りて「オヤ」是は己の札名だが何の様な奴が持て来た(従)未だ
 若い女ですすよ衣服は貧しい風をして居ますが火事場から逃しても来
 たと云ふ様子です(保)其様な者なら何故留守だと云はぬ(従)イエ
 爾云つても聞ませぬ昨夜火事場で貴方に救はれ此名刺を頂いたと
 申しまして保路は打驚き「フム彼の女か爾か」と暫し何事かを考へ
 し折角救つて遣たから序に少しばかりの金でも遣う(従)イエ私
 しも金の無心と思ひましたが先で其心を見て取たか金などの御無
 心ではない是非お目に掛り度と云ひます(保)爾か面倒臭い事を云

ふ女だ、併し逢て遣う次の間まで連れて来いと命じたり此女は何
 者ぞ何用あつて尋ね来たり、ぞ保路は半ば慈悲の心半ば不審の心
 より逢て遣んと決心せしなり

第八回 (父なし子)

紫紋嬢と間違へて助けたる素性も知れぬ賤しき女が面會を求むる
 どの合點の行かぬ事なれど野瀬保路の半の隣みの心半ば不審の想
 ひより逢て遣んと心を定め次の室へ連れて来いと命じたるに従僕は
 心得て退きしが頓て又上り来り且那今の女は可愛想な程身体が疲
 れて居ますよ階段を登る事も出来ぬ位で私しがヤツと引上げて遣
 りました保路は少し考へ爾か夫では銘酒でも一杯呑せて遣れば少
 しは元氣が附くだらう直に此方へ連れて来い(従)でも貴方何だか
 賤い女です(保)夫は知て居る賤しくても好いからはへ通せと推
 返して言たれば下僕は無言の儘に退きつ手を取りて連れ来り保路

は前に在る空椅子に寄りせたり保路は少女の様子を見るに従僕の言ひしに違はず如何にも痛く草臥れて物言ふ氣力もなきかど疑はる且つ其身分とても昨夜一目見て察せし如く貧苦の中に育てられ日々他人に雇はれて辛くも其日を送れるか左なくは貧き職人などの妻なるべし年は廿歳前後にして顔色も衰へたれど顔立は十八並なり若し手を盡して研き上なば先づ美人と云はるゝ程にもなり難きに非じと思はる殊に其目許其口附何となく智慧ありげに見え其振舞も敢て紳士の前に出でて憶め羞らう風なきは下等の女には珍し保路は先づ一盃の銘酒を注ぎて與ふるに女は辭退する氣力もなく手に取つて呑乾しつ最幽なる聲にてア、之で漸やう人心地が附きましたと云へり保路は猶得二三の食品を取てお前の様子では今朝も未だ食事を仕まいが先づ之でも食べて腹の中を拵えるが宜い

(女) 食物など頂きに上りは致しませんけれどお察しの通り昨夜は

救助場を夜を明し未だ家へも歸りませんからと云ひつゝ麵包一切鹽肉三切ほど食終り暫し身体を息へて先づ私しの身の上から申上ねば分ませんが私しは貴方の様な立派な方に救て頂く程の身分ではありません未だ婚禮もしませぬのに人の妻同様に暮して居ます保路は少しばかりの金を與へて早く此女を満足させんと思しが成る程と答えながら衣籠の中に手を入るとに女は其心を察し「オエお金など頂きには参りせん貴方にお願ひが有まして(保)フム金は入らないが願ひがある何の様な願か知らぬが私は金なら少しは恵んで遣るけれど他人の相談相手になるのは嫌ひで夫に未だお前の身の上も更に知らず(女)でも貴方は身の上も分らぬ私しを火の中から救つて下さいました此上のお情には何うか私しのお願を(保)何の様な願だか一篤と聞た上で返事を仕やう(女)先づ身の上から申す私しは父母ともに幼い頃に失ひまして其後叔父の世話に成

て居ましたか叔父も三年前に死ましたゆゑ頼にする人も無く幸ひ
 少しばかり音楽を知て居ますので女俳優の下に雇れ一二度舞臺へ
 出ますると眷顧にして下さる人が有つて今は其人と一緒に宿を取
 て居ます私しの名は栗岡お添と云ひ其人は羽振柳四郎と申します
 (保) フム其様な世話して呉れる人が有れば何も他人の私に頼む事
 は無い筈だが(お添) イエ其柳四郎と云ふは私しを世話する程の身
 分では有ません私しと共に稼いで漸う其日を送つて居ます生れは
 高貴い身分ですけれどハイ或る伯爵夫人の私生の子とやら申しま
 すので父の名前は分らねど母は十年前に死まして今では私しと同
 じ孤ものです保路は今まで別に心にも留めず聞居たるが伯爵夫人
 の私生の子と聞き何故か少し顔色を替たるも忽ち又左あらぬ体
 復りフム伯爵夫人とも云ふ立派な方が父なし子を産む筈はない
 (添) イエ此國の方でいりませぬ伊太利とやらの伯爵夫人で此國

へ來て居る中に此國の少年と情を通じ懐妊したので今の羽振柳四
 郎と云ふ者です懐妊までしたけれど夫人の父と云ふ人が物堅ひ性
 質で貴族の外への嫁に遣らぬと殊の外立腹して伊太利へ連れて歸り
 ました師た上で人知れず柳四郎を産落し一生不通の約束で柳四郎
 を寺へ遣り夫人の更て其國の或貴族へ嫁りを考たやらで其後も折
 々の世間の目を忍んで柳四郎の顔を見に來たと云ひますけれど柳
 四郎が十四五の時其夫人が死ましたゆゑ柳四郎の自分の出世の道
 を求める積で其寺を出て其後の船に乗て各國を経廻た末一昨年終
 に佛國へ來たのです(保) 其貴夫人の名は何と云ふ(添) 夫の誰にも
 言れませぬ云ていならぬと堅く口留をせられて居ますから(保) 併
 し羽振どの云ふ其名字の何から取た父親の名字でもあるのか(添)
 柳四郎の父親の名を知らせん母が堅く隠して父親の名を知らなん
 だと申ます夫ゆる自分の勝手に羽振柳四郎と云て居ます(保) フム

夫の奇妙な身の上だ一寸李東翁の小説にでもあり相だが柳四郎の何の稼ぎをして居るのか(添)ハイ五ヶ國の言葉を知て居ますので昨年中程までの語學を教て居ましたか其後の或會社へ出勤して居ます保路の何故に斯く根堀り葉堀りて聞しや知らぬと暫く無言にて考へし未夫の爾として所でお前の茲へ來た願ひと云ふし(添)ハイ其柳四郎が昨夜私しと共にアノ芝居へ行きましたたが火事の騒ぎに離れまして多分焼殺されたらふと思ひますので夫々の手續をして切ては死骸だけでも引取り度と思ひます夫に就き焼場に在る死骸を一々検め度と思ひますけれど此様な姿での役人が私しを焼場へ入ませぬから何うぞ貴方に御同道を願ひたいと思ひまして保路の斯る女と同道するを好まざイヤ私が一人で焼場へ行き(添)イエお一人で致方が有ません貴方は未だ柳四郎の顔さへも御存じないのに(保)夫の爾だが併し(添)イエ貴方さへ御承知下さらば

私しは宿へ歸り衣物も着替て参りますから保路の何思ひけん忽ち思案を定めし如くフム夫なら一緒に往て遣ふお前の宿へ行き衣物を着替る間待て居て直に焼場まで同道しやうア、保路は何如なる目的ありて此女の宿へまでも一緒に往んと思ひ立しや紳士の身分に引比べて考へ見れば誠に不審なる事どもなり

第九回 (我が子)

栗岡お添是れ野瀬保路が紫紋嬢と間違へて救たる女の名なり保路はお添より其所夫否其情夫羽振柳四郎と云へる者が伯爵夫人の私生の子なりと聞き又火事場にて焼殺されしと見を行衛知れずと聞き何思ひけんお添の願ひに従ひ然らば吾も共に其死骸を捜し遣んと約束したり斯く約束して保路は従僕に馬車を雇せお添と共に打乗りたり馬車の中にてお添は只管に情夫柳四郎の事を思ひ保路は昨夜より今朝へ掛け我身に掛かりし様々の事どもと考へ互に暫し

が程無言なりしが頓て保路より言葉を聞きお前は其柳四郎とやら
 が焼殺されたと云ふけれど事に由れば柳四郎の方がお前よりも先
 へ歸つて矢張りお前を捜して居るかも知れぬであらふ(添)ハイ私
 しは昨夜から未だ宿へ歸りませんから何うとも分りませんけれど
 若し柳四郎が返つて居れば同人からも貴方に充分お禮を申させま
 す(保)ナニ禮など云はれ度くはないが未だ家へ歸らぬ先に柳四郎
 が死だと云ふのは些ど早過た譯でないか(添)でも私くしは昨夜
 は救助場て夜を明し色々考へて見るに何うしても死だと思ひま
 す柳四郎の方が私くしより後に成ましたもの(保)併し先づ宿まで
 行て見れば分る事だとは是よりは又無言なりしが頓て馬車はお添
 の宿と云へる家の前に着きたりお添は保路を馬車に残し己れ一人
 降て其家に入り行きしが間もなく又出来り私くしの思つた通りて
 す未歸つては居ません私くしは一寸と着物を着替へますが其間馬

車でも待なさるより私くしの借室へお上なさい私くしの言葉が實
 だと云ふ証據の品もお目に掛けますから(保)証據とは何の証據を
 (添)アノ柳四郎の母が伯爵夫人だと云ふ証據です柳四郎が幼い時
 から大切に持して居る其母の油繪と外に母から柳四郎に送つた
 手紙が有ますから保路は斯る品物を見たりとて何の益もなき事な
 れど何故か夫を見たりと思ふ如く突くと馬車より降りお添の案内
 に従ひて四階の上なる穢くろしき室に上り行きたり室は素より賃
 安く貸す者なれば見るも蒼蠅きほど疎末なれどお添が介々しく掃
 除などすると見れば疎末なりにも奇麗なり保路は一方の空椅子に腰
 を卸し「ドレ今云つた証據の品を見せて貰はふかお添は布に包みし
 一枚の油繪を持來り其蓋を開きて之を示せり保路は一目見て色を
 變へ言葉もなく見詰居たるが暫くして深き溜息を發し「フム是
 が柳四郎と云ふ者の母と云ふのか成る程高貴い身分と見ゆる併し

柳四郎は之に似て居るのか(添)ハイ随分似て居ます此顔を今少し男らしくした顔です(保)夫から手紙と云ふのは何所に在るお添の少し首を傾け誰にも見せてゐなければ堅く制られて居ますけれど一左様サ別に夫人の名字の書て無く唯其名前だけ記してありますからお見せ申しても差支へありませんか一最う柳四郎の死だ後だしイヤく若生て歸つて来れば叱られます手紙だけのお見せ申しますまい(保)ナニ姓氏さへ書て無ければ見たとて何家の伯爵夫人だか分らぬから大丈夫だ併し其名前に稻葉と書て有りぬせぬかお添の痛く打驚きオヤ貴方が夫を何うして御存じですハイ柳四郎の母の稻葉嬢と呼ばれた相です貴方のお若い時に其方を御存じですか夫で今此油繪を見て其方の事を思ひ出したのでせう私くしは貴方が此油繪を一目御覽なまつて何と無く顔の色が變つたから多分爾だらうと思ひました爾まで御存じなら隠しても無益です手紙も

御覺に入まじせうとて又も坐を立ち箱に入たる儘にて一通の手紙を持来れり保路の披き讀むに個のお添の言し如く其母が柳四郎を寺に預けありし節送りたる手紙なり終りに母稻葉よりと記しあり稻葉どの唯一身の名前にて伯爵夫人なるか將た身分も知れぬ賤しき女なるか素より知る由なけれども保路の之を知れり稻葉どの伊太利の國にて有名なる貴族加田伯爵の總領娘なり今より二十五年前加田伯爵と連られて此巴里府に來りし節巴里府の一少年と思ひ思はれ終に其少年の種を宿し夫婦にならんとしたれども父伯爵の立腹にて其意を果すとを得ず稻葉の忽ち其本國へ連れ歸られたる次第の全くお添の話せし通りにして其事柄の保路猶ほ自ら覺へ居れり二十五年の昔の事即ち保路が二十歳の時に在たる物語りなるに保路の何故に今までも忘れぬなるやア、保路の即ち其少年なるに由るなり稻葉嬢と思ひ思はれ稻葉よ保路よと隔だてなく語ら

ひし少年の今日既に老成して此の野瀬保路と云へる紳士となれり
 左すればお添の情夫柳四郎と云ふ者こそ疑ひもなく我子なれ我れ
 と稲葉嬢の間に生れたる一子なれ稲葉嬢が我種を宿せし事は保路
 自ら能く知り其後嬢が伊國に歸りてより男の子を産落せしも公
 然に育つると成ずして寺へ預たりとの事は嬢より秘密の手紙來り
 て保路は能く知り初てお添の言葉を聞き節若やと心に浮びし故
 來り見れば果して我子なり去れど爾る景色は少しも見せず自ら何
 氣なき顔をしてお添に向ひなるほど此夫人は若い時に折折見た事
 も有たけれど子があるとは今聞くが初てだ斯様な身分ある夫人の
 腹に出來た子なら四階の上に零落させて置くのハ氣の毒ゆる若し
 生て居るなら私が及ぶだけ世話して遣るお前も其人と夫婦同様に
 暮して居たなら此後とも私が保護して遣らう其代りに此油繪と手
 紙は私が貰つて行くよ(添)イエ夫を上ては成ません柳四郎が死だ

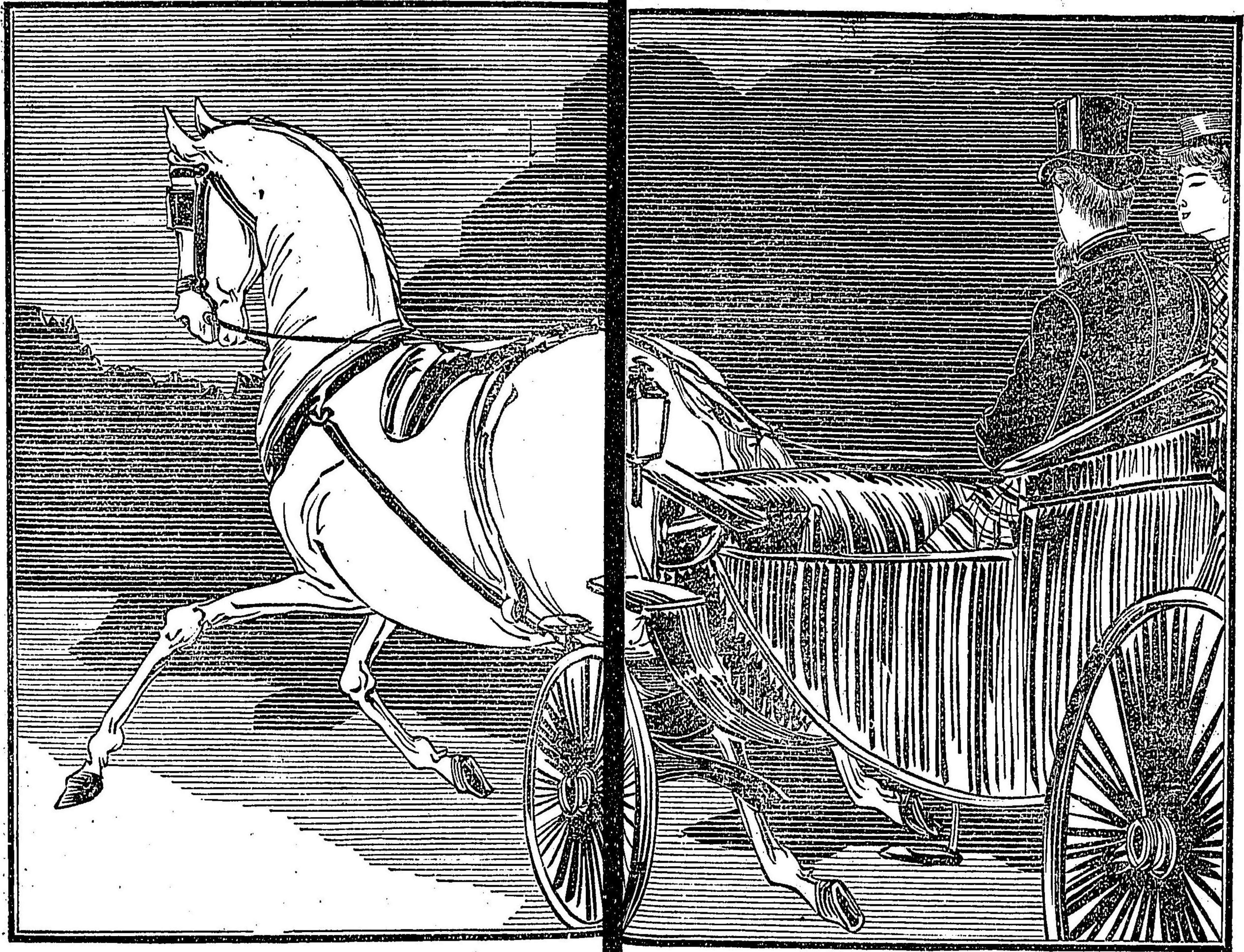
なり此二品が賣ても遺身ですから私くしは何時までも持て居ま
 す夫に又萬一生て居て歸つて來る事があれば何の様に立腹するか
 も知れません(保)夫でハ貰つて行くには及ばぬが此二品を大切に
 して空た引出へても仕舞い確に錠を卸して私が其錠を預つて行ふ
 柳四郎の生死が分れば其時は錠をお前にでも柳四郎にでも返すけ
 れど夫までは誰れにも此二品に手を付けさせぬ様爾々錠を私が預
 かるのが一番だと命ずる如く言聞すにお添は其故を悟り得ざれど
 保路を我身の大切なる恩人と思へば此言葉に背き得ず二品を空た
 る卓子の引出しに收め其錠を保路へ渡したり

第十回 (親の心)

人誰れか其子を思はざらんや野瀬保路は栗原お添の情夫なる羽振
 柳四郎と云へる者が眞實我子と分りてよりは俄に懐しき心起り且
 は今まで二十餘年の間其生死さへ詮議せず詮登きねる我身の不

行届をも悔切ては其死骸をなりと引取りて相應なる葬式を營み得
 させんと思ふ心の切なればお添を迫立て其着物を更めさせ又も其
 に馬車に乗して芝居の焼跡に到り見るに死骸は幾百と云ふ敷を知
 らず其中にて顔形の分りたる分だけは夫々引取り人に渡す事なれ
 ど多くは灰の中より掘出したる者なる故黒焦となりて男女さへ見
 分難し此中に果して羽振柳四郎の死骸あるや否やお添とても知る
 に由なし且つ又猶ほ灰の中にありて未だ掘出しの運びに到らざる
 者も多しどの事なるにぞ掘出しの終りし節再び又来るに如じとお添
 にも其旨を告知すにお添も累々と積重ねたる黒焦の死骸を見心持
 を悪くせし折柄とて永居するを好まぬ様子なれば保路は之を傍に
 連れでは後ほどでも明朝でも更めて来る事にするが私は猶ほ用事
 があるから之より又外へ行かねばならぬ素より柳四郎とやらが眞
 實焼殺されたのか夫ども未だ生て居るか夫さへ何うとも分らぬ故

お前は直に家へ歸り外出をせずにて居るが好い其中に柳四郎が
 歸つて来たなら直様私に知せて貰はふ私も之まで骨折つた事だか
 ら今更此儘にお前を見捨てるのも好ましくない此後ともお前と柳四
 郎の事には及ばずながら目を掛けて遣うから其積で安心して呉れ
 宿を空ぬ櫛に若し又留守の内に悪い者でも来て先刻の油繪など盗
 まれては仕方がないト云つてお前も幾等かの小遣がなくては稼ぎ
 にも出ねばなるまいから之は當坐の小遣に渡して置くとして五圓金
 貨二箇を取出し之をお添に與ふるにお添の深く保路の心は知れど
 辭退すべき時にあらねば厚く禮を述べて受收め我宿を指して歸り
 行けり保路は暫し其所にイザみつ心の中に己も此年に成て實は
 一人り息子が欲しい今まで氣に掛らぬでもないけれど疾に死だ事
 と思詮識もせず捨て置たが圓ぬ事で分つて來とは併し焼死だど
 は残念な事をした何うかして生て居て呉れば好か爾さ猶ほ生て居



さへすれば充分に其心榮を見貫た上親子の名乗合もして様子に由れば紫紋嬢の婿にもして遣るけれど雨だ帆足鏡夫も近頃珍しい心の好い男だけれど成る可くアノ紫紋を我息子の妻に仕度ヲと云つた所で今と爲ては後の祭だ死だ者は仕方がない矢張り鏡夫を我子と思ひ嬢の婿にして遣るか夫にしても夜前突然に現れた愛宕下秀雄と云ふ美少年は油断がならぬて姉の心を悉皆迷はせて仕舞たから捨て置ては紫紋を彼奴に取られる事にもなる幸ひ紫紋は母と違ひ心が充分確だから是より大旅館に行き彼奴が果して夜前初めて宿を取たのか夫等の事を聞合し少しでも怪い事があれば充分嬢に説諭して遣る爾すれば紫紋は彼奴が如何様者だと云ふ事を知り母が何と云つても心を動す様な事はあるまいと獨暫しが程咬き居たるが順て又馬車に乗り大旅館を指して急せ行き帳番の者に向ひ此家に愛宕下秀雄と云る客ありやと問ふに帳番は客帳を開見て

ハイ、今朝ほど初てお出になり宿を取どの御申込で直に又何所へかお出掛になりましたとの返事なり是にて見れば最早疑ふ所なし彼れ昨夜初めてモリヲス島より歸りしとは全くの偽りなり偽りを塗隠さんと今朝此宿に來りし者なり是だけ分れば其外の事は聞くに及ばずと又引歸して今度は嫂なる野澤夫人の宿に到れり日頃隔てなく行通ふ家なれば案内もせず突々と廊下へ登るに奥の方なる庭の中に紫紋嬢唯一人散步せる様子なるにぞ是幸ひと直ちに其傍に進み行き手を取りて其顔を眺めながらお前何となく顔に心配の色が見える氣分でも悪くないか嬢の俄に愛らしき笑を浮べて「イエ何にも其様な事ハ(保)其での結構だ私ハ又今朝帆足鏡夫が來てお前と何か言争ひでもしたのかと思つた(紫)イエ鏡夫さんハ今日ハまだ來ませんよ(保)でも其所にある其花束ハ何うしたのだ鏡夫が呉たのでないか(紫)イエ是ハ「アノ昨夜私くしを火

事場から送り届けて呉れた方が、(保) ヤヤ彼の愛宕下秀雄と云ふ美少年が早や好い氣に成て遣て來たのか是の驚いた油断の出來ぬ少年だ併し差たる惡意も結ばぬ先に花束などを贈るとの、下等社會のする事で未だ上等社會の作法を知らぬと見ゆるな(紫)でもアノ方の随分交際などに慣て居ると見え今朝も丁寧な言葉で色々の話をしましたよ(保)夫てい前まで最う此花束を貰ったのが嬉しいと思ふのか(紫)アノ爾てい有ませんよ嬉しいと思ふなら直に室へても持て行きますけれど私しつ爾うも思ひませんから此通りアノ方が椅子の上へ載た儘で未だ手も附ずらに置いてあります(保)フム夫の感心だお前阿母さんと違ひ物事に分別があつて未だアノ少年に醉されて居ないから私が茲で充分お前の心の中を問ふて置たいと思ふ事がある有体に返事をして呉ねば困るよ(嬢)有体にとて私しがナニ心にもない返事など仕ますものか(保)フム爾だく爾

なくてはならぬのじや夫ては問ふがと云ひながら保路は一入眞面目に顔附を組直したり

第十一回 (眞の愛情)

母なる野瀬夫人は既に、全く彼の美少年に心まで呑れたるも其娘紫紋嬢は猶ほ帆足鏡夫を忘れはせじ保路は先づ娘の心を確め置かんとて眞面目に顔を組直し問たいのは外でもないお前は帆足鏡夫を何と思ふか(嬢)は此間に怪む如く貴方は又變な事をお問になりませ私くしは此上もない善い人と思ひます(保)フム善い人か善い人と思ふだけでは了ないア全体お前は鏡夫を愛するか愛いせぬか(嬢)愛すればこそ所夫にも仕やうかと御存じの通り親しく交つて居るのではありませんか(保)フム感心々々併し男と女の愛情と云ふ者は兄弟の愛や友達の愛とは又違ふ所があるので唯善い人と思ふだけでは是は未だ眞の愛情とは云はれぬ其人の傍へ寄れば戀風

がツツと身に浸して我知らず口もきくことが出来ず顔が紅くあつてモヤ／＼するなぞと様々ど兆の見へるのが眞の愛情お前は此様に鋭夫を愛するのか(嬢)夫は何うも六ヶしいお尋ねです母なども男女の眞の愛と云ふ者は寐ては夢となり覺めては現となり暫しも忘る暇がないなどと小説にある様な事を能く云ひきかせますけれど私くしは何云ふ譯か未だ其様な事は知ません夫ほどまでに人を思つた事はありませんが夫でも鋭夫を愛するのが矢張り其愛とやら云ふ者かと思ひます私くしはアノ人なら所夫にしても好いと思ひます(保)フム夫では何うも充分には分らぬが兎に角所夫に仕たいと思ふなら先づ結構だ併し外の男に氣の移る様な事はある舞子(嬢)ナニ其様な事が一ですが外の男とは誰ですか(保)誰とも限らぬが仮例は昨夜の美少年愛宕下秀雄の様な男サ(紫)アノ方兎に角私くしを救ひ出して下さつたから難有いと思つて居ます(保)フム有

難いと思ふのは當然の事で夫は愛情と云ふ者ではない併し今若し秀雄の妻になれど云へばお前の嬉しいか嬉しくないか(紫)嬉しいにも嬉しくないにも既に鋭夫の妻と略ぼ約束の出来た私くしが今更ら他の人の妻となる筈がありません貴方は何故其様な事をお問ひなさります(保)何故でもない矢張りお前の心を充分に問ひ糺して置く爲めだエ嬉しいか嬉しくないか(紫)夫は何ども云はれません私しハ昨夜初めてアノ方に逢つたばかりで妻になるの所夫にするのど其様な事は未だ夢にも思ひませんから嬉しからうか嬉れしくなからうか自分でも知りませんよ保路は心の中にてフム嬢はなるほど心榮の好い女で最も鋭夫を所夫にする積りで居るけれど是は未だ眞實の愛情ではない鋭夫でなくてはならぬと云ふではなくて唯鋭夫は嫌ひでないと云ふだけの事だから若し今日の子の柳四郎が現れて来れば随分又已の仕様により鋭夫を捨て柳四郎の妻

に成ぬ事もない柳四郎なら伯爵夫人の子で今まで様々と艱難を嘗め苦勞の中に人と爲つた有様は丸て小説の様だからアノ愛宕下秀雄より一層姉の氣にも叶ふ事は必然だ併し残念な事には柳四郎は焼死んだから仕方がない柳四郎の事は断念して此上はたい一心に帆足銃夫の方を持って遣ねば爾どもアノ素性も知れぬ美少年に銃夫を負させては仕方がない斯く思案しながら又嬢に向ひてフム夫では早く銃夫と婚禮をするが好いお前の阿母さんがアノ美少年に溺れ込で下らぬ事を云ふだらふから間違ひのない中に早く婚禮を濟せばお前の身に取つても仕合せだ成るほどアノ少年にも恩はあるけれどナニも恩があるから所夫にせねばならぬと云ふ譯はなし恩は恩だから私がお前に成代ッてアノ恩だけの事は然る可く返して遣る既に今日も其で大旅館を尋ねて行たけれど少年は丁度留守で私は逃すに歸つて來たが此頃に逢は必ず好い様に圖らふから(紫)

ハイ今度の日曜には母がアノ方を招いて懇應するとして既に今朝はどアノ方を案内しましたから貴方も日曜日の晩に入ッしやれば必ずお逢に成ませう(保)フム日曜日の晩には是非來るて銃夫をも連れて來る併しお前の母が早やアノ少年を案内したとは實に狂氣の沙汰だ斯く云ふ折しもオヤ私しが何故狂氣の沙汰ですか昨夜盜坊に逢て乞食同様に零落れたアノ帆足銃夫の肩を持つ貴方こそ狂氣の沙汰ではありませんかと赤く爲て現るゝは野瀬夫人なり保路は驚きて「コレは姉さん貴方は又何うして銃夫が賊に逢た事を御存じです(夫)何うしてとて悉皆聞きました貴方は夫を隠して置く積りても爾は行きますせん最う銃夫さんは月給の外に身を繫ぐ當も無い人ですから保路は夫人が斯く有らんと氣遣ひ銃夫にも口留して此事を内聞に濟せと言附け置きたるに夫人は如何にして聞出せしや今は隠すにも隠せぬ場合と成る程賊には逢ひましたがナニ銃夫の身

代には少しも障りはありませぬ唯だ株券を買って拂ひ渡す爲めに
手許へ取寄せて有た金を盗まれた丈の事で未だ鋭夫の身代は紫紋
嬢の財産に劣りませぬから能く公證人にお聞なさい併し貴方は誰
から賊の事を聞きました(夫)ハイ此次の日曜には秀雄さんを招くに
由り最う鋭夫さんを断る積りで今朝手紙を遣りまじたら使ひの者
が玄關番から詳しく此事を聞いて來ました(保)貴女は益々狂氣の沙
汰です玄關番などの言葉を信じて紳士の上を疑ふなどと他人
に其様な事が聞されますか夫に又鋭夫を断って遣たとは何事です
鋭夫の嬢の許嫁でいりませんか(夫)未だ許嫁の約束は極ません
株券などを身代にして居る人は何時でも賊に逢へば直に乞食にな
りますから其様な人に紫紋は遣れませぬ秀雄さんならモリマス島
に數多の地面もありますから(保)姉さん赤坊の様な事を仰有るな
モリマス島に地面があるなどは唯當人の言ふ事でせう夫が信に

なりますものか貴方が若し秀雄とやら云ふ素性も知れぬ少年の爲
に何うしても鋭夫を遮絶すると仰有るなら私しは最う此家へは出
入しませぬ(夫)夫の何うとも御勝手な事も私しから何うぞ出入
をして下さいと願つた譯でいりませぬと賣言葉に買言葉アハヤ
一場の風波を引越さんどす

第十一回 (偽か信か)

賣言葉に買言葉保路は椅子を驟立て起ち夫では姉さん最う出入は
仕ませんから後になつて後悔なさるなと見向もせず去らんとす若
し此儘に捨置なば保路と野瀬夫人は生涯口をもきかざるならん斯
と見る紫紋嬢は周章で保路の身に繼ひ付きア、叔父さん夫では私
しが困ります爾仰有らずに何うぞ先アと手を取て引戻す保路は斜
に夫人の顔を見遣りて貴女より嬢の方が餘ッほど物事が分つてま
す貴女も今少し心を落着け篤と獨で考へれば帆足鋭夫と愛宕下秀

雄と何方が嬢の婿に好ましいか夫位の事は分りませう貴女が唯今云った事を若し鋭夫に知せたなら鋭夫は再び此家へ足踏も仕ますまい併し貴女も終には迷の夢の覺る事もありませんから夫まで先づ鋭夫に隠して置ませう私しは是で歸りますから後で充分お考なさるが好い夫人は猶ほも屈する色なく夫では保路さん日曜日の小宴にも貴方は最う来ないと言ふのですま(保)ハイ貴女の迷ひの夢の覺め愛宕下秀雄を寄附けぬ様にする迄は私しも鋭夫も參ません嬢は猶ほ保路の手を取しまゝにてアノ叔父さん貴方が其様な事を仰有つては私くしが困るではありませんか保路は固より嬢を我子の如く愛する者なれば此柔しき言葉を聞きては又忽ちに心解け紫紋嬢さへなければ再び此家へは來ませんけれど嬢を貴女に任せて置ては終に素性も知れぬアノ少年に何の様な目に逢ふかも知れません今は丁度大事の時だからハイ私しも來て其の少年と一所に

夜食を致しませう其席で篤と少年の様子を見て又臨機應變の工風もありませうから併し私しが來とになれば鋭夫も一所に連れて來ますよ(夫)でも鋭夫さんへの今朝私しから斷りの手紙を遣ました(保)ナニ夫の宜い私しから改めて案内を仕ますから夫で二人と同じ卓子に向ひせて彼是と話をする中に鋭夫と秀雄と何方が本統の紳士であるか何方が嬢の婿に好しいか貴女左様な事も分りますからと斯く云ふ保路が心の中に鋭夫と秀雄を並べ置き我口先の掛引を以て鋭夫を褒めて秀雄を廻り充分秀雄に耻を搔せて再び此家へ入來るも面目なきほどに懲し附けんと思ひ居るなり去れど二人を並る時の鋭夫の姿の秀雄の顔に及ばず返て益々秀雄の値打を益す様な事なきか保路も其所まで心附ざるの残念なり是にて將に起らんとせし波風も漸く収り掛たれば保路の再び姉が面倒なる事を言出さぬうちに嬢の顔に喫を與へ姉さん左様ならと逃る如くに此

家を去りたり大道に立出て保路の發と一息吐きたるが扱是より
 孰れに行んど不みつゝ考へ見れば氣になるの我息子羽振柳四郎の
 死骸なり灰の中に埋りて分らずとも最早や堀出して事に由れば
 漏具町なる死骸縦覽所に並べあるも知れず先づ縦覽所に行き書記
 局に入りて其事を問合せんと又も馬車にて縦覽所を差行けり死骸
 縦覽所の事の指環其外の小説にも記したる事あれば讀者の定めて
 配臆するならん頃て其書記局に到りて疊にお添より聞きたる所を
 元とし年頃廿四五歳なる斯様くの死骸の未だ送り來らざるやと
 問ひしに火事場より送り來たる死骸の孰れも黒焦となり顔形年頃
 より衣服に到るまで少しも認め附難しとの事なれば猶ほ若しも斯
 様の死骸を送り來る事あらば早速我宿まで通知されたしと一枚の
 名札を残して縦覽所を立出るに此時是も同じく死骸を尋ねに來り
 一着か我後より出來りて我よりも早足に出去らんとする一紳士の

り保路の何心なく其顔を見るに其紳士も亦保路の顔を見て兩人齊
 しく驚きたり此紳士の誰ぞ彼の美少年愛宕下秀雄なり昨日モリマ
 ス島より歸りたる儘にて親類も無く知己もなしと云ふ此秀雄が死
 骸縦覽所に來るとは何故にや何人の死骸を尋ねんとするなやる保
 路は不審に堪ず其仔細を問はんとするに秀雄も其心を察せしか早
 くも首降の口を閉き實はモリマ島から一緒に船に乗り航海中に
 悪意になつた日曼人が有まして昨夜芝居へも一所に行きまゝたが
 火事の騒ぎで別々に成り何うもたか分らぬ故若しや死骸となつて
 此館に陳列されては居ないかど能く尋ねに來ましたが何うも此か
 ど思ふ死骸はありません私くは其者の荷物など預つて居ります
 ので其生死が分らぬば誠に困却する譯ですと虚か信か知ねど尤も
 らしく言開くゆゑ保路も強ては問はず去れど茲にて逢しは幸ひな
 れば我が思ふだけの事柄を告げ知せ置んものと秀雄を人なき所に

連れ行き貴方が誰の死骸を尋ねやうと夫は私しの知た事でないが併し今逢たを幸ひに一應貴方に言て置く事がある貴方は今朝既に紫紋嬢の許を問ひ殊には花束まで送ったと云ふがアレは何う云ふ御所存です成る程貴方は大く云ば紫紋嬢の命の親で私くも御所存も難有く思つて居るかち嬢の母が屢々遊びに来て呉と云ふは無理もない事又貴方が其言葉を幸ひにして直に尋ねて行くのも咎めるに及ばぬ併し花束まで送るとは少し慣々しく仕過るかと思はれます夫も好が紫紋嬢には既に帆足鏡夫と云ふ許嫁の所夫があるから若し貴方が後々嬢の心を得て我妻に仕度と云ふ様な深い心でもあるならば夫ころ間違ひの許ですから今の中に私くから堅く断つて置かねばなりませんと遠慮もなく責め附くるに秀雄は別に當惑の色もなくイヤ決して左様な深い心がある譯ではありません既に昨夜も貴方から帆足鏡夫は嬢の許嫁の所夫だらとてお引合せがあり

第十三回 (嬉し)

まして其事は知て居ます私くは不幸にして此巴里に懇意する人もなく全くの一人者で是から交際を初めるにも既に取附に困る程の次第も悉つた事から御懇意に成たのを幸ひ何時までも御交際を願ひたい所存で夫ゆゑ今朝も伺ひました譯であります猶ほ貴方の宅を初め帆足鏡夫殿のお住居も伺つた御懇意を願ひに上り度と思つて居ましたと真心見せて述べたれば保路も扱は此少年我が思ひし程の悪人にも非ざるかと返り憐れみの念を起しイヤ其様なお心掛けなら以來及ばずながら御相談にも與りませうとて初めは打て變つた最信切なる言葉を吐き猶ほ二三の話しを爲したる末宛も永き友達同士の如く手を握りて分れたり

野瀬保路が死骸縦覧所の出口にて彼の美少年愛宕下秀雄に逢ひてより既に三日を経たり其間此話しに在る一同の人々に別に異りた

る事柄なし野瀬夫人は相變らず美少年を神の如くに褒るやし始ど
 彼れを我が二度目に所夫に迎ふる積には有らぬかと疑はれ保路は
 相變らず鍛夫の肩を持ちて秀雄を不安心の男と思ひ且絶間なく我
 息子柳四郎の生死を氣遣へり其翌日者ゝや柳四郎が生てお添の許
 へ歸りはせぬかと態々其宿を訪たれど生憎お添は買物に出たりと
 て留守なりし故空しく歸り今は唯だ死骸縦置所より知らせの來たる
 を待つのみなり
 茲に又彼のお添は保路に分れ我宿に歸りてよりは他出するなど言
 附られし保路の言葉を守り後生大事と我居間に閉籠れど下女も下
 男も使はぬ身も時々小買物に出ぬ事は叶はず翌日買物の爲め僅か
 に宿を空けたる留守に保路尋ね來りしかど其事を知るに由なく彼
 の紳士は何故に音沙汰なきや唯一時の憐れみの爲めに妾を救ひた
 るも今は全く忘れしか柳四郎は死し彼の紳士には忘らる何として

此後の身を支へんと殆ど途方に呉れたるが三日目の朝に至り今は
 不安心に堪へざれば好く再び紳士の家を訪行きて直々に面會を
 求めんと既に衣類まで替替しも又思ひ直せば紳士が外出を止たる
 も全く我家へ尋ね來らるゝを蒼蠅思ひてならん今行きては返つて
 叱るゝも知り難しアレほどまで信切に妾を慰め呉れし人が僅に三
 日ばかりにして忘るゝ事豈もわらじ忘すして來らざるは外に用事
 のある爲ならん左すれば手紙を以て妾の心配を言送るゝも好けれ
 雨なりくと漸くと心を定はしたれど貧き家に育てられ手紙書く
 事さへ充分に習はぬ身に取り紳士の許に文通をせんとするは實に
 容易の事にわらず情夫や友達に送る手書は遠慮なく言葉の儘を認
 むれど餘り無作法なる文句のみ書列べては返つて愛想を盡されん
 如何に書初むれば好らんかと思案しながら筆を取り考へては一字
 書き一字書きては又考へ紙を四五枚も書捨て末漸く妾を救ひ給ひ

し恩深き紳士よ御身は妾を忘れたまひしか妾は御身より外に頼り
 と思ふ人はなきに―とまでは書たれど之に續く言葉なし筆を取り
 たるまゝ起ては考へ居ては考へ若しや斯く考へ居る中にも彼の紳
 士尋ね来る事はなきやと二たび三たび窓帷を推排きて戸外の方を
 眺むれば尋ね来る様子もなし斯る時ころ讀書を好くする人の羨ま
 るれど又坐に直りて思ひを凝せり此時見るともなく卓子の前に立
 る古き硝鏡に目を注ぐに此間の入口に掛けたる垂幕の影遠く斜に
 映ひ来り硝鏡の奥に垂幕の在る似たり彼の紳士は何故に早く此
 垂幕を排きて入来らざる柳四郎は何故に復び垂幕の下に立ち此鏡
 に其男らしき顔を映さざると取留もなく恨に煩ふ折しもアラ不思
 議誰やうん男の手にて外より垂幕を排く影寫れり唯手先のみ寫り
 て其姿は見る由なけれど内の様子妾の様子を偷み見る人には違な
 し誰れぞ何人ぞお添は怪みながら坐を立ちて垂幕の方に振向行け

ば外より推排きて入来る是れ野瀬保路に非ず但見る女にもして見
 ま欲しき一個の優美なる少年なりお添は唯驚きイヤお前の一柳四
 郎さんと云ひしのみ餘りの事に抱も得附ず若し柳四郎が通例の旅
 先より歸り来し者なれば其嬉さも通例の嬉しさなる故お添は飛掛
 りて抱き附く所なれど全く死せしと思ひし者が生て機嫌よく歸り
 来る實にお添が身に取りての今までに知ざる嬉しさなり其嬉しさ
 を充分心に吞込む迄に幾何の間ありお添は飛退りつ見張たる目
 にて柳四郎の顔を眺めしが忽ち其嬉しさ心の底まで落着まゝたが
 お前先生好う歸つて呉れたと云ひつゝ柳四郎の首に捲き附きて映
 映熱き映雲時が程の唯映の爲め言葉もなし抱あいたる儘に踰眼ま
 ての倒れのせぬかと危まる柳四郎の男だけにお添よりの稍や落着
 きたる所なり静にお添が身を推退けてオ、お前も生て居たか是の
 意外の仕合せであつた光づ何よりも喜ばしいと云ひながらお添を

卓子の傍なる椅子に推据膝と膝突合せて己れも其前に坐を占めたり先づ人間の樂しみの眞に此等の邊にある可しお添へ全く嬉しさに酔ひたる人の如し

第十四回 (立廻り)

お添は只管に柳四郎を愛する者なり他愛もなく其顔を眺めながら能く先ア顔を見せてお呉れな前今まで何所に居たエ何して居た柳四郎も嬉しげにお添の手を取りて己も實はお前が焼殺されはせぬかと思つて(添)夫で今日まで歸らずに居たのですか先ア好つた二人とも助かつて(柳)ナニ夫で歸らずに居た譯ではないが己はアノ時群衆の人に踏倒され足腰も立ぬ様に成て居るのをヤット情けある人に助られ病院へ入れられて今日まで養生して居たのサ(添)ア、病院に居たのなら何所を尋ねたどて分らぬ筈サ切ていふ前の死骸なりと見出したい者と思ひ何れほど探したか知やしない

ア(柳)爾まで心配して呉たは有難い併しお前の先ア女の身でありながら能くアノ群衆を潜つて出たナア(添)ナニお前私しだつて最う人に踏倒され相に成て死るかと思つたのサ夫ても死物狂に成て人の腰に抱き附た所が其人が自分の連と間違へたか外まで出て呉れた私しはお前が死だかと思ひ後から追駈て死る方が益だらふかとも思つたけれど夫ても先ア何うした事で生て居まい者でもない今日まで死ずに居て好い事をしたお前も又生て居るなら安心のため一寸と端書でも寄越して呉れれば好つたのに(添)何うして端書など書所か半死半生に呻吟て居たのだ夫にお前の最う死だ事と思ひ今此下で己より先へ歸つて居ると聞た時の本統に夢かと思つたお添の猶も柳四郎の姿を前後より眺めながら何しろ私しは嬉しいよ斯して二人とも助かつてサ此間お前に買て貰つたアノ着物も破れたり踏れたり最に寸断くに成たけれどお前が歸つて呉

れは衣類などの借くは無いでも先アお前は能く其外被が何とも
 ない事ヲエ(柳)ナニ是はアノ外被ではないアノ時着て居たのは混
 雑の紛れに人に挟まれて脱て仕舞い今朝病院を出た時には肉袴の
 上へ寸胴を着けたばかりで有たが幸ひ寸胴の衣囊にはアノ時に持
 て居た金が其儘残ツて居たので古着を買て羽織て来たのだ(添)オ
 ヤ是が古着なのでも能く身軀に似合ふ事爾サお前の身軀には癖が
 ないから何を着てもシツクリと手袋の様に適るのだドレ立ても見
 せな未襟垢も附て居ないよ(柳)夫よりもお前は併し今日まで何を
 食て生て居たアノ時一文の錢も持て居なかつたに最う質に遣る品
 物もなし食ふ物を買ふだけの錢の有るのが不思議じやないか眞逆
 他人の物を盗みも仕舞いが(添)ナニ盗みなどしますものか(柳)夫
 なら何うして金が有たお添は少し詰りながらアノ貰ったの(柳)誰
 れに(添)其私しを救ひ出して呉た紳士の方に(柳)フム助けた上に

金まで呉れるとは見ず知ずの人にして大層信切だな(添)ア、本統
 に眞切な人だよ其上にお前の死骸まで捜して遣ふツて此言葉に柳
 四郎は少し色を變へナニ己の死骸を手前己の事は誰にも話しては
 成らぬと兼々口留をしてあるじやないか(添)だツてお前常非の時
 だもの(柳)非常の時だツて己が話すなど言附てある事を何故他人
 に話すのだ日頃立腹せし事のなき柳四郎が少しの事に廉を立て斯
 く立腹の様子あるは合點行かずお添は驚きて其顔色を目成るのみ
 柳四郎は猶四卓子の上に在る書掛の手紙に目を注ぎて何んだ馬鹿
 くしい是が其紳士どかに送る文かフム妾は御身より外に頼りと
 思ふ事はなきに此文句が氣に喰ぬ打て變つた劍幕にお添は且つ怪
 み且つ驚きながらも其心を悟り得ずエ、此文句が何だどエお前の
 死骸が分つたか分らぬか夫を聞く爲めに書掛た手紙じやないかお
 前が歸ッて来れば最う書て仕舞ふに及ばぬ事破りなど裂捨ると氣

の濟む様に仕てお呉れな嫉妬に堪へぬ人の如く手紙を取て揉捨な
 がら好々手前が此様な心と知ず歸つて來たのは此方が悪い儘二日
 か三日の間に外の男に乗替るとは呆れ果た薄情者だ今分つたのは
 未しも幸ひ此上の馬鹿を見ぬうち分れるが上分別だ已が居無なッ
 た其後で紳士とやらと差向ひて仕度い眞以をすまがよいと早や立
 去らん様子なりお添は半ば情談なるかと疑ひつゝお前は何を云ふ
 のだ子なる程日頃口留せられて居るお前の事を人様に多舌つたの
 は私しが悪いけれども了見があつて話した譯ではなし歸り早々腹
 立ずと先ア其機嫌をお直しな(柳)直すも糸爪も入る者かサア已は
 出て行くから預て置た母の書像と其外の書類出せ茲に至りては情
 談どのみも思はれねばお添も忽ち様子を變へオヤお前本統に出て
 行く積りア、分つた外に好い所が出来たから私しに無理な艱難を
 附けて自分獨り好見になり休能く分れる心だらう幾等馬鹿でも其

手には乗ないよ(柳)ソメ〜云々に書像と手紙を寄越さんか(添)
 お前が爾云ふ心なら私しも思案があるアノ二品は何時まで預ッ
 て置くから要用の時には頭を下めて取にお出機盡に恐てハイ爾で
 すかと渡す様なお添と思つては當が違ふよ(柳)斯う云へば彼云ふ
 エ、面倒臭いと云ひながら柳四郎は兼て二品を入ありし押入れの
 方へと走り寄るにお添はセ、ラ笑つてヘンお氣の毒さま最う押入
 には入れてないよ私しを助けて呉れた紳士が二品をお前の知ぬ所
 へ隠し他人の手に觸れてはならぬと錠を卸して其鍵を持って行た其
 紳士が來るまでは鍵がないから私しにも自由にならぬ此言葉を聞
 き柳四郎は益々猛り殆どお添に握み掛らんとす此時誰なるか外よ
 りして入口の戸をト〜と叩く者ありお添は是ぞ彼の紳士なら
 んど我知ず眼を戸の方に注ぐば柳四郎も斯くと察せしか好い所へ
 來やがッた己が充分詰問して二品を出させて遣る其上は最う手前

の様な性根まで腐った女に用事はないと云ひつゝ、お添を次の室に推遣りつ柳四郎は宛も打も掛らん擬勢にて内より荒々しく入口の戸を引明けたり

第十五回 (是はく)

柳四郎とお添とが負ず劣らず争へる折も折どて外より戸を叩きくは誰なるぞ是れ外ならず野瀬保路なり保路は我息子柳四郎の安否を知りたしとてお添の許を問ひ來たるに室屋の中にて誰やらんお添と痛く罵り合ふ聲聞ゆ是ぞ必ず柳四郎ならんと思へば暫く足音を潜めて其様子聞き居たるに言葉附さへ荒々しく全く下等社會の口調なるゆゑ心に幾分か失望を催ふし扱は柳四郎我息子にありながらも下等社會に育ちし爲め紳士の風は少しもなく言葉までも下士じみて口穢くなりたるか是にては親子の名乗をするも汚はしと思はしき思ひを爲し去も得やらず入りもせす猶ほ戸の外にぞみ

居るうち争ひは益々抗じて今は聞捨難き程となりたれば扱ふる其戸を叩きしなり叩きてより暇もあらせず中より引裂く如くに戸を開くは定めし我息子柳四郎なるべしと保路は先づ其眼を彼れの顔に注ぐに個の如何に柳四郎に非ずして彼の美少年愛宕下秀雄なり愛宕下秀雄が實の羽振柳四郎なる事讀者は既に悟りたれど保路は悟り得ず唯驚きてオヤ貴方ですか貴方が先ア何うして茲に言葉世話しく問ふ中にも早く心に工夫を定めヨシヨシ是で見れば愛宕下秀雄が此頃初めてモリマス島から歸つたと云ふのも嘘彼れ實は此巴里に在りて我息子柳四郎と同じくお添に心を寄せ居たるか去すれば彼れが顔の皮を引剥ぐには今を措て何時かあらん斯る所へ來合せしゝそ天の引合せとも云べきあれば充分に其身許を調べ此少年に心酔されたる我兄嫂にも事の次第を知せて呉れん兄嫂如何に少年に迷へるとも若し此事を聞きたらんには忽ち又愛想を盡し

爾來其家へも寄せ附けぬ機にすると必然なりと斯く考へながら突々ど室の中に入り秀雄の前に立塞がりて茲て貴方に逢ふとは實に意外です貴方は何うして茲に居ます兼てお添を御存ですか(柳)私しおそ貴方の茲へ来るのを怪みます私しは未モリクス島へ行かぬ中にお添を知りて居ましたので今日圖らずも此宿の前を通りお添の事を思ひ出しましたから何の氣もなく立寄りましたと体能く此場を言ひ繕ろはんどす去れど保路は其手に乗らざては久し振の對面です子久し振に逢ふ者は何れ何と仲が悪くても必ず相當の挨拶をするのに今貴方はお添と争つて居たではありませんか廻り合て早々喧嘩をするとは餘程奇妙に思はれます秀雄は之に答ふる言葉なく少しても言紛らす事の出来る間は言紛せて濟さんと思ふ如く大膽にも返つて紳士に問ひ併し私くしよりも貴方が先アお添を知り居るとは何うした事です(保)ナニ何うした事でも有ません火事の夜

に紫紋嬢と間違へたお添を救ひ出したので後にて聞けば随分憐れむべき女と分り殊に又お添には柳四郎とて所夫同様にする男が有り其男が生死さへ分らぬと云ひますから可愛相な事と思ひ及ぶだけは力を貸して還る積です秀雄は猶何と空とぼけて成る程柳四郎と云ふ情夫の有る事は私しも兼て知らぬでもありませんが爾ですか其柳四郎の生死が分りませんか夫は先ア氣の毒な事で(保)ハイ夫を氣の毒と思ふから斯うして茲へ來たのですが是より愛宕下秀雄と云ふて交際社會に身を入れんとする貴方が斯様な家へ足踏するとは第一名譽にも成りません何よりの不得策でありませうと嘲る心を言葉に込め抓る如くに言込めるを次の間にて聞き居たる彼のお添は保路の言葉柳四郎の返事一々に不審晴れず今ハ堪へ兼て飛出し來り「オヤ貴方此人が羽振柳四郎ですよ私しの爾申した情夫ですよ愛宕下秀雄などナニ此人の名前では有りません」と無遠慮

に言切りたれば紳士は初て此美少年實は我子の柳四郎なりしかと初めて悟りて愕然と驚きたり

第十六回 (露見)

愛宕下秀雄實は羽振柳四郎、美少年實は我子斯と知る野瀬保路の驚きは如何にぞや秀雄は大の詐偽師なり今は其證據隠すに由なし紫紋襷を救ひたるを奇貨として我身分我名前を推隠し身代ある紳士と見掛け言く野瀬一同を欺かんとせり其心其行ひ憎みても餘りあり去れども是我が子なり何とせば好からんと保路は頓に思案も浮ばぬと兎に角我が心を悟られてはならぬ場合飽までも他人の如く見せ掛けて何事なく此場を濟せ後にて緩々施す事ありと強て我胸を押鎮め顔色さへも落着たりお添は保路が柳四郎を知れるのみかは聞し事もなき名前を呼ぶを見て其怪みは猶を解けずエ貴方は何故柳四郎を愛宕下秀雄など呼ぶのですと問ひ掛る柳四郎は當

惑と立腹に逃る事をさへ打忘れしか唯其眼を鋭くしてお添を叱る如くに睨み附くれどお添が更に頓着せざるは是非もなし(保)何故愛宕下と呼ぶかどて別に深い仔細はない私には此紳士が愛宕下と云ふ名字ばかり知せて置たからサ(添)何所で貴方は柳四郎に逢ひました柳四郎は相場會社へ出て居ますが貴方も相場會社の方ですか保路は此言葉を幸ひに爾々私も相場會社へ出る者だ相場などに手を出すは紳士の名譽にも障るから夫で愛宕下と偽名をして居たであらう夫は無理も無い話しサ(添)エ夫は偽です柳四郎は今まで相場會社で偽名をして居るなどと私に話した事はありません(保)話さぬのも無理はない其様な詳しい事をお前に知せたどて無益な事だからと斯く巧みに言繕るいて保路が秀雄の肩を持つ如き様子あるより秀雄は更に合點行かず此紳士充分に我が身を責むべき所なるに左は無くて返して此の如くなるは何故にやと只管問り

怪しむのみ去れど素より其仔細を問ふ時に非ず今保護するは添
 を取鎮め其後にて充分に我れを責るが爲めならん好く我れも
 其積りにて充分に覺悟せんと今は度胸を打定め大膽に身を構へて
 別に動する景色もなす添は猶ほ保路に打迎ひ貴方先ア聞て下さ
 い柳四郎は母の遺身とか云ふアノ油繪と寫眞のないのを見て多分
 私しが金に困つて貴方に賣たであらふと云ふのですよナニ爾う
 ではない貴方が他人の手に掛らぬ様大事に仕舞て置けど或所へ
 押入れて其鍵を持って行しつたと幾等爾云ふても信にしないので
 す保路は柳四郎に向ひて「イヤ彼の寫眞と手紙は確に此私しが預つ
 て居るのです全く添の言ふ通り卓子の引出しに入れ此通り鍵を
 持て居るのですから心配には及びませんと云ひつゝ衣籠より鍵を
 出し之を柳四郎に引渡すに柳四郎は受取りて直に卓子の引出しを
 開け二品とも無事に存れるを見定めて「ふ是で好し」と云はぬばか

りに再び錠は卸し錠は已れの衣籠に入れたり添は此様子を見て
 既に柳四郎と仲通りをせんと思ふが如くそれを見な私しの云つた
 通じやないかと云へど柳四郎は知ぬ顔にて更に又保路に向ひて是
 で安心致しました併し貴方に此上の御用事がなければ是で私しは
 お暇に致しますとて早くも体よく逃出さんとす(保)イヤ未だ貴方
 には緩々と話す事があります併し其前にお添に言聞かして置たい
 事がありますから暫らく待て貰ひませうと最と嚴かに言す此言
 葉に柳四郎は固より負くを得ず默然として控もれば其間に保路は
 お添の手を取り次の間に連れ行きてお前は私の言葉を當にするか
 (添)貴方の言葉なら當にしますが最う柳四郎の言ふ事は何を云
 つても當にしません芝居の中で私しと分れたのも今までは群衆の
 人に推分けられた爲だとはかり思つて居ましたが考へて見れば爾
 てありません私しを焼殺す積りで故と放して捨たのです(保)夫な

ら前には最う柳四郎と手を切度と思ふのか(添)イエ爾は思ひません何う云ふ者か私しは是でも柳四郎を愛して居ます思ひ切る事は出来ません何うか中を直して今までの通り一緒に暮らしたいと思ひます(保)フム夫ほど迄に思ッて居るなら私が復の通りに治めて遣る併し夫も今直にと言ッては前心の心も騒いで居るし柳四郎も立腹して居る様子だから爾は行かぬ今から三日ばかり私に柳四郎を預けて置けばスツかり機嫌を直して返して寄越す此後は前が何の様な難儀に逢ふとも私が後桶になつて助けて遣るから決して心配せぬが好い承知か合點が行たか柳四郎は是から直に私が連れて行くのだから(添)其心有難ふおさいます何でも何故に三日の間柳四郎を連れて行くのです(保)イヤ別に三日と限る譯ではないが静かな所へ連れて行て充分に説諭して遣る積りだ三日もすれば心か直ると思ふから事に由れば今日直に疎す機になるかも知れぬお添

は猶ほ危む如く暫し保路の顔色を檢視居たるが此人ならば豈も偽りは言ふまじと見て取りいか失での何うぞ宜しき様にと我を折て承知したれば保路は直に復の間に歸り柳四郎を引立て此家を外に出るや否貴方が今まで我々を欺して居たのは最早や隠すにも隠されぬ事柄だが斯露見に及んで見れば貴方も何とか言開きをせねばなりませんまい柳四郎は早や既に言開きの道を案じ出せしかイヤ夫は私しより望む所です(保)では其言開きを聞きませうが何分にも此往來での仕方がないから靜に料理店へでも行きませうとて最寄の料理店に誘ひ行きたり

第十七回 (説明一)

現在我子と分れども其言根を見届る迄は固より親子の名乗は出来ず去れば保路は彼の少年を但ある料理屋に誘ひ行き人なき所に差向ひて俄も頂面目に身を構へ(愛宕下君と云ッて好か羽振さんと呼

で好か分らぬが先づ今まで覺へて居た通り愛宕下君と云ひませう
 貴方は紫紋襷を救つて呉れたので何時までも我々野瀬家の恩人ではあるが其行ひが合點が行かぬ即ち必要もない偽りを作つて我々を欺いて居られたのだ貴方は何故に我々を欺きましたか誠の事を打明けて言た所が我々は矢張り誠の恩人と思ふのに夫を何ぞや跡方もない名前を言ひ又跡方もない履歷を作つて一同を欺きなさるゝとは全体何う云丁見です秀雄は早や既に後悔の体を見せ最柔らかなる言葉を用ひてイヤ爾仰しやられては一箇もありませんが實はあ添の様な素姓もない女と一緒に住で居ると申しては愛想を盡されると思ひまして(保)でも名前だけは有体に名乗ても好い筈だが(秀)ハイ名前は唯口から出任せに(保)フム名前はなる程口から出任せかも知れぬがモリマス嗚て從兄に死分れたの其財産を受繼たのとアノ詳しい履歷の話は口から出任せとは思はれぬ前以て充分に

考へて置た者だなる程同じ偽りの中でも唯其場の末を合せる爲に出任せに言ふ嘘は罪が軽い併し前以て考へた上で人を欺くとは實以て容易の事であるまい(秀)イヤ以て考へたと云はれては恐れ入ります決して爾いふ譯ではありません初め襷様を救ふた時に家まで連れて行けば身の上を聞かれるは必定だけれど決して我が耻しい身の上を打明けまいと斯思つたばかりです何うして詳しい履歷など考へては置ません所が其場に臨んで不意に貴方から住所を問はれまゝして濶と返事に問へましたから據所なく何所にも住で居ないと答へました若し前から考へて置たなら差支へもなく何所其所と答へますけれど全く爾答える暇がなかつたのです夫で住所がないと答へたのです此返事が基と成て追々外の偽を作らねば都合が悪い事となり偽に偽の上塗をして到頭アノ様な履歷が出来たのです住所がないからとて眞逆乞食をして居るとも言れず餘儀なく今日外

國から歸つたばかりだと答へ夫から夫へと留度のない事となりま
 した(保)イヤ貴方は實に恐しい程の想像力を備へて居る咄嗟の間
 にアノ程の尤もらしい事柄を組立てるとは小説家でも及ばぬ所だ夫
 は先づ爾として一番合點の行ぬ事は翌日になり貴方は大旅館へ行
 き宿を取て客帳へ名前を着けて置た何故アノ様な事をしたのです
 (秀)夫も矢張り嘘の上塗で止を得ぬ次第です翌日は貴方が宿まで
 尋ねて来ると仰有つたから其時に若し大旅館で愛宕下秀雄と云ふ
 者の知ぬと答へては化の皮が剥けますから(保)化の皮が剥れた所が
 何も心配に及ばぬ話で、無いか私と貴方が全くの他人であつて見
 れば私しか何と思つた所が貴方の身に痛くも痒くも無い筈だ(秀)
 イヤ中々相でありませぬ初めて貴方に逢た時私し、既に後後まで
 も此様な紳士に御交際を願ひ度と思ひましたから何ふか化の皮の
 現はれぬ様にど一方ならぬ苦心を致しました(保)夫は爾とした所

で貴方が身を替るに早い事は實に驚くアノ夜は書記か學校教師と
 ても云ふ見すばらしき姿で居て翌日は立派な紳士殊には一年半も
 一緒に居たお添を振棄て又今までは相場會社へ出て居たと云ひな
 がら其會社をさへ打捨て、殊にお添には自分が焼殺された者と思
 はせ置き(秀)イヤ其御不審は尤もですが是には又譯があります
 私しも男子と生れたからは何時までもお添の様な者と一緒に居た
 くありませんから兼てより折もわらば分れやうと内々決心して居
 ます矢先へアノ火事がありましたから是幸ひなり天我に出世の機
 を與ふるかと嬉さの餘りに取逆せたりも云ふ可き程です(保)併し
 貴方は一旦お添を振捨れば二度と再び目附る事はないと思ひまし
 たか(秀)イヤ爾は思ひませぬ多分お添は火事の爲め焼死だ事と思
 ひ若し生て居るなら猶ほ一度逢た上で体よく分れやうと思ひまし
 たですから先日死骸縦覽所へ行く出口で貴方にお目に掛つた様

な次第です其後宿所を探して見てもお添の死だ様子は無いゆゑ扱
 は未だ生て居る事かと思ひ今日は愈々最後の話しを附け母の遺身
 なども受取ッて其上で分れやうと斯く思ッてお添の宿へ行た所折
 悪く貴方に目附ッた次第で有ります(保)フム一應聞た丈の所では
 至極旨い言譯だか未聞ねばならぬ事がある今日は是れ日曜日で今
 夜貴方は野瀬夫人の小宴に招かれて行く筈だが私しも矢張り同席
 するので其席で何と云はふ愛宕下君と云ふは知ながら母子を欺く
 に當るし去ればとて羽振柳四郎君と云へば其譯を説明せねばなら
 ぬと云ふ者で(秀)イエ最う小宴へは出席しませんから其御心配に
 及びません(保)出席せぬとならば夫だけの譯を拙者から言ねばな
 らぬが(秀)何とでも貴方の氣の濟む様に仰有ッて頂きませう(保)
 夫では貴方の是から又今までの通りお添の傍へ歸るのであります
 か(秀)イエお添の傍へは最ふ決して歸らぬと云ふお添の遺身を受

取る爲め今一度は行きますが其節お添が身の立つまで幾等かの手
 當をして遣る事に定め綺麗に手を切て仕舞ます(保)ての貴方の其
 様な手當が出来程の金満家ではありますか(秀)イエ私しの親も
 親類もなく唯自分の一身で稼ぎ出すのですから仲々以て金満家で
 はありませんが先日少々儲ましたので(保)矢張り相場會社で(秀)
 イエ相場會社とは唯お添を安心せしむる爲めに言て置た丈の事
 實は相場會社などへ雇はれた事ありませぬ全く此前の日曜日に
 競馬に金を賭て運能く勝利を得少の間に三万圓ほど得たのです
 唯今の所では其三万圓が身に附た財産です幸ひに火事の時に銀行
 の切手にして内側の衣籠に入居りましたので金だけは無難に逃れ
 ましたが斯く説來る言葉の節々宛ながら立板に水を流すが如く殊
 には口調の中に一種得も言へぬ悲しみを帯び保路は心の中を探る
 かと疑はるゝばかりなり世の艱難を嘗盡し人情通を以て自ら許す

野瀬保路此少年を果して如何に判断するや

第十八回 (説明二)

保路の猶ほ問を續ぎ、フム競馬で以て三万圓の金を得たから直様紳士と見掛ける氣に成たのです子(秀)イエ爾仰有ッては違ひます成る程紳士の振をして貴方を欺いたの重私しの不心得ですけれど是も矢張り止を得ぬ次第で(保)ナニ止を得ぬと云ふ程の事はありません貴方は唯紫紋嬢が後取娘であると言ふ事を知たから其婿にても成る積であつたのでせう(秀)爾う思召すも無理はありませんが併し其様な慾心ではありません私しは嬢様を救ひ出して其顔を眺めた時ア、世に斯くも美しくしき女があるか若し此が貧家の娘でもあらうなら我妻にも貸ひ受るけれど、様々の事を思ひながら其家まで連れて行くと思つたよりも大家の様子見ては最う斷念の外はないと此上もなく失望しましたけれども唯だ其母御なる野瀬夫人

が身に餘る難有いお言葉を掛けて下さるので、(保)夫て又大膽な了見を起したと云ふのですか(秀)爾ではありません紫紋嬢と私しの身の上には上下の隔がありますので私しは初て我身の不幸を嘆きました我身には身分もなく素性もなければ再び此家へは近寄る事は出来まいが同じ人間に生れながらア、悲い者だと斯思ッて居ました所ろ是が世に云ふ魔が指すとやらでせうか今金満家の振をすればナニ後々とても野瀬家に入出入の出来ぬ事はないと不圖思ひ附たのが偽りの初です既に今までの定もなき暮し方に飽て居ますし今上等社會に交際の猪口が開けたを幸に此交際を失はぬ機にすれば自然に我が身の品格も高くなり人並の尊敬を受ける機にも成られ機かと斯う思つたばかりに心まで眩ましたハイ全く惡氣のあつて仕た事ではありませす既に此通り白状すれば貴方を欺いたと云ふ譯でもありますまい何うぞ此上のお情には今まで申た私しの言

葉を野瀬夫人と紫紋嬢に其儘お傳へを願ひます全体云へば私しの
 口より直々に白狀してお詫をする所ですが最うお目に掛るも厚皮
 しい譯ですからと他事もなく打明此言葉に保路は私に喜の念を催
 し流石は我子なり今まで下等社會に染みたるも心まで腐りはせず
 此後どもに行ひを改めなば親子の名乗をするも耻しからず夫にし
 ても猶ほ今までの身の上を知ん者と強て餘所くしき顔を粧ひ最
 う斯まで打明けたからは序に是より以前の事まで残らず打明てお
 仕舞なさい此後又何の様な事でお目に掛るかも知れませんから(秀)
 イヤ最う何も隠す事ありません私しは是まで全く艱難貧苦の中
 に成育ました(保)艱難貧苦とは(秀)ハイ一番最初は商船の給仕と
 なり船に乗て世界中を航海し其中には難船に逢ふ事も有り病に掛
 る事も有りお話しに出来ぬ程の艱難です終りに米國の金山州に行
 きまゝして金山の坑太にも成りましたが夫で以て數千圓の金子を得

此巴里へ歸りまして夫の一年ばかりの中に失ひ今度は語學の教師
 をいたしましたけれど是も思ふ様に行きません兼て乗馬を愛するのを
 幸ひに其後競馬の事に手を出して折々の大金を儲る事もありまし
 たが大抵の先づ貧窮て時に由れば三度の食事にさへ差支へる事が
 有りました(保)夫でも矢張りお添と一緒居たのですか(秀)ハイ一
 緒に居ましたがお素よりお添の世話に成るなどと云ふ事の有ませ
 んお添も私しを愛して居るのか少しも貧苦を厭はずに今までは暮
 しました併し何時までも共に居る了見の有ませんから何うかして
 手當をする丈の金を得て其上で分れ度と思ひ様々に苦心をして居
 ますうち先程申ます通り競馬で大金を得ましたゆゑ實は最う是が
 分れと思ひ何時になく花居へ連れて行きましたので其後は御存の通
 りです私しの身の上は今まで全く汚て居ます他人に聞せるのは我
 ながら赤面します併し是と云ふのも私しの父の罪です父が不人情

にも私しを捨てたからですと爽かなる眼許に少し涙を浮むれば保路は聞くに堪えぬと猶ほ何氣なき体を示してオヤ貴方は未だ父に逢た事がないとか聞きましたか(秀)ハイ一度も逢た事ありません父の私の母を欺き私しを振捨て儘て何所に居るか分りません私一の事を何でも思ひません(保)何でも思はぬなど、其様な事が何うして分りますか(秀)若し何とか思ッて居るなら私しを尋ねる筈です私しが伊太利の寺に居る事、母から知せて遣たと云ひますから若もや尋ねて来る事でも有かど今までも其寺への絶えず住所を知らせて有ます此通り父に捨てられ善悪の道さへ知すに育た私しです悪い道に陥迷ふの、私の罪でなく全く父の罪と云ふ者です私一の悲しい事に父の名前さへ知ませず唯佛國人と聞たばかりで私しから尋ねると云ふ事も出来ません若し幸ひにして其父に逢ふ事もあらば私し其不人情を責て遣たいと思ひます併し今まで私し

を捨て置く様な不人情な人ですから譬へ逢ても父と云ふ事を私しに推隠し知ぬ顔で居るだらうと思ひます茲に至て保路の殆ど我胸を刺さるゝよりも辛し我こそは汝の父なりと名乗る外、あられど今まで此少年が時に臨み場合に應じて偽を吐くに巧なるとい、殆ど舌を巻くばかりなれば保路も心を締め容易に名乗りもせず爾云へば其様な者ですが父の方に云はせれば又何の様な道理があるかも知りますまい(秀)オヤ貴方の父の心を知て居る様な事を仰有るが(保)イヤ心を知る筈がないが唯世の中に、様々の情實がある者だから父の方にも矢張り言ふに云はれぬ情實のある事だらうと思ふ丈です(秀)イエ何の様な情實があるにしろ若し人情を知た人なら私しの有家を尋ねぬと云ふ筈はなく又尋ねたら分らぬ筈のわりません夫を尋ねもせず置く者ですから私しも此の様な我身ながら愛想の盡る人間になりまゝた最も斯い云ふ者の今でも若し

其父が何か云ふ事て私しに逢い己が前の親であると唯一言名乗
て呉れば親ですもの子ですもの何て其父の耻になる様な事を致し
ませう私しの不肖ながらも紳士の血を受けて貴族の腹に宿った者で
す今からでも其父が天晴れ己の子だと世間へ向って自慢する様に
して見せます此心を父に知せ度と思ひますと説來る言葉の一とし
て保路の胸に磨へぬはなし此少年若しや既に保路を我父なりと見
て取て殊更に斯く責むるには非らざるか其の言葉の巧みなる殆ん
ど疑はるゝばかりなり

第十九回 (説明三)

ア、言葉言葉ほど力強き者いなし舌一枚の作用以て人を怒らしめ
以て人を泣かしむべし況てや我子生れてより一度も顔を合さる
我が子が我を父なりと知ずして我が薄情を責む我れ假令ひ石の心
より鐵の腸あるとも如何でか之に動かされざる事を得んや野瀬保

路の我子と分りし秀雄の言葉に心の奥までも刺貫れたる想ひをな
し今は何とか一言の言譯なくては叶はず親子と名乗るは猶早く
とも満更に他人の顔をなし餘所なくしく此場を過すは我心之を評
さす及ぶだけ平氣の顔を作りて貴方は其父を左様に薄情だと云ふ
けれど斯く申す野瀬保路が實は貴方の父イヤ貴方の父を知て居る
と云へば貴方の何うなさる(秀)ヤヤ貴方が私しの父を(保)ハイ知
てゐます貴方は父の事情を知らず其様に薄情とばかり思つてゐる
けれど決して爾まで薄情な人でいありません(秀)薄情でなければ
私しに面會を許しませう私しは逢て此事を云ひ度と思ひます(保)
夫の出来ません最う此世にはない人です(秀)ヤヤ最う此世にはあ
りませんか夫て其死際に私しの事を貴方に話して貰ったのですか
死で其後の誰が嗣ぎました(保)誰れが嗣ぐと云ふ様な立派な身代
ではなく非常に貧い暮しをして選した者の借財ばかり身代とは

一錢も遣しません夫に貴方が生きて居る事も知りませず(秀)イヤ私
 しの云ふのり身代の事でのありません私しは羽振と云ふも父の姓
 でなく何うか其名前だけでも嗣ぎ度いと思ひます父の私くしの事
 を思ひずに死ましたか自分の名前さへ私しに呉りませんが實に恨め
 しいと思ひます(保)イヤ爾でない死る時までも絶へず貴方の事を
 思つて居たればある死際にも貴方の事を言置たのです(秀)イヤ私
 一の事を言置いたどの何うして言置ました唯今貴方の私一の生て
 居る事を知ずに死だど仰有つて(保)イヤ多分我子の死だのだらふ
 と思ふけれど若し生きて居たならば是々として呉れど頼みまゝた父が
 少年の頃に外國の貴婦人と言替した事を知るのは唯だ此保路一人
 てす父の死る時まで貴方の事を忘れず若し此世に生きて居るならば
 定めし艱難して居るだらふ艱難の爲め何の様な悪人となつて居る
 かも知れぬけれど夫の全く父の罪ゆる其罪の許しをするが併し万

一にも巡り合ふ事があれば直様親子の名乗のせず唯だ及ぶだけの
 力を假し其悪き境涯より救ひ出し其上にて立派な男となる見込が
 あれば其時初めて親子の名乗をするど斯く云ふて死ました(秀)な
 る程夫の道理です假令ひ親子どの云へ心さへ分らぬ中に其名乗の
 出来まますまいイヤ爾までも私の事を思つて呉れどならば何で父
 を恨ませう今まで其お心を知らずして兎や角云つたの勿体ないと思
 ひます此上のお情に何うぞ父の姓名を承まはり度いものですが
 (保)イヤ夫の未知されません貴方の父から容易に知せて呉るな
 ど断られてゐるのですから(秀)イヤ其様な事まで断はりましたか
 夫でい全く貴方が私しに廻り逢ふ事まで知てゐたかと思はれます
 (保)左様サ虫でも知せたと云ふ者か死る時に枕許へ私しを呼び若
 し我子に逢ふ事でもあれば已のする通りにして貰ひ度い初から名
 前など知さず先づ今までの履歴を探り随分人になりさうと認む

れば充分に力を假し其行ひを監督して愈々己の子と吹聴して世間
 て笑はれぬ様になれば其時初めて己の名を知せ己の息子と名乗せ
 て呉れど堅く斯う願んだゆゑ(保)夫ては此後私一の行ひ次第で隨
 分其名前を知せても下さるし又私しを其人の息子だと披露もして
 下さるのですか夫は何より難有いと思ひますハ屹と身の上を謹
 しんで天晴れ其人の子と云はれる様に致します併し夫にしても切
 て墓参りだけはしたいと思ひますが父の墓は何所にあります保路
 は快裕の男子にして斯る女々しき言葉を好まず空々しき言分かな
 と筆ろ心に賤めども其顔色は少しも見せずイヤ墓を知せば其名前
 まて分る譯ゆゑ夫は知されません併し私しは其人が外國の貴女
 に愛せられて居る時に貴女の顔も見ると又貴女より友人に送つた
 手紙も見て今でも充分に覺へて居ます夫て先日お添の許で貴女の
 母の遺身と云ふ油繪と手紙を見た時に全く貴方が友人の子である

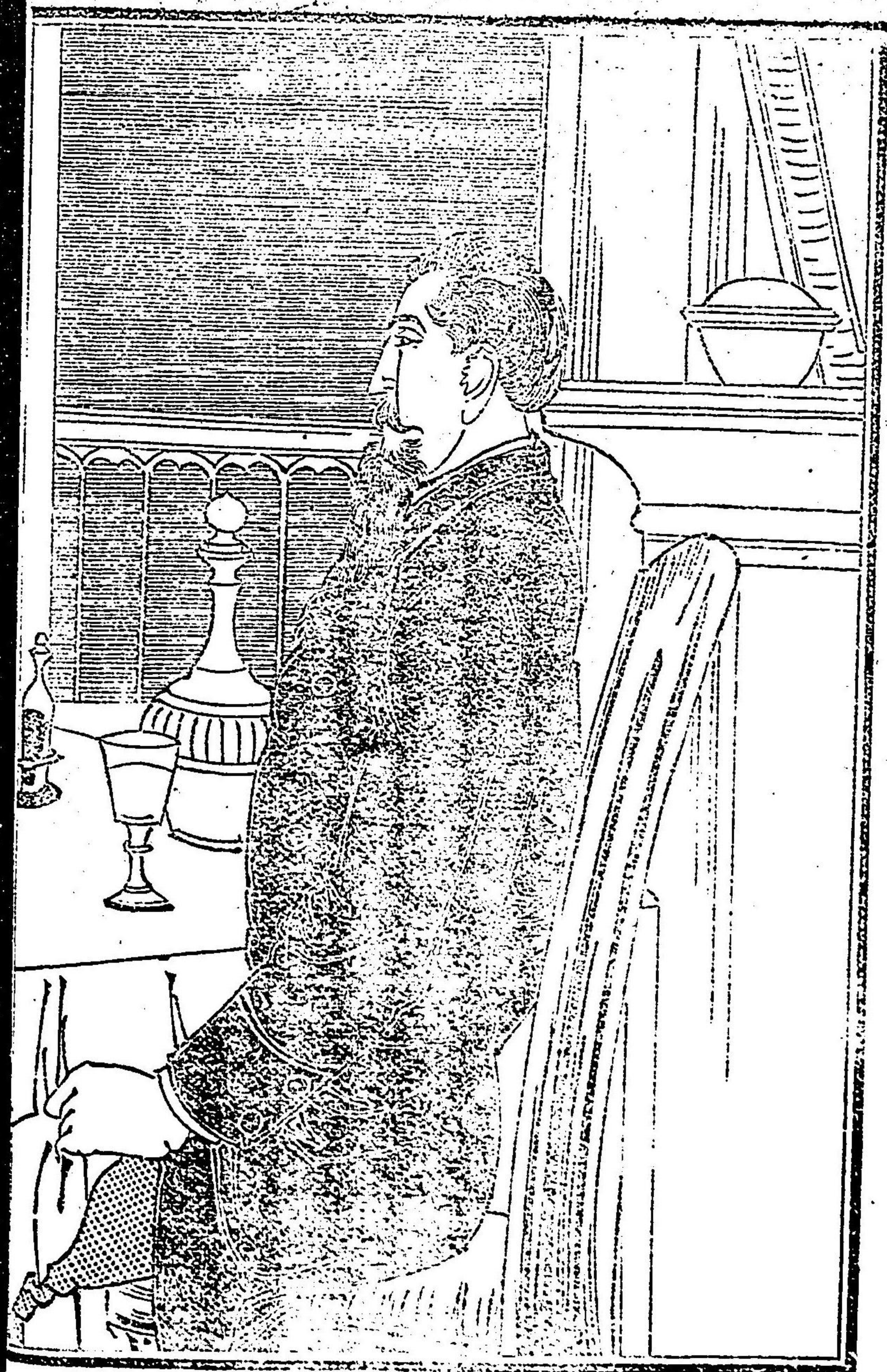
事を知たゆゑ若し芝居の火事で焼殺されたなら相應に葬式をして
 遣ふし又生て居る物ならば友人に頼まれた丈の盡力をして遣ふと
 斯う思つて二品をお添に仕舞せて置ました此上の唯貴方の行ひ一
 ツです(秀)イヤ其お心の分りまゝ私しは喜んで其試驗を受ませ
 う此上は何なりと唯貴方の仰せ通りに致します(保)イヤ私しから
 何もア、しろの斯しろのと差圖はしません唯貴方のする事を見て
 居て好むと思ふ時には力を假ふ丈の事です殊に又紫紋嬢の事なども
 アンハ何うしても身分ある紳士の妻と仕て遣たいと思ふに依て貴
 方が先刻言た通り假令ひ愛情を起して居るにもしろ素より私しから
 紳人口を聞く事は出来ず(秀)夫は勿論の事です(保)私し唯だ寄
 らず障らず之を重で云へば宛も局外中立と云ふ姿で見てゐませう
 秀雄の心にては定し嬢の所へ足踏をするなトまでに制らるゝ事と
 思ひしに局外中立とて何うでも勝手にしろと云ふは難有き言葉な

り汝の腕で鐵を手に入らるなら入るも好しと云ふに同じければ此人何故に斯までも我に寛かなるや是にて見れば我父と一方ならぬ親密の間柄なり一に相逢なく此上の私に我父と如何なる交りをなせし人なるや其秘密を探り出さんと獨り心に合けり

第二十回 (迷ひ)

問ひつ問はれつする中に秀雄の保路の存外我に甘きを見て取り其心の底の知る由なけれど兎に角も此人の信用を得ば我身に取りて損のなしと斯く思ふに由り唯だ殊勝かに保路の言葉を打聞くのみ(保)貴方が私し共を欺して居たと云ふ事が野瀬夫人や紫紋嬢などに分つての能くないから名前の矢張り愛宕下秀雄と云ふ事に極やう全体野瀬夫人のアノ通り一癖ある女だから貴方がモリマス島で從兄の身代を受嗣だと云ふよりも其實を打明し父がなくて寺で育てられたの或は船に乗て難儀をしたの又抗山で金を堀つたのど有

休に言た方が益々其心に叶ふけれど夫の最う仕方がない此上の飽くまでも初に云つた通りに仕て置くが好い(秀)ハイ私しも爾思ひます(保)夫に付ての最う今までの羽振柳四郎と云ふ者の消て仕舞はねば了ないテ隠す事ほど現はれる世の習ひだから貴方が假令ひ愛宕下秀雄と名乗て居ても若しアノハ柳四郎だと言觸す者があつての(秀)イヤ其様な者の決してありません最うお添も手を切て仕舞ひますし(保)イヤ手を切て仕舞ふとてもアノ様な女だから何所までも貴方の後を尾け廻るかも知れませぬ(秀)ナニ大丈夫です其様な事をすれば唯の許しませぬ(保)唯の許さぬと云つても事を荒立ての仕方がないから私くしがお添に逢ひ能く説諭して貴方を思ひ切る様に又夫だけの手當もして遣りませう(秀)ナニ彼の様な者に爾まで御親切を掛るに及びません其中にの彼れも外に世話する人が出来て私しを忘れませうし私しも最一アノ事の忘れ



も同様ですから保路の此湖情極まる言葉聞き心に歡ばず我血を受けし子でありながら恩も知ず情も知ず夫婦の如く共に暮し共に貧苦を嘗たる女を早や忘れしも同様なりとの心の賤しき想ひ知らる去れども是も亦幼なき時より他人の手に育ちし爲と思へば深く咎むるにも足らざるか唯だ此上の及ぶだけの力を盡して其心を矯直す外いなしと心の中に合くのみ(保)夫で今夜野瀬夫人の小宴で逢う事とて是で分れにしませうか(秀)ハイ左様致しませう野瀬夫人の前で私しと斯して逢う事を呉々も悟られぬ様に(秀)心得ました是にて兩人の此料理屋を立出つ右と左へ分れしが保路の今まで我に息子あらば如何ほどか嬉しからん紫紋嬢と夫婦にして生先を樂まん者をと折々の嘆息する事もありしかど今日の前に我子を見其心を探り知るに當りての左まで嬉ばししとも思はず紫紋嬢の婿にするの好ければとも若し嬢の生涯を誤らしむる事もあらば死

せし兄に對して言譯なし去ればとて彼の秀雄も我が誤ちにて捨置きたため斯く魂性の腐りし者なれば此上の手入れ如何に由りて又一廉の紳士となるゑとなしとも云ふ可らず既に紫紋嬢を愛し初たりと云ふ者を我が心一ツにて引裂くも本意に非ず彼の帆足鏡夫に今宵の小宴に於て充分秀雄の化の皮を剥き耻を搔せて再び嬢の許へ出入の出来ぬ程にして呉んと約束したれども夫の我子と知らぬ前なり現在我子と分りし上にて如何で斯くの如き邪慳なる事となる可きぞ此上の唯だ寄らず障はらず秀雄と鏡夫の競争に任せ置く外い非ず任せ置きなば容貌と云ひ機轉と云ひ秀雄の鏡夫に優るが上既に野瀬夫人の心を醉せあれば返つて秀雄の勝利とならんか夫にしても用心すべきは添なり私にお添の様子を見るに屬魂秀雄に溺れ居るゆゑ若しや秀雄が紫紋嬢の許に出入するを知りなば如何なる事をなさんも知れず今の中に説諭して秀雄を思ひ切せ

置くに如ずと斯く思案しながら一二町歩み去りて見るともなく行
 手の方を見遣れば定も好し早足にて我方を指來る女あり是なん彼
 のお添なりお添は保路の顔を見て用ありゆに歩り寄り私しは今寺
 へ行き何うぞ柳四郎の機嫌を直す様にと神様に祈りを上せ斯して
 宿へ歸る所ですが貴方へ柳四郎を何うしました(保)別に何うもせ
 ぬか今其所で分れたのだ實はお前の爲を思ひ色々柳四郎の心を
 測て見たがお前も最う思ひ切るが好い既に柳四郎の方で心變りが
 して居るからお前が彼れは云った所が仕方がない是から後お前の
 身は何うでもして立つ様に私が目を附けて遣るからお添は此言葉
 を聞き往來をも憚らず聲を放って泣出しエ、悔しい最う心が後り
 ましたか今まで私に散々の難儀を掛けて此頃少し樂に成たどて
 早や其様な事を云ふ分りました外に必ず出来たのです其様な心な
 ら私の方でも覺悟があります是から柳四郎の姿を見認め次第後

を尾けて其女の住居を突留め散々に毒づいて遣ますから(保)イヤ
 其様な短氣な事を云ふ者でない神妙にして待て居れば其中には
 私が又柳四郎を説諭して出来る事なら復の鞘へ納まる様に(添)
 イエ貴方までも柳四郎の肩を持ち其様な事を仰有るのです此恨み
 は何うしても晴しますから柳四郎に逢たら用心しろと仰有つて下
 さいましたエ、悔しい〜と我を忘れし有様に往來の人も振返つて
 見る程なれば保路も困じ果て様々に言慰さめて漸く宿へと歸した
 り夫より保路の足を轉じて我が家へ歸る路も心の百端に阻迷ひア
 、何うしても好ぬアのお添があるから容易に秀雄を紫紋嬢の婿に
 へ出来ぬ若し秀雄が嬢の許へ行く事をアのお添に知らせたらお添
 が何の様な事をするかも知れぬ夫が爲めに嬢の名前にまで掛る事
 があつても仕方がないから一層の事今の中に嬢を帆足銳夫に遣ッ
 て仕舞ふか爾だ〜成る可く早く銳夫と婚姻させて遣ふ秀雄に

第二十一回

(後の祭)

左様サア己の子息と云ッて辱しくない立派な人間になれば似合しい妻の幾等もあるだらふ併し一爾だ一併し一爾だくー

今日のはれ日曜日夕方より野瀬夫人の宿に於て帆足銳夫愛宕下秀雄及び野瀬保路等落合ひて小宴に列なる筈なり此小宴ころ一同の身の上に一方ならぬ波風を起し來る元なれど開の後に譲り此に彼の帆足銳夫の事より記さん銳夫の火事の夜保路に分れ其翌夜又保路と共に食事をしたるに其時保路の話しに日曜日の小宴に彼の美少年愛宕下秀雄と同居する事なれど個の決して恐るゝに足らず秀雄の禮儀に慣れざる墮者なる故我が計略にて巧に彼れに耻を搔せ再び姉の許へ出入する面目さへなきほどに赤面せしむる故其機を外さず汝宜しく夫人の心を取り婚姻の日取まで取極む可しと最と願もしき言條なりしかば銳夫の大よ其信切を歡び保路に

して既に斯くまでも我が爲めに力を盡し呉るから彼の美少年も恐るゝにも足らじと獨り心を落着けて其後保路が影さへも見せざれど左まで氣にも留ず素より彼の美少年が即ち保路の子と分り之が爲め保路の心全く變り今まで我が爲めに力を盡さんと云ひしに引換に今は局外中立と云ひ寧ろ我れよりも美少年を勵す如き様子ありとは神ならぬ身の知る由もなしア、紫紋襪は我が物なり今年の夏は外務省より暑中休暇を賜ふに由り其時を以て婚禮し休暑中には蜜月の旅をも濟さん其事の緒口を開くは日曜日の小宴なり此小宴は我が爲めには極樂園の入口なりと斯く思ひて只管に日曜日を待つ中にも此外に猶ほ銳夫の心に掛る一條と云ふ彼の金子の紛失なり三万圓盗まれたりとして身代に障る事はなきも先祖より傳りたる財産の一部なれば其儘には捨置き難し表沙汰にはなすまじと保路に約束したれど銀行だけへは其事を届け置かねば叶はず一度

銀行に届け置かば彼の手形は無効の者と見做され假令ひ曲者が引替に行くとも銀行に於て其引替を承知せざるのみかは事に依りては曲者を警察に密告する事もある筈也る假令三万圓の中にある正金は歸らずとも手形の分だけは無難に濟まんと金曜日の午前外務省へ出勤の路にて銀行に立寄りつ其屈を濟したるに事既に後の祭なり其夜に入りて銀行より一人の手代尋ね來り後にて篤と調べたる所る彼の手形は既に水曜日(即ち盗まれたる日)の夕方に年の頃五十ばかり英國語の言葉を使ふ商人風の男來り正金に引替へ行きたり手形は唯だ何人を問はず持參せし人に渡す定めなる故銀行の失策に非ず全く届け出の後れし爲なり手形を持來りたる其人は是まで銀行に取引ある者にも非ず確かに初めての客にして手形の裏書には名を永野喜助と記したるのみ孰れの所に住む人なるや更に分らず斯る次第なれば此手形に記せし金だけの全く持主たる銳夫の

損にして銀行にて償ふべき者に非ず銀行の唯だ念のため警察へ其者の人相を届けたれば是にて盡すだけの義務を盡したり此上の唯だ警察へ問ひ合されたしどの旨を告げたり銳夫の我が届出の後れしを悔みたれど今となりての斷念の外に詮方なし氣永く警察の盡力を待つうちに其曲者の露見して失たる金の一部でも返り來らば思ひ儲けぬ幸ひなり夫にして商人風の男と云へば我が従僕を勤めたる傳助に非ざるならん傳助の永く我れに仕へし者なり其身持悪しくとも盗みなどする者にはおらじ彼れが今猶ほ歸らざるの必ず火事場にて死せしなるべく實の曲者の外にはおらん夫も是の今の取返しが附かぬ事なりと銳夫の自ら思ひ切りたれば此後の痛く心にも留めず斯くする中に早や日曜となり日も暮れ行きて小宴の刻限に到りしかば銳夫の家を出て野淵夫人の宿を指し行きけり

第二十二回 (小宴)

帆足銳夫の外務省に出仕する身ほどありて最も嚴重に時間を守り日曜日の夕方七時の時計に後れもせず先だちもせず彼の野瀬夫人の小宴に入來れり此時野瀬保路の既に來り彼の美少年愛宕下秀雄の未だ來らず世の人に異りしを好む夫人の癖とて小宴の家の中に開くに非ず庭に卓子を持出し之を圍みて初るなり萬一雨降る時の用意にや空にの廣き日蓋の布を張り其兩端の樹の枝に結びたり天套の下に住むと聞く野瀬人の宴會に異ならず帆足は先づ夫人に向ひ火事より以來四五日間の無沙汰を詫るに夫人は早彼の美少年を賞め初め予エ保路さんアノ愛宕下秀雄さんは火事の後最も幾度も來て下さいましたよ私しハアノ様な禮儀を欠ぬ人が好サお前もろうてはないか予エ紫紋嬢は返事なし保路は今宵寄らず障らず中立すると約したれど彼のお添が秀雄を恨む様子を見てよりは其心

稍や挫け一層の事早く紫紋を銳夫の妻にする方返つて後日の爲かとも思ひ殊には冒頭より既に夫人の倚りたる言葉を聞きては銳夫の肩を持たぬ譯にも行き難し猶ほ中立の心の失いぬと爾サ秀雄は何も用事のない身体だから幾度でも來ませうよ銳夫は外務省に出仕して居るのだから同じ様には行ませんのサ其事務が忙しいので(夫)忙しい思ひをした末に出世とか何とか云つて漸く領事になれば直に又世界の果へ追運れるのですか本統に其様な人の妻になる女は可愛想だと思ひますワ(銳)併し私しは妻の爲となら其時でも辭職します若し妻になる者が航海を嫌うならばと眞面目に述べ紫紋は之に加勢し私しは航海が好ですよ(夫)おやお前は航海が好だつて私しは大嫌ひサモリマス嶋なら行くけれど其外は厭なあとく予エ保路さんモリマス嶋は大層好い所だつて秀雄さんが爾云ひましたよ(保)秀雄と云へば今宵は未だ見へぬが餘り人を待せる

のは紳士の作法でないぞ云ひつゝ、時計を眺む(夫)ぞ云つて餘り早く来る方にも迷惑しますよ(保)迷惑か知らぬが最約束の刻限を二分過ぎた随分腹が空たア(夫)ア保路さんは食ふ事ばかり云て居るよ貴方が胃病にならぬの不思議だと思ひますワ帆足さんも最腹が空ましたか(鏡)イヤ私には未だ少しも(鏡)私も未だ空ません(夫)では腹と帆足さんは性が合ぬ夫婦になるには所夫と妻と性質の違つて居るのが互ひに助け合ふぞ云ふから斯く云ふ折しも下僕来り愛宕下秀雄の見わたる事を告れば夫人は宛も螺旋を以て跳返す如く椅子を立ち立關に走り行きつ手を引きて秀雄を連れ来り之を我が右に坐らせ鋭夫を我が左に置き其次に保路を遣り保路と秀雄の關係を介みたり此席頃は保路も鋭夫も心に落ぬと唯だ夫人の意に任せ置けり愛宕下秀雄の保路の口をさへ驚かすばかりに品格好く着飾りの言葉少なに一同に挨拶すれば夫は早くも又

火事の話しを持出せり去れど秀雄は今日こそ保路に試験を受け實の父の名前を聞き我が出世の門を開く其緒口と思ふに由るか萬事遠慮勝に控えたり保路は又夫人を矯めんと貴方は先夜も言た通り自分が鋭夫に救ひ出されたのでありませんか何も愛宕下氏ばかりが人を救つたと云ふのでないし夫で丸ツきり救はずに歸つたのは貴方ばかりです此一言には保路も少しムツとせしかナ私しも一人の小女を救ひ出して遣ました(夫)オヤ貴方がア、分つた其女を救ふために夫で紫紋を捨てたのです貴方其年に成て未だ女を救ひ鹿のですか(保)アノ様な混雜の際には誰彼の別なく手に任せて救ふのが人の義務です貴方には今云ふが初めてですが帆足鋭夫には既に話しました(夫)何と云ふ女です(鏡)イヤお話しにする様な女ではありません道徳も何も知らぬ貧家の娘で此様な席では断すも汚らばしい程ですと云ひながら私に愛宕下秀雄の様子

を見るに秀雄は猶ほ眞面目に構へ此断しを耳に入ぬかと怪しまる
 (夫) 貴方が救ふのだから何うせ其様な詰らぬ女だらうと思ひまし
 た貴方は夫でも嬉しいと思ひませう子(保)別に嬉しいとは思ひま
 せんが縁おつて救た者ですから何所までも力になつて遣うと思つ
 て夫人の何んど云ひても保路が屈する色なく一々我言葉を挫くか
 と疑がはるゝゆゑア、此様な詰らぬ断しの止して愛宕下秀雄さん
 にモリタス島のお断しを伺ひませうエ秀雄さん先日のお断しての
 モリタス島と云ふの元々佛國の領分で今の英國の者になつたど
 聞きましたたが今までも氣侯に違ひがないのでせう子貴方又近々
 の内に其島へお歸りですか秀雄の少しも浮き立たず單に「イエ夫人
 よ」答ふるのみ何所ともなく悲しみを帯びしかど見受らる夫人の
 早くも其氣を察し「ア、分りました貴方のモリタス島の事を言出し
 たから死だ從兄などの事を思ひ出し夫で其様にお慰まなさるので

せう御免くださいいよ夫で又外の断しに移りませうサア何が好う
 します秀雄の猶ほも頭を垂れ返事さへせず控へしが忽ちにして
 深く決心せし人の如く其顔を揚げ「イヤ其様に仰有られての益々恐
 れ入りますが私し今日貴女を初め様様や茲に居ッしやる方々に
 詫を申しに参りました夫人の驚きて聲を發しお詫どの何ですな
 エ此保路さんが帆足さんばかり最負して貴方を悪い様に〜と言
 ひますけれどナニお詫に及びません私しと懺どが貴方の味方で
 すからお詫など、其様な弱い事をナニ言ふに及びますものか(秀)
 イヤ其様な事でのありません私し今まで貴方がたに我が身の上
 を隠して居ました其誠を白状せねば實に濟まぬと思ひますア、此
 少年の如何なる事を言出んとするや保路までも此言葉に驚きた
 り

美少年愛宕下秀雄は何事を言出んとするや今まで我が身の上を隠して居ましたとて是より誠の事を白状せんとするなるや一同は唯だ顔と顔見合すのみ秀雄は猶ほも悲げなる様子を見せて「ハイ私しは今まで貴方がたを欺いて居たも同様ですモリタス島に親類がわつたの従兄の身代を受嗣だのと皆形跡もない事ですと殊更に夫人の方に向ひて云へば夫人の驚きて目を見張り夫は又何う云ふ譯です(秀)ハイ私しの幼い中に両親に捨てられて此世に頼る所もない本統の一人物です(夫)オヤ夫ての火事の夜にモリタス嶋からお歸りなされたのでありせまなか(秀)イヤ彼の夜にモリタス嶋から歸たには相違ありませんが夫まで唯だ世界中の海を航海して居ましたハイ自分で働かした金子の外に身代も何もない者です(夫)夫は猶ほ貴方の名譽と云ふ者でありませんか活字もなく親兄弟の財産を受け夫で紳士などゝ威張って居る人より自分で稼いだ人

が幾等豪いか知ませんワ何故貴方は早く爾とお話しに成ませんか(秀)イヤ實は直にもお話しする所でしたがアノ夜野瀬保路氏から身の上を問はれた時両親もない一人者だなどと其様な聞苦しい事を御聞せ申すも如何と思ひ且は再びお目に掛る事も有まいから唯其場切の事と思ひ濟ぬどの知ながら有もせぬ事を有様に云ひましたのでナニ悪氣が有と云ふ譯で有ませんが其後意外にも貴方がたが斯して出入をお許下された故何時までも其偽を偽の儘に通してゐならぬと實は今夜御詫びに上りましたので我ながら今更後悔に堪ません斯様に偽などを吐く者を以來寄附る事が出来ぬと仰有れば私しは是切りでお暇に致します(夫)貴方は先ア何故其様な心の細い事を仰有います偽を吐くのが悪ければ此保路さんなどは此世に住む事も出来ません殊に貴方は謙遜な御心から再び逢ふ事も無からふと爾思つてアノ様に仰有つたなら返つて紳士の作方に叶

ッて居ると云ふ者です夫を父濟ぬ事と思ひ斯して御取消なさると云ふは他人に眞似も出来ぬ事です私共は益々貴方を尊びます爾打明けッて下さったからは最う他人とは思はれませんと熱心に述立るは稍や端なき振舞に類すれど居並ぶ紫紋嬢と帆足御夫も此少年の正直なる心には私に感心して見たり之に引替へて野瀬保路は唯だ少年の心の中を怪むのみ今となりては白狀するにも及ばぬ事を何故に白狀するや或は斯く打明なば却ッて我身の信用を増すならんと裏をかく計略なるや夫ども眞實後悔に堪はざるか去れど其言ふ所悉く眞事に非ず眞事と嘘事と打雜たるは猶ほ眞實の後悔とは認め難しア、此少年の心の中は益々深くして恐ろしと危み思ふも無理ならず少年は曩に保路が我れに告げモリマス唄にて從兄の財産を得たりなどと尤もらしき事を云ふよりも艱難辛苦の中に人となりし誠の履歴を打明けなば返ッて益々夫人の心を動すべ

きにト斯く言ひたる事を覺て居て扱ころ白狀ならぬ白狀を初りたり此白狀は無益ならず此が爲めに醜までも痛く心を動したり去りながら獨り保路は我が子が斯くまでも陰險の性なるかと思へば返ッて歎ばしくは思はず一層の事今の中に紫紋を帆足に與ふること後々の爲ならめどイヤ愛宕下氏が自分から進み出て白狀する其心掛けは感心です斯う打解けた仲になれば近々に執行ふ紫紋と御夫との婚禮の席へもお招き申す事に仕ませう子エ姉さんと夫人の方を打見遣れば夫人は又も燥立て貴方は何時でも餘計なお多舌りをして困ります近々の中に嬢と帆足さんを婚禮させると誰が其様な事を定めました(保)誰がとて既に一同で定めたる同様です來る七月一日には帆足も必ず夏休みになりませうから二日の日に婚禮をして其翌日直に伊國か瑞國へ蜜月の旅に出るのが丁度好い日取です(夫)ダッて帆足さんは大變な盜坊に逢たと云ふでは有ませんか

蜜月の旅費は保路さんが貸すのですか此失禮なる言葉には鋭夫も思はず顔を赤めたれど根が温なしき男なれば「エ蜜月の旅費まで盗まれません」と云ひしのみ(夫)でも此席は其様な事を話す所てはありません是から愛宕下秀雄さんに其航海の話しを聞ふてはありまんかサア秀雄さんお話しなさい私には航海の話しが大好きですワ能く小説などにもあります航海ほど險呑な者はないと云ふではありませんかど一心に秀雄の方に向ひ保路と鋭夫には顔さへ借さず(秀)ハイ随分險呑な事もあります難船に逢た事は幾度と數知れず殊にトレンズの海峽では人食人種に食殺されやうとした事もありました夫人は名を聞くさへも初めての地名に唯だ感心して「トレンズの海峽大變な所でせうチ(秀)ハイ夫よりも猶得險呑に思つたのは米國のカリホルニヤで金山を掘た時です此時ばかりは命掛でありました(夫)爾てせう鐵山は兼て浮雲い所だと聞きました貴方

其事柄を聞せて頂き度ものですチエ貴方紫紋も聞た想にして居ますからサアお話しなさいなエ貴方サア(秀)ハイ私しも自分の手帳へ金山の争ひと題して書認めてあります其の中の肝腎な所だけを摘んでお話し申ませうと云ひつゝ早や其話しを初んどせり此より秀雄は如何なる事を言出るや嘘か實か知らざれど嘘を言ふと實よりも巧みなる少年なれば定めし夫人の心を蕩かすに足るならんぞ保路も鋭夫も苦々しく思ふのみなり

第二十四回 (小宴三)

野瀬夫人の熱心なる間に美少年は徐ろに鐵山の話しを初めたり夫人よ米國のカリホルニヤは金山の州と呼ばれる位で國中の山が皆金山だと云つても好い程です其中には既に掘盡した者もあり未だ手を着けぬ者もあり掘掛けても思ふ程の金が出ぬとか或は又資本が續かぬとか云ふ様な事情の爲めに中途で止した分もあり私

しの堀ったのは日耳曼人が堀掛て中途で金の少い事を見て止て置
たのであります尤も其の止す時に持主が其金山を株券にして賣出
ましたけれど素より金の少い所ですから其株券を買ふ人はあまり
せず其所で以て持主は止を得ず株券を富に出しました其富の圖を
私しが買った所ろ丁度其山が私しに當りました(夫)へ、エ金山の株
を富の圖にするのでずか(秀)ハイ好い金山の株券と突混て圖にす
るので(夫)貴方に當った金山は何と云ふ所に在ります(秀)シラチ
バタと云ふ所です今申す通り既に日耳曼人が見切を附けた山です
から勿論澤山に金が出る筈はなし其外にも種々の事情があつて此
上もない困難を極めました(夫)折々は赤印渡人とか云ふ土人など
が攻て来るのでせう(秀)イヤ土人の攻て来る様な事はありません
が夫よりも猶ほ悪い敵がありまして(夫)夫は何様な敵ですか(秀)
イヤ矢張り米國の同業者です全体其山と云ふのは上下二區に分れ

て居まして上の方は米國人が持て居るし下の方が私しに當たので
す所が其米國人の下までも自分の物にする積で初めに私しを裁判
所へ訴へましたけれど裁判にの入費が掛るから一層の事近途に私
しを殺す氣になり私しが桑港へ行て居る時人を雇ふて其宿の穴倉
へ火薬を入れ之に火を附けて私しを殺さうと致しました運好く私
し其時散歩に出で居ましたので其火薬が破裂してから五分ほど
經て宿へ歸りましたゆゑ幸ひ無難で済ましたが其時即死した者が
二名怪我した者が五名ありました(夫)夫の實に大變な事です桑港
にの警察などありませんか(秀)素より警察のあるのです警察で其
罪人の詮策を初めましたが私しの斯様な所に長居しての浮雲と思
ひ翌日から直に又鐵山へ歸りました此時私しの雇入れた抗夫の佛
國の人が三人愛蘭土人が一人支那人が五人私しと共に僅十人です
が此の人数で堀初て居る中に又様々の難儀に逢ひました其譯は今

申す敵と云ふのが後よ腕力を以て私しを追拂ふ覺悟で夜など不
 意に鐵砲を以て攻て参ます私しの方にも無て用意してある事も
 十人が勢を合せて様々に防ぎましたか夫れも猶得敵の閉降せず或
 る時などの山の上から大きな石を落して私しの雇ッて居る支那人
 を三人まで殺しました(夫)夫で先ア貴方の能く無難で済みまし
 た子(秀)ハイ實に私しが無難に濟の今思ッても不思議です(夫)
 仕舞に何うして濟まいたか(秀)ハイ仕舞に敵の頭ども云ふべ
 き人が近邊に居る土人を雇ひ獸を射るに事寄せて私しを狂はせま
 した(夫)矢張り鐵砲ですか(秀)ハイ鐵砲です鐵砲ですが丁度私し
 を狙ッて掛鐵を引ふとする時に私しが雇てある愛蘭土人が夫を認
 め彼より先に鐵砲を放して其印度人を射留めました(夫)夫の實に
 浮雲い所です併敵の大將の何ういまいたか(秀)大將と云ふの
 夫より三日も経ぬうちに鐵山の穴が崩れて埋ッて死ました此が爲

に私しの漸と難を免れて其後の一生懸命に掘出したかに取掛りま
 したゆゑ貧しい鐵山ながらも彼れ是れ十萬圓ほどの地金を得まし
 て其中の幾分を抗夫一同へ分て遣り残り私しが自分の物にし賣
 拂ッて此國へ歸りました最う其鐵山の殆ど金の盡きたので此
 上の堀れば堀るだけ損になりますと涙みなき辨舌にて述べ終れば
 夫人の素より紫紋嬢に到るまでも此少年の一方ならぬ艱難を冒せ
 しに感心し昔し世に在りしと聞く英雄どの斯る人を云ふなるかと
 只管心に嘆賞したり初より何事を云ふなるかと冷き耳にて聞き居
 たる野瀬保路さへも幾分か心を動し斯くまでも詳しく述立るから
 の全くの偽りのみにい豈も非じ心の底に充分の勇氣なくば斯く險
 呑なる業の仕遂な難し是だけの勇氣あらば後々我子と名乗せ我後
 を繼せるも敢て世に耻る所なしと私に嬉しく思ふに似たり是に引
 替へ獨り帆足銳夫のみ不愉快なると此上なし我身の都の中に生

れ穩かに成長して波風なく父の身代を受嗣されたれば此席にて誇るほどの手柄はなく航海とて唯だ端舟に乗りて川に出たる事あるのみ手柄なければ人の心を引く種もなく一同の人々今我が事を忘れしか唯だ秀雄の方のみ心を奪はれ紫紋嬢さへも我が方に目を注がざるところ憾みなれ斯る時しも日の全く暮果たれば下僕が燈明を持來りしを野瀬夫人の受取らんとて立上り思はずも空を眺めてオヤ／＼天氣が變つて來ました保路さん何ういませう何だか嵐にてもなり相です保路は夫人が痛く嵐を恐るゝ事を知る故ナル程嵐になり相です併し貴女が初めから庭へ卓子を持出したのが悪いから仕方がありません(夫)アノ雨云ふ中に降て來ました何うしたら好のでせうと夫人は更に其身体さへ鎖らず燈光を持たる儘にて家の中へ逃入らんとすれば帆足鏡夫は其右に坐せし事とて浮雲ふおざりますと云ひながら直に廣で立上り夫人を扶けて家にハれり

斯る中に忽ち降來る雨の音頭の上なる天幕を叩きて唯騒がしく聞ゆるのみ保路も立上り最う堪らぬサア嬢よと云ひながら手を出すに振目なき美少年保路より先に嬢を扶けサア私しが連れて行て上ませうと半ば抱起さん折しも天此美少年を恵むにや頭の上なる彼の天套は一方の紐切れしと見れば非常の勢ひにて下向きに捲れながら落來り美少年と紫紋嬢とをクル／＼と其中に卷倒したりア、保路は斯ども知らず早や走つて家の中に在り四邊には人もなし美少年紫紋嬢と唯二人抱合ひて天套に包まれ暗き卓子の下に倒る嬢が身の上實に危と云ふべし

第二十五回 (小宴四)

少女の身は取りて耻を知らぬ紳士ほど恐るべき者はなし愛宕下秀雄の如きは紳士の種を受けて貴婦人の腹に宿りしとは云へ賤き致を受けて育ちため紳士の振舞ありて紳士の廉耻を知らず今は人

もなき薄暗き卓子の下に天幕に包まれて紫紋嬢と共に倒れたり足のみ外に出たれば其中にて如何なる事を言ひ如何なる振舞をなしたるや夫人を始め親夫も保路も更に知る由なけれど秀雄は今ぞ得難き折と嬢を片手に抱へつ我口を其耳に寄せて嬢よ秀雄は貴女を愛します此嵐にさへ出逢ずば斯様な事は申ませんが是も天の助けと云ふのでせう迎も及ばぬ事とは知ながら命を掛けて愛して居ます此愛が届かずば私しは死して仕舞ひます貴女が帆足氏と婚禮する日は私しが死ぬる日です貴女が他人の妻となれば最う生て居る甲斐もありませんと熱心なる言葉を注げり嬢は之を聞かざる事能はず耳を蓋ふにも手は動かず身を起さんにも重き天幕に包まれたり秀雄は片手に天幕を推遣んとしながらも片手に猶ほ嬢を抱き益々堅く附るのみア、鷹に捕れし温め鳥嬢は如何なる思ひやすらふ去と秀雄は何時までも断てゐるべきにわらずと知れば人々に怪ま

れぬうち早くも天幕を排退けつ、嬢を助けて立上りしが實に此夜の小宴ある秀雄が爲には又となき好機會を作りし者と云ふべし若し斯る事なかりせば假令ひ一月通ふとも彼の熱心なる言葉を嬢の耳に吹込む時なかりしやも知るべからず無駄口を聞くの折は一日に十度あり用向を語る場合は一週に一度あり愛情を言出すの機會は一年に一度だもある事稀なりと古人は云へり秀雄は唯だ此極めて短き時間の内に一年に一度さへある事稀なる好機會を得たるなり夫は扱置き嬢は起上りてより直ちに秀雄の手を離れ唯一思ひに雨の庭を通り越して二階へど登り行けば一同は茲に在り秀雄も後より何気なく入来れり夫人は宛も海綿の如く濡れ脹れて此様な事になるのも保路さんが悪いのです悪口ばかり言て居るから雨の降るまで小宴が済ぬのですと云へば保路も負けず劣らざイヤ私しよりは天氣をお叱りなさい貴女が一生懸命の智慧を絞って庭の中へ

持出した其辛苦も知らず此様な俄か雨を降すとは餘り貴女を踏
 院にして居ますと答へり獨り帆足銳夫は一方に腰掛しまゝ黙然と
 控ゆる様何事か心に掛る者と見へたり世に戀人の神経ほど鋭敏き
 者はなし銳夫は彼の紫紋嬢と秀雄とが天幕に包まれしを見たるに
 は非ざれど二人が少し遅かりしを訝り唯事には豈りあらじと今宵
 の小宴を恨めしく思へるなり嬢は又今猶ほ秀雄の熱心なる言葉耳
 に燃え外の事は心に映らず思へば秀雄が一寸の隙を窺み我耳に私
 語きしは穩かならぬ振舞なれど我心に其を恨からず思ふは何故に
 や二人倒れし其時より我胸に得も云へぬ嬉しサ滿ち今猶ほ動悸の
 定まらぬは兼て母の話に聞く眞の愛情に非ざるか斯く思へば嬉
 しさよりも却て恐しさを催し來れり滯たる天幕に包まれて心さへ
 定まらぬ瞬間に我が生涯を定む可き愛情の言葉を聞く是れ清き愛
 には非じ昔しより數多の乙女が生涯を誤りしは斯る愛情にはあら

ぬか是よもして我が一身の不幸にするは此愛に非ざるかと石流は
 清く育ちたる程ありて益々心も安からず此心の落着くまでは秀雄
 の顔を眺めまじと殊更に身を背向け私かに帆足の様子を見れば日
 頃の親切なる顔に深き心配の色を包み物をも言はずに控ゆる様我が
 爲めに悲くかど疑はる彼の天幕に倒されすは彼の言葉を聞ざり
 せば斯る思ひは無者をと只管胸を苦むるのみ嬢に引換へ叔父保
 路は猶ほ其心浮立つ如くサア姉さん此後は何うします未だ我々は
 腹一杯食ても居ぬのには是切り小宴を止る譯には行きますまい雨水
 に浮されてピステキの水ッばい所も又一興ですから給仕を呼で今
 の食掛を取寄せませうか口豆なる夫人なれど是には殆ど困せしか
 皆様が黙って居るのに貴方一人其様な事を言ふて私しまで笑はれ
 ますお腹が一ッばいにならぬならば是から料理屋へ御案内を致
 しますホンニ貴方ほど食物にガツ／＼する人はないよ宛で盜坊犬

か何ぞの様に(保)サア盗坊犬の様にガツ／＼して居ますから遠慮なく料理屋へ案内を受けませうと先に立て行んとす銳夫は之を見兼しかイヤ最う大抵にして止なさいと其手を取りて引戻せり紫紋も今は此間に在りて銳夫と秀雄の顔を見るに堪へずと思ひしか夫人の傍に進み寄り阿母さん私しは最う御免蒙ッて居間へ行きませ何だか風を引た様ですからと優く述る此言葉は一同の運命を定め小宴は是にて終る事に決したり夫人は銳夫と秀雄に向ひイヤ今夜は天氣と保路さんの爲に此様な事になりまして誠に申譯がありません之から料理屋へても御案内する所ですが此通り嬢は不加減だと云ひますゆゑ他日又改めて又案内する事に致しませうと早や嬢の手を取りて退かんとす茲に於て秀雅は第一に分れを告げ雨を冒して外に出れば保路は銳夫と共に少く後れて此を立出て通り合す馬車を呼びて共に打乗りしが其中にて保路は銳夫に向ひ何し

た今夜の小宴は銳夫は最と失望の体にて私しは最も再び此家には來ぬ積で(保)夫ハ又何う云ふ譯てア、分つた嬢が愛宕下秀雄と親しくしたから夫て失望したのだ子是て最う嬢との婚禮を思ひ切る積りかも知らぬが併し私に今から三日の猶豫を與へて呉れ三日の内には嬢の心も問定め其外の事まで取極めて私から確と返事をするからマツマ三日だ三日の猶豫だ其間先づ確かな決心を附けずに置くが好いと斯く言ふ言葉は數日以前に述べたる熱心なる言葉と痛く違ふ所ある故銳夫の失望は益々甚だしく扱は力と頼みし保路までも既に敵方の人となりたるか此上は又何をか望まんと銳夫は私かに嘆息するのみ

第二十六回 (警察官)

帆足銳夫は痛く失望して我家に歸れり今までは唯た嬢の心を頼み限令ひ其母如何ほど彼の美少年を愛するとも嬢にして我に心を案

する上は何ぞ氣遣ふ所あらん来る夏の暑中休暇には婚禮の式をも
 濟せ嬢と手を引きて蜜月の旅に出んど後の事まで樂み居たるに昨
 夜小宴の様子にて見る時は嬢は日頃より我に餘所くしく殊には
 雨降出して一同重家へ入りたる後も嬢は秀雄と後に残り暫く何事
 をかなし居たり嬢が心既に變れり我れ亦何をか望まんや夫のみな
 らず初より我が爲に力を盡せし嬢の叔父保路までも兼て秀雄に耻
 を搔せ再び夫人の許へ出入する事も出来ぬ程に面目を失はさんと
 言居たる其詞葉に背き最と嬉しげに秀雄の手柄話を聞きし上馬車
 の中にて二三日の猶豫を與へよとて我れに思ひ切れがしの言葉
 を吐きたり彼れと云ひ是と云ひア、頼み難き人心なり我望の絶
 果たり去にても彼の美少年の如何なる不思議の力ありて保路の心
 まても引入しか保路我と十餘年の親き仲に在ながら素性も知れぬ
 少年の爲に忽ち我を捨て却て少年に加擔するとい返すくも合點

行ずと銳夫の怪みに堪はず去ばとて銳夫の潔き少年なり清き教育
 を受て育ちたれば心に一點の濁りもなし素性も知ぬ愛宕下秀雄と
 一人の女を引争ふの我品格に障る者なり我身分を落す者なり紳士
 にあるまじき振舞をなし只管に嬢の心を取返さんと努るより男
 らしく思ひ切らん未練を残して笑るゝ事かわと我と我が心を罵ま
 し再び嬢が許に行くまじ再び嬢が姿を見まじ再び嬢が事を思ひじ
 と思定め定めたれと未の妻ぞと樂みて今まで深く愛せし者を指
 消す如く忘るゝは情ある者の忍ぶ可き所に非ずなまじ此巴里に留
 りて何時までも思ひの種我心を苦むる元なれば此上の外務大臣
 に願ひ遠き外國に旅行して全く嬢が事を忘るゝまで歸らぬに如く
 事なしと斯まで思ひ決したる其心誠に憐むべし翌朝起出て朝饗を
 終へ既に出勤の時刻となりたれと猶ほ斯る事を考へて卓子に倚れ
 り折しも入來る取次の男唯今貴方に而會を願ひ度とて斯様の紳十

が参ッて居ます」と差出す名札をば鏡夫の取りて検むれば今まで逢
 たる覺へなき人なり是から出勤する所だから手間の取れぬ用事な
 らば逢ても好いが(取)若し手間が取れるなら晩に來いと云ひませ
 うか(鏡)ア、爾云ッて呉れ取次は心得て退きしが引違へて入來る
 年の頃二十四五と覺しき男は紳士かど見れば紳士にもあらず去れ
 ばどて商人ども受取り難し取次の退くを待兼て此人先づ口を開き
 私しは警察の官吏ですが是だけ聞きて鏡夫は不審に堪へず警察
 官が私服を着て私しの許を問ふとは何の様な御用です(警)イヤ此
 頃取調べて居る事件に付き貴方に聞く事がありました(鏡)私しは
 警察などから問合せを受る覺へはありませんが若し人違ひでは
 (警)イヤ人違ひではありません確に帆足鏡夫君に問合せるのです其
 譯と云ふは去金曜日にチャペル街を巡て居る巡查が其街にある荒
 家の穴倉の中から倒れて居る人を引出しました初は死骸かど認め

たが引出して見ると死骸ではなく未だ生きて居るので早速病院へ連
 れ行き検査をさせると二日或は三日も以前に酒に酔て落た者であ
 らうとの鑑定です殊に其者は逆さに成て落た爲め強く腦を打たと
 云ふ事て尤も別に傷はないけれど物を言ふ事も出来ず全く前後の
 事を忘れて居る様子です之を警察の目で見ると自分で落た者ども
 思はれず多分曲者に突落された者ど見受られる依て其衣囊を檢め
 るに金銭書類は一ツもなく誰だ寸胴の中に名札が一枚あつた其表
 に帆足鏡夫と書てある即ち貴方の名札です鏡夫は少驚きて夫で
 は私しが其者を突落したと云ふ嫌疑ですか(警)イヤ爾ではありま
 せん貴方に此者の顔を見せれば必ず其名前身分等が分るだらふと
 思ひまして(鏡)併し私しの名札を以て居る者は澤山にある譯です
 例之ば買物をしても此品を己の家まで届けて呉れどて名札を置て
 歸りますから(警)夫は爾てすが茲て彼是れ云ッても分りません兎

に角病院まで同道を願ひ度者ですが「此時銃夫の先の夜より行衛知れぬ我が下部傳助の事を思ひ出したれば若し其者は下部の様な風をして居ませんか(警)イヤ寧ろ紳士の身姿です(銃)夫ての少しも心當りがありません(警)イヤ兎に角も御同道を(銃)爾仰有れば同道も致しませうが併し私しは外務省へ出勤する身ですから一時間より上掛ッては困ります(警)ハイ一時間で充分です(銃)では衣類を着替て参りますから暫く之にお待を願ひます」と言置きて銃夫は退きしが後に彼の警察官實を云へば探偵吏は室の中を見廻ながらハナな此筆筒の引出と云ひ押入の戸と云ひ繼て錠前を新しくしてある所を見れば此頃賊が這入たに違ひない此邊は己の受持だのに届けの無いの何う云ふ譯かど職掌だけに些細の事にまで目を留めて眩ししが斯る所へ銃夫の着物を更め了りて出來れり警察官は之に向ひて此室の様子で見れば此頃賊に逢たと見へますナ銃夫は

其眼力に驚きながら「ハイ賊に逢ましたけれど大した損失でないから届けもせずに置ました(警)損失は少しでも届けねは了ません届すに置ては其賊が再び他人の所へ這入るかも知れませんかから詰り他人に迷惑を掛る様な者ですと諭したれど銃夫は之を聞流し「サア参りませうと云ひながら警察官と共に其待せある馬車に乗り病院を指て行り

第二十七回 (病院)

病院を指て行く馬車の中にて彼の探偵吏の帆足銃夫に向ひ今云ふ穴倉から引出された男が物を言はぬの不思議です若しや仔細のッて口を閉て居るのでないかど様々に例して見ましたが全く記憶を失つた所爲と見へます醫者の説で誰でも日頃から知て居る人の顔を見れば少しの記憶が元へ復るだらうと云ひますから事に由れば貴方の顔を見て何ぞか云ふかも知れませんが御り而白げに打

語れど鋭夫の面倒臭しと思ふのみ氣に留めて聞もせず其中に馬車
の病院に着きたれば二人の其支關より二階に登り枕を列ねて打臥
たる數多の病人を左右に見長き廊下を傳ひつゝ頓て第廿四號と記
したる寢室の前に出れば探偵の立留りて「オヤ」此廿四號の寢室
へ寐て居たが何したのか「ハテナ」と怪しむ折しも受持の醫師來り
此醫師の兼て帆足鋭夫と濁々知り合る中にして非常に乎業に熱心
し病人を草紙の如く思ひ人を診斷するに宛も手習ひをする氣にな
り謝禮のあるなしに拘はらず喜び進みて病家へ招かれ行く一種毛
色の異りたる人物なり帆足の之に向ひ我が連れられ來りたる次第を
語るに醫師の手に喜びて「イヤ夫の何より仕合せです惱隨を打て記
憶を失つた病人の我々が日頃涎を流す所で今度あるの充分の經驗
を仕やうと思つて居ました貴方の知た者だとい猶更好都合です
(鋭)イヤ私しの知た者か知ぬ者か未だ分りません唯私しの名札を

持て居たと云ふ丈の事で(探)併し名札を持って居た程なら多分満更
の知ぬ人ではありますまい實は今朝ほど腰が立つ様になり此寢室
から獨りで降ましたゆゑ裏庭へ進て行き未登の上へ腰を掛させて
あります唯今幸ひ臨床講識の濟だ所だからサア直に案内を致しま
せうと云つゝ先に立て庭の方へと降りくにぞ帆足は探偵と共に續
いて庭に立出れば一方の腰掛に倚り居眠る如く首を垂れし男あり
鋭夫は醫師と探偵の指圖に従がひ突々と其前に歩み寄れば彼れ足
音に目を覺せし様にと首を上げ「ヨロ」と鋭夫の顔を眺むれど
全く知ざる者の如し之に引替へ鋭夫は一目にて打驚き「ヤヤ手前
傳助と叶びたりア、此男全く帆足の下僕傳助なり傳助は此聲も耳
に入らぬか更に動する景色なし探偵は嬉しげに進み出て果して貴
方の知つた者です傳助とは何者ですか鋭夫は是よりして又探偵に
種々の事を問るゝ元と早や我口の迂りしを悔めども今となりては

包むにも包まれず「イヤ是は長く私しの下部を勤めて居た者ですア
ノ火事の夜から行方知れず日頃芝居好の男ですから定めし焼殺さ
れし事と思ひ心配して居ましたので（探）フム芝居とは丸で方角が
違ひチャペル街で見出たのだが「併し下僕なら役服を着て居る筈
ですが（鋭）毎もは黒い役服を着て居ますけれど外へ出れば此様な
姿をして紳士に見せ掛るのど酒を呑のが蕩樂で併し今まで私しに
迷惑を掛けられた事ありません探偵の暫し考へ「貴方が賊に逢たの
何時頃の事ですか（鋭）矢張りアノ火事の際です（探）シテ見ると實
に此傳助が合棒と二人で盗んだのかも知れません其跡で合棒の奴
が其獲物を一人で占る積りて傳助に酒を呑せ古い穴倉の中へ推落
したのだらうと思ひれますと斯く云ふ中に傳助の目を見開きて當
りを見廻し宛も醉奴の如き聲にて水を呉れ「水を探偵の喜びて傳
助の肩に手を掛け「コレ手前の前に立て居る人の顔を能く見ると其

肩を揺動かせど傳助の水を呉れ水が飲みたいと繰返すのみ醫師の
此様子を見て獨り心に合點せし如く「コ〜と笑ひながら未だ酒
の氣が抜ぬのじや非常に酔た者と見へる併し水を呉れと云ふから
ハ遅くも今より廿四時間の中にアルコホルの氣が悉皆抜て仕舞
と云ひ更に又鋭夫に向ひ私しハ此患者に就き非常な經驗をする積
りでは是非とも貴方に手傳つて頂かねばなりません（鋭）私しの醫學
的の經驗などを手傳つた事ありませんが（鋭）イヤ何六ヶしい事
でいありません實ハ此頃或大家の説で斯様に記憶を失つた病人を
ば其眠つて前後を知らぬ間に平生自分の知た所へ連れて行き目の覺
るを待て居ると四邊の様子を見て忽ちに記憶が返ると云ふ事です
實ハ此説の當否を試して見度ので（鋭）何うして夫を試ますか（醫）
イヤ今夜でも明夜でも此者の容体の好き相な時を見て眠つて居る
間に貴方の家へ連れて行き下部の役服を着させて毎も寝る所へ寐

かせ翌朝目の覺めた時分に貴方が毎もの通り傳助くと呼ぶので
 す爾すれば必ず病院に居た事などの打忘れ穴に落ちるまでの事を思
 ひ出すに相違ありませんと云ふ横合より探偵吏の口を出し其經驗
 への警官も立會ねば成ません若し此者を逃しては大變ですから(醫)
 イヤ警官は逃さぬ様に家の外で番をすれば好のてすと云ひ終りて
 醫師の更に又傳助の前へ進み出イヨ傳助何うしたんだお前の主人
 帆足鏡夫君も茲に入るせと斯云ひて鏡夫を其前に連れ出せば傳助
 の少し記憶の返りし如く鏡夫の顔を熟々眺めア、何だか見た様な
 男だナア手前の勇造の友達じやないかど云ひて目を閉たり醫者は
 又搖起して勇造どの誰だ何うした人だ(傳)勇造は勇造よ已と一緒
 に酒を呑んで勇造は何所へ行た彼奴失敬な奴だ一已を欺したぞ
 一勇造を連れて來ひ一勇造をいと云ふ其聲は全く醉僕の調子なり
 警官は職掌だけにフム是は必ず勇造と云ふ奴と酒を呑み其後で突

落されたのだ好々是からチャペル街へ行き酒屋料理屋の家を一々
 探り勇造と云ふ者を探して見ると合けば醫師も亦今日の是だけで
 澤山だ餘り色々の事を問ひ過ると返ツテ又惱に重荷を負せ過て其
 恢復を妨ぐる帆足さん呉々も又申した經驗の手傳ひを頼みますよ
 是に至りて帆足も最早や病院に長居する用はなし醫師と探偵に暇
 を告げ此所を立去りたり

第二十八回 (昔話)

帆足鏡夫は探偵と醫師に別れ病院を立出しが傳助の事は左まで心
 に掛らぬと紫紋嬢が事のみは忘れんとしても忘れ得ず此上は唯だ
 世界の果に身を避けて耳に嬢の噂を聞かず目に嬢の姿を見ず公務
 の急がしきに紛れて我心の裏より嬢の面影を掃ひ去る外は非じ好
 く今日は直に大臣に乞外國公使館詰の命を受けん夫にしても行
 先は東洋にせんか南洋にせんか斯る事は久しく諸國に留まりて迷

國の風土人情を心得たる人に問ふに如かずと斯く決心して猶ほ思ひ廻すに幸ひ長く領事を勤め名國を經廻て此の頃歸りたる吏員あり猶ほ出勤時刻には少しの間も有ば其人に就て問ふる好ければ歩を曲て其人の宿に訪ひ行きとに朝飯の爲め近邊の料理屋に行きて猶ほ歸らずとの事なれば早速又其料理屋に尋ね到れり但見れば其人は兼て知る同僚四五輩と一方の卓子を圍み大聲にて何事かを面白氣に語りながら動搖めきつゝ食事せるにぞ鋭夫も其中に割て入り人々に會釋して其話を聞き居るに其人が前年米國桑港に留りし頃の物語りと聞ゆ爾サチ此國からも食詰た奴等が随分出稼に行て居るよ併し旅の耻は掻捨とやらで随分破廉耻な事をする奴があつて領事も仲々手数が掛ると(甲)破廉耻な事とは盜坊や詐偽などか(其人)盜坊や詐偽などは未輕い中だシラチバダ當の抗山に居る奴等の強盜もすれば人殺もする抗山と聞きて鋭夫の忽ち耳を澄せ

り昨夜彼の美少年愛宕下秀雄が手柄話しに誇りしも矢張米國の抗山にして併も其土地のシラチバダなり今此人に聞たらば秀雄も或は破廉耻の事をなしたる其一人にはあらぬかどなる程抗山などに働く者は何うせ身分も財産もない族輩だから其様な行ひもありませうチ(其人)あるとも夫は最う此國へ歸つて話しても誠にならぬ程だチバダの邊には掘掛て止てある抗山があるから其様な奴等は力勝て其抗山を奪ふのだ夫だから毎でも喧嘩は絶ぬ既に今朝ほども此料理屋へ來る道で一人の紳士風の少年が私に辞宜をするから誰かど見れば矢張り私が領事で居る頃に抗山で人殺しなどした奴だ其奴が今は立派な姿をして紳士風を吹いて居るが何でも長家の娘でも引掛る積と見へる「鋭夫の益々熱心に夫は何と云ふ者です若し愛宕下とは云ひませんか(其人)イヤ名前は覺へて居たが忘れたよ愛宕下とは云はぬ様だ併し君は何うして名前などを問ふのか斯

く問返されて初て我が熱心に過しを耻ぢイヤ實は私しの知て居る者て此頃米國の金山から歸つた者がありますから(其人)イヤ私の云ふのは最一昨年歸つて來た彼地に居る頃は一目見ても悪人かと思はれる様な風をして居たが今日は丸で見違へた最う貴公子かと思はれる姿をして居る其奴などが實に仕方のない奴て愛蘭土人と共謀して坑山の持主を短銃で射殺た其罪は愛蘭土人が被たけれど實は其奴が殺したのだ私は唯だ同國人と思へば何うかして助けて遣りたいと其裁判の濟まぬうちに本國へ逃歸れとて折柄桑港へ來た此國の漁船へ隠れさせて遣たが左もなければ疾くに死刑に處せられて居る所サ(乙)では最う再び米國へ足踏は出來升舞子(其人)ナニ名前でも替て行けば少しも差支はない夫に紐育とか費府とか云ふ東部へ行けば名前を變ずとも平氣な者だア、爾だく名前を思ひ出したよ羽振柳四郎と云つたよ腕夫は素より柳四郎と秀雄と

同人なりと知ねど其話しの餘り似寄りたる故猶ほ疑ひは暗れ遣らず其男は何の様な容貌です(其人)悪人に似合はず顔附は優しいよ爾を出稼人の中では其奴を紳名して美少年くと呼で居た(腕)エ、其悪人を美少年と(其人)爾サ夫に可笑い事は其奴が自分で伯爵夫人の子だと云て名札にも羽振子爵と書て有たが米國と云ふ所は爵位のない國で大家の娘などは何爵と聞けば大騒をするのだ男爵とか子爵とか貴族の肩書さへあれば立派な家の令嬢を妻にするのも容易な事だ其美少年も子爵の肩書で以て或家の嬢に成ふとしたが娘の親から私の許へ問合せが有たら佛國に羽振と云ふ貴族はないと答へる所ろ到頭夫が爲に婿入はおシャヤンさ夫から彼奴嶺山へ手を出したのだ(腕)若し其者が此國へ歸つて大家の令嬢を欺さんとして居れば貴方は證人に成て其者の是までの不身持を證據だてますか(其人)イヤ腕足君君は又異なる事を問ふてはないか是は唯だ

私が覺へて居る丈の話して別に證據と云ふ程の確かな者を押へて居るのでないから其者が爾でないといふは夫までだ若證據を上たいとならば桑港の領事館へ掛合ふが好い領事館には確かに記録が残つて居る筈だからと斯く云ふ内に食事も済み早や出勤の時刻となりたれば一同茲を立出て散々となりたるが帆足は猶ほも其人と共に歩み是より外國公使館か領事館館を願ふには孰れの國が好るべきやと様々の事を問ひつゝ知らずく二三町も來りし頃其人は忽ち足を留め横手の方に目を注ぎたり此人果して何者に目を注ぎしか帆足も何事かと其方を見遣たり

第二十九回 (決心)

鋭夫の何事なるかと打見遣れば横手の方に坂路あり其上にて最親しげに俯ひながら散歩せる二人の紳士の是れ野瀬保路と愛宕下秀雄なり見れば見るほど目障なりと鋭夫の顔を背向るに傍なる彼の

領事の斯くと知らず君見たまへアノだく彼所に居る立派な美少年が今云た人殺の本入だ鋭夫の故と聞流し爾ですか私しの云ふ人との違つて居ます(領)でも何だか君の顔を見て喚驚した様子が見へたぜ(鋭)イヤ夫の貴方を見て驚いたのせでう(領)併し彼れに連立て居る一紳士も何だか君を知て居る様子じやないか(鋭)フム彼れの満更知ぬ人でもありませんが「と曖昧に言濁し半町ばかり行過しに此時誰やらん「帆足君と後より肩に手を掛けて留る者あり振向見れば野瀬保路なり保路唯一人にして愛宕下秀雄の姿見へどるの彼れ孰へか分れ去りたる者なるべし鋭夫の故と餘所くしくイヤ今出勤の途ですから「(保)出勤の途でも少し話しがあるぞ離し還る様子もなし彼の領事の斯と見て「イヤ帆足君私の外に用事もあるからは失敬する」と言葉軽く言捨て立去れり後に保路の鋭夫に向今の紳士の誰だ(鋭)アノア領事を勤め一昨年まで桑港に在留

して居た何某ですと特に桑港の二字に力を入たり(保)てハ桑港に
 居る頃愛宕下秀雄に逢た事があるだ子(銳)爾と見へます夫に付種
 々の事を聞きました(保)種々の事どの何の様な事を二何の様な事だ
 か聞せて貰ひたい(銳)左様と直接に貴方に関する事ではないから云
 ても差支の有ますまい第一アノ愛宕下と云ふのハ偽名で桑港に居
 た頃の羽振柳四郎と名乗た相ですが(保)夫は私も知て居るよ(銳)
 オヤ知て居ながら咎めずに置くのですか(保)咎ない譯でもないが
 羽振と云ふのも矢張本統の名字でないから孰れにしても同じ事だ
 (銳)夫に人殺の罪を犯して米國から逃て歸つたと云ひます(保)
 ナニ其様な事はない私は何うも信と思はぬ併しお前が確な證據で
 も持て居るなら早く野瀬婦人に其證據を見せて遣るのが當然だら
 ぶ(銳)イエ夫は貴方の義務でせう素性も知れぬ少年に紫紋襖の生
 厩を委す様な事があつては貴方が済むまいと思ひます私一は最ふ

此頃の事を思ひ切て仕舞いましたから(保)ナニ思ひ切た夫は餘り
 早いではないか私が既に三日の間待て呉れと云つて有るのに(銳)
 最う幾日待ても同じ事と思ひます貴方が既に手を引合てアノ少年
 と散歩して居る所を見れば貴方は充分アノ少年に望を屬して居る
 のですから夫に私しも亦何時までも蛇の生殺しと云ふ様な境涯に
 居て心配するのは好みません今までは貴方が種々に勵まして下さ
 るから夫を當に職の許へも出入しましたが最う貴方に見捨られて
 見れば(保)イヤ見捨るの何のと其様な譯ではない私は相變らず
 お前の親友サ親友だけれど其所に又言ひ難ひ事情が有て實は自分
 ても當惑して居る程の次第だ(銳)へ、エ言ひ難ひ事情とは何の様
 な事情です(保)イヤ夫が言れぬから當惑するのサ(銳)何だか知ま
 せんけれど貴方の様子は宛てアノ少年と久しい親類かと思はれま
 す(保)爾だく久しい親類と思つて呉れば間違ひはないのだ實は

私がアノ少年の父親を知て居て其死る時に後々若し我が倅に廻り逢ふ事もあれば我子と思つて保護して呉れど重々頼まれて居るのだから爾情なくもされないのて(銳)情なくドコロでの有ません貴方方アノ少年を充分顧して居るのです(保)イヤ顧すと云ふ程でも貴方紫紋織の婿に仕やうと骨折て遣るの即ち顧すと云ふ者でせう(保)イヤお前の爾云ふから誠に困る私もナニ彼の少年を無瑕の者どの思ひぬけれども其父の死際に呉々も頼れて居て見れば兎も角及ぶだけの力の盡して見ねばならぬと云ふ者夫に由て今も實に其身の上を探つて居るのだ今日一緒に散歩して居たのも夫が爲だ今朝起ぬけにアノが來てタルマ街に米國に居る頃抗山の金主をして呉れた人があるから念の爲め夫に逢て身の上を聞て呉れど斯く云ふから其人に聞に行つて今歸つて來る所だ其人の言ふ所での米國に居る頃も随分正直に嫁いだのでナニも深く咎める所ろのない

(銳)夫て何てすか其人の云ふ所が領事の言葉よりも確だと思ひますか(保)爾の思ひぬ思ひぬに依て尙ほ是からも詮策を遂る積だ其上に若しお前の云ふ通り人殺の罪があるとか其外紳士の身にあらまじき振舞があつたと分れば其時ある内容捨をせぬ最う再び此國へ歸つて來ぬ様に外國へ追出すか左なくば其罪を言立て警察へ引渡して遣る私の決してお前を捨てアノ少年を顧すと云ふ譯でない夫だに依て私が愈々アノ少年の身の上を調わがるまでのお前も早まつた決心をせず待て貰ひ度と思ふのだ(銳)なる程其調へが済むまでの矢張り織の許へも連れて行くと云ふのですチイエ最う私しアノ少年と競争する氣のありませんから是で取場を退きます織が事の忘れます(保)夫のチト早まり過る如何にもアノ小宴で愛宕下秀雄が宛で主人公の位地を占たからお前の随分痴にも障つたてあらふが私に言すれば是の秀雄が悪いでないお前の手落だお

前も負ぬ氣になつて充分に話をし、嬢の勿論夫人の氣に入る様に振目なく立廻れば好つたのに夫をお前が何となく齒に噛んで嬢の顔さへ眺めぬ様にして居たの、重々の失策さ其恨を今更ら私や愛宕下秀雄に持て来るの間違つて居る此上とも負ず劣らず嬢の機嫌を取て行くが好いと口を極めて言廻せど鋭夫の更に心解ずイヤ最う何と仰有つても私しの決心の動きませぬと愛想もなく言捨て去れり保路の其後を見送りて「フム帆足の未だ満更のおぼ見だから困る何うしても紫紋の愛宕下の妻になるワへど呟きて是も其所を立去れり

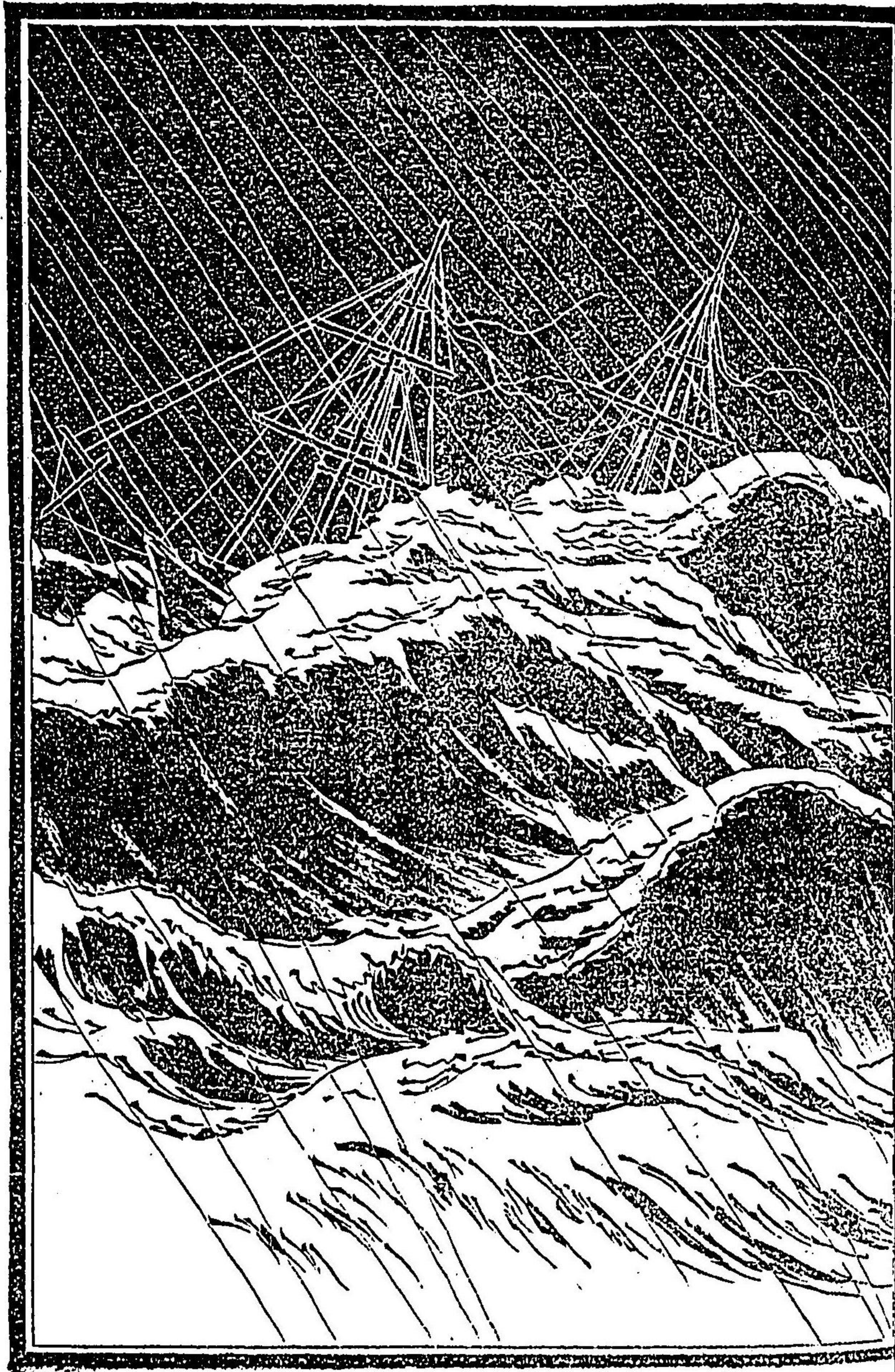
第三十回 (公園)

茲に又美少年愛宕下秀雄の彼の小宴の席に於て圖らずも紫紋嬢と共に天幕に巻倒され嬢が耳に我が愛情の言葉を吹込みたれば早や既に嬢を手に入れたる如き心地せり嬢の母なる野瀬夫人の既に心

まで我に酔ひ迷へる事と云ひ又嬢の叔父保路の我が爲に強敵ならんと思ひ居たるに豈圖らんや我が父を知れるとやらにて我に甘きと飽の如し此上我が爲に敵とすべきの彼の帆足鋭夫一人なれば是も恐るゝ程に非ず猶保路の心を奪はば嬢の直ちに我が物なりと斯く思ひ定めれば翌朝の早く起き兼て我れと米國にて同じ金山に身を委ねたる或人の家に行き之に委細を頼み置きつゝ引返して保路の家に行んとせし其路にて我が身の上を能く知りたる桑港の前領事に出逢し、も少し心に驚たれど固より此人が帆足鋭夫の知人なりとの思ひも寄らず好い加減に挨拶して匆々に立分れ頓て保路を連出し我身の上を調呉れどて前に委細を頼み置きたる彼人の許へ同道せしに彼の人充分我れに調子を合せ米國に在る時、斯々の手柄を立てたり云々の譽を上げたりなど、誠しやかに言ひ置れしかは是にて保路も充分に我れを信する事ならん、と益々我が計

略の圖に當るを喜びながら又も保路と共に其家を立出すが夫より
 歸り來る路に於て再び彼の前領事に出逢たり而も今度の前領事一
 人にあらずして我が敵帆足銃夫と何事かを親しげに話し居るにぞ
 扱ひ彼の前領事我が悪事を銃夫に語り語る所なるか茲にて言葉を
 交せての我身の危きと言ふばかりなしと知ぬ振にて行過んとする
 に保路が早くも帆足銃夫を認め其傍に立寄りんとする故個の一大
 事と休なく言紛せ保路にの分れを告げて己れ一人宛も逃るが如く
 其所を走去れり是までの前回の記事を読み讀者既に推量せしな
 らん
 扱是よりの執れに行きて好らんかど秀雄の獨り考へしが何分にも
 氣に掛るの嫌が事なり昨夜吹込みたる我言葉を嫌ひ如何に聞取り
 しか夫が爲に心を動かして今朝猶ほ我れを思ふなるや夫ども端なき
 奴と思ひ返つて我れを賤むに至りしなるや井を見届けし上ならで

此後の掛引の定め難しと早くも思案を推定めて野瀬夫人の家に
 行きたり夫人の毎に異らざる狂氣の如く出來り下にも置かず待遇せ
 ど如何にせしや嫌が姿の見へざる故夫となく問試み「昨夜嬢様の
 風を召たと聞きましたが半分云ふを夫人の受取りイエ何に太した
 事の有ません今朝の未だ起きませんけれど午後になれば私しと共に
 門西の公園へ参りますハイ斯う氣候が暖になりまらた故是から
 毎日の様に午後四時頃から公園へ行き腰掛の上で二時間位づゝ編
 物をして來ます貴方も何うか公園地へお出なさいな秀雄の斯と聞
 きて激ぶ事限りなし如何に夫人が我身を厚く待遇せばとて用事も
 なきに毎日の如く訪來るの好ましくからず公園地の誰彼の隔てなく
 入込む所なれば散歩に事寄せ逢見るに屈強なり毎日なりとて誰
 に憚かる所なし好く此上の公園地をば我が目的の戦場と定め今日
 の其手初めとして爾後の毎日行きて逢はんと獨り心に打笑みつ夫



人には然るべく分れを告げ一先我宿へと引取りたり既にして日も傾き午後の四時に近き頃充分身の仕度に注意して左の手に杖をぶらさげ右の手に葉巻の煙草を持ち榮曜榮華に倦き果たる貴公子ども云ふ如く徐々と歩を運び門西の公園に近づけば巴里の風俗として高きも低きも茲に集ひ金満家に見染られんとする美人あれば妻を撰ばんとする紳士あり思ひく身に身を凝し此れ見よがしに練歩けり斯る人々の孰れも屢々公園地に來りて互に顔を見知れるが多けれど一人愛宕下秀雄のみ今まで斯る晴の場所へ出し事なく偶々公園地を通るとも見姿さへ粗未なれば氣に留る人もなし今日初て身を飾り初めて人々の目に觸るゝ事なれば右往左往の貴夫人淑女が之に目を注ぐ事一方ならず或ハ西班牙より來りし貴族ならんと評するも或ハ伊國より來遊せし畫家ならんと見るあり其有餘は絶美絶麗の女俳優が初めて舞臺に上りしを少年紳士の評

するに異ならず去れど秀雄の心に一物ある者あれば當りの様子に氣も留めず紫紋嬢の孰れに在る其母の姿の見へぬかと先づ公園地の柵の外より彼方此方を見廻すに一方の端に當り老樹の影に身を下したる二人の女の儘に後姿を見認むるのみなれど夫人と嬢に擬ひなし好々と足を曲げて猶も柵の外を傳ひ右手の方に歩み行き恰も嬢等の横手に當る鐵門を澄り入り圖らず茲に來りたる体に見せ掛け急ぎもせず進み行くに果して嬢と夫人なり嬢の我が來る事を知らず唯一心に編物の針を動し夫人の之に引替へ心待に我を待つと見へ切りに向うの方に目を注げり行きく僅に十間ばかりとなりし頃忽ち横手より立現るゝ女あり秀雄の肩に武者振附き柳さんお前の何所へ行くど抱留めたり此女の是れ栗岡お添なりア、悪い所で出會せし者なる哉

第三十一回 (公園二)

てい困る多分金でも欲しいと云ふのだらふと早や其衣囊を探らんど
 すお添の益々恨めしさに「ナニ金などの欲くもない私の要るのにお
 前だよお前の身体が入るのだよ（秀）馬鹿な事を言て呉るな手を切
 れば他人同士だ好や用事があるにもしろ人込の中で遠慮もなく抱
 附かれて堪るものか（添）オヤ何時私しと手を切ったエお前の野瀬
 保路といふ紳士に連れられて出て行って夫きり歸らぬていないか手を切
 たくど其様な嘘を言へば私しの方にも考へがある今まで夫婦の
 様に暮した癖に抱附かれて堪る者かも知れぬ出来た少しお金が出来
 たと思ひ好い氣に成て早や外に女房でも持へる氣に成つてお前が
 其様な了見なら私しも是から其積りて何時までも從て行き其女を
 突留めてお前に愛想を盡す様今までの事を吐鳴て遣るから其覺悟
 で居てお呉れ食うや食はずの時も在て私しの着替まで賣て仕まい
 成時の宿の拂ひに困り夜逃の相談までした事を悉皆聞かせて遣れ

悪い所で出會せし者なるかな僅十間ばかり先の方の紫紋嬢と其
 母と腰を下して編物せり聲を上なば此有様を見て取れ忽ち愛想を
 盡されん去ればとて此儘にの添を振捨難しお添の秀雄の心を知
 ねば四邊も構はぬ大聲にて「柳さんお前の餘りだよ何だ其様に目
 を白黒して叱つても丁ないよ云ふだけの事を言はぬうち最う此
 手を放さぬからサア打ならお打殺してお呉れと用赦もなく恨みの
 言葉を陳んどす秀雄の殆ど持餘し「コソ放さぬか放せと云ふのに最
 う手前などから聞く用ない（添）お前の方に聞く事もなからう
 が私の方に言ふ事がある振捨て行くならお出何所までも從て行く
 と取附て放さばおそ秀雄の櫻み殺さんと思ふばかりに立腹しさ限
 りなければ早や人立のする様子なればイヤ何の様な事か知らんが
 茲てい話しも出来ぬからと云ひつゝ先よ立て人の少き所に行き柵
 に添ひて歩みながら最う手を切て仕舞たのに今更に其様な事を言

は誰がお前の女房などになる者かサア何所へなりとお前の行き度
 い所へお出なす秀雄の返事するだけ益々事を荒立ると思ひし平無
 言の儘にて見向もせず歩むのみお添の更に屈する色なく爾云ッて
 も未だ先の女がお前に愛想を盡さぬならお前が私の色だと言ふ事
 も又今までお前が相場會社へ出ると云ッても其様な所へ出るので
 なく紫性も知れぬ悪人ばかりと附合て居た事も今着て居る此着物
 も何うしたお金で仕立させたか其出所さへ怪しい事も残らず聞せ
 て遣から好いオヤお前の乙に澄すじやないか人に聞せて耻しいと
 思ふのかへ夫で其様に知らぬ顔をするのかへ好しく爾云水臭い
 了見なら最う茲で吐鳴て遣ると更に一段聲を高くし皆さん聞て
 下さい此野郎の斯様な立派な姿をして紳士に見掛て居ますけれど
 一と早や叫び立んどするにぞ秀雄も今の詮方なく俄に言葉を柔か
 コレ見どもない何故其様に疑などを立てるので話があるなら家へ歸

ッて緩々と話すが好き己も一緒に歸るからと優く出れば早忽ち
 お添の心まで打解けて「オヤ一緒に歸るの嬉しい事夫でいお前未だ何
 だ子彼所を我家と思ッて居るのだ子今までの事の私しが悪かつた
 堪忍してお呉れナニ子お前の心さへ替らなきや一日や二日歸らぬ
 とて何で彼れ是れ云ふ者かだけれどサアお前も抱附くなの外聞が
 悪いのと私しに心配させるのい能くないよ初から尋常にサア一緒
 に歸らうと云て呉れば私が何ほど歡ぶか知らないワオヤお前未だ返
 事をしない子何故其様に餘所なくしく向ふの方ばかり眺めて居る
 此方へ向て話しながらお歩きな前又た優しい言葉を掛け私に安
 心させて置て突如に逃る積りじやある舞い子其様な事をするど聞
 ないよエ柳さん何故其様に先の方ばかり眺めて居ると云ひつゝ秀
 雄の手を取れば秀雄の先刻より既に一策を案じお添が我手に絶る
 を待居たる事なれば茲ぞと思ひ忽ちに氣色を變へ「エ、蒼蠅と唯一

突に突飛して直様通り合す公園取締の巡査に向ひ兼て此公園へ
賣淫類似の賤しき女の立入る事を禁じてあると聞きますのに御覽の
通りアノ様に私しに戯れる女がおります實に迷惑に堪へませんと
訴へたり差しものお添なれど此早業に呆氣に取られ唯だ巡査と
秀雄の顔を見比べるのみ巡査の素より此訴へを偽りなりと思ふ由
なく直にお添を引捕へて「コレ手前何と心得て此公園地へ入込み
刺さへ通り掛る紳士に向ひ戯れがましき言葉などを掛るのだ此方
へ來い(添)イヤ通り掛る紳士でいありません言葉を掛る丈の譯が
あるから掛るのです(巡)馬鹿を云ふな此方へ出る早く出無かど會
釋もなく柵の外に摘み出したりお添の初めて秀雄の鬼々しき心を
知り悔しさに堪ざれど今云ひ争ひて到底も我が勝どならぬを知
り且つこの屯所に連行るゝ恐れもあり此場の事なく切上りて後日の
再擧を謀るに如すと早くも分別を定めしか限みを帶たる眼にも秀

雄の顔を眺むるに巡査の猶ほも迫立て「コレ何を其様にグズグズし
て居る早く去んか」お添の後を向き柳さん覺へてお出と云ひ捨
て立去れり秀雄の仕濟したりと私に喜ぶ心を隠し巡査に相當の禮
を述べ揚々として立去れり

第三十二回 (公園三)

愛宕下秀雄の吾が計略の圖に當りて手もなくお添を追拂ひたるを
喜び又引返して野瀬夫人の腰掛け居たる所へ歸り行くに夫人の待
兼居たる事と見へ嬉しみに立上りサア先づ私一の傍へお掛けなさ
い貴方の御親切に毎もながら痛み入ます夫に引返へ保路さんと
鏡夫さんの薄情の何うでせう昨夜の小宴で雨の爲めに私しがアノ
通り心配した事を知りながら今日に成て未だ見舞にも來ませんよ
貴方は今朝も宅まで來て下さって今また斯うお尋ね下さるはお若
いに珍らしい本筋に貴方の爪の垢でも煎じて吞せ度いと思ひます

ワゴン紫紋お前は其様に編物ばかりして居ずと何故早く秀雄さんに御挨拶をせぬ秀雄は之を機會に戯に向ひ言葉短く機嫌を伺へり
 嬢は少し色を紅くし一寸秀雄の顔を見たるのみ又横向きて編物に身を委ぬ秀雄は此有様を見て我が戀の進みしや退きしやを判じ兼ね
 ね嬢が毎もより内端なる此様子我れを愛するが爲なるや夫より昨夜
 天幕の下にて吹込みたる言葉に恐れ我れを端なしと思へるや其心の底を探りみんと思ひつゝ腰掛を引寄せて夫人の正面に腰を下
 せり嬢には筋違に當れども眼の角より其様子を偷み視るには都合よ
 ー夫人は先づ雑談の端を開き子エ秀雄さん庭へ持出して小宴を開く
 のは何となく小説にてもあり相て面白いではありませんか尤も
 險呑な事は險呑ですが貴方は既に金山で此上もない險呑な所を通り
 抜て来ーッた方ですからア、道理で火事の夜なども充分に心が
 落着て居しッて保路さんの捨て逃た嬢が身を貴方が救ッて下さ

る事が出来たのです貴方の勇氣には感心しますよ本統に命掛でな
 ければ出来ぬ事ですもの(秀)イヤ彼の様な命がけなら幾度でもわ
 れば好いと思ひますと云ひつゝ嬢の容子を見れど嬢は此言葉を耳
 にも入れざるが如し(夫)イヤ貴方が夫ほどまでに私し共の爲を思
 ヲ下さるのには實に有難いと思ひます今までは保路さん迄も初め
 ほど貴方を悪まね様になつた様です(秀)ハイ今朝もお目に掛りま
 した此後は隔てなく交際しやうと云ッて下さるし夫に又私しの
 父までも知居ると仰有いまーた(夫)オヤー爾ですか夫でも保
 路さんは私し共には少しも其様な事を云ひませんが(秀)夫は仰有
 らぬ筈です今朝始めて染々と私しの身の上をお話し申しましたら
 夫では己の親友の子だと仰有りました(夫)夫は先ア何よりお目出
 度保路さんが親友と云へば貴方の阿父さんは必ず非常の金持です
 よ貴方は早く親子の名乗をなさッては如何です(秀)イヤ夫が未だ

出来ません保路さんの心の中に深い障があつて充分に私しの行ひを見抜いた上でなければ親の名までも知さぬと云はれました夫に私しも今まで艱難して仕上た身体ですから父などを當にせず此後とも唯一身で仕揚る積です(夫)夫の益々感心ですなる程貴方の事ですから爾あり相な所ですが夫にしても保路さんが父の名前さへ貴方に知さぬと云ふの餘り邪慳での有ませんか何故貴方の問ひ詰めますせん(秀)イエ私しの行ひを見抜いた上でなければ知さぬと抑有るから私しも夫れでの決して問はぬ積です(夫)何うも貴方の心掛に感心しますでも貴方私しから問う分には差支もありません(秀)イヤ貴方から問なさらずとも必ず保路さんから云ひ出ませうと口には何氣なく言去れど心の内には早く其事を夫人に問はせ保路の口よりして我身の素性賤しからず實の伯爵夫人の子なる事を知らしめ益々母と鐵の心を動かさんと謀れるなり鐵

も此話しに既に稍や心を動かさし忙しく編物に手を使ひながらも耳に油断なく打聞けるのみならず猶後後に到り自ら保路に問ひんと思へるなり鐵の何故に斯く少年の身の上を知んとするや未だ此少年を愛するが爲にあらざれど又心憎しと思ひての爲にも非じ夫人の益々夢中となり夫での少しも貴方の御迷惑にならぬ様期と私しから保路に問て上ますですが貴方の最う世界中を見盡して來つしたから此上の巴里に住居をお定めなさるでせう乎此間ひ逢ひて秀雄の少し悲げなる様子を示しハイ巴里に住たいとは思つて居ます何が分此通りの獨身者で頼りに思ふ親類もなし夫に少し叶はぬ願ひがありまして云ひつゝチャリと鐵を詠めハイ迎も思ふだけ無益だらうとは考へて居ますけれど私しの身の幸福は全く其願ひに在りますので若し叶ふ事なら一生涯も二生涯も此巴里にひますけれど夫れが叶はぬ日には世に望みもありません巴里に

て空しく思ひを焦すよりは一層外國へ身を隠します身隠して失
 望に死しても仕舞います夫も自分の力には及ばぬ事て叶ふも叶は
 ぬも全く先の胸にある事ですから又嬢を詠め打明けて云ふかど
 思ふッても又言出して聞れぬ時は何うしやうと未だ言出さず居
 のですがど巧みに言廻す言葉の節々素より疑ふ所なし嬢も夫人も
 充分に察したるなり夫人はもどかしの思ひし乎猶ほ其言葉を願さ
 んとする如くに何のお願ひか分りませんが貴方の願ひを聞かぬと
 云ふ人はありません事に寄ると先方で最う貴方の言出すのを待懸
 れて居るかも知れませんハイ私しは爾思ひますよ貴方が言出しさ
 へすれば直に叶ふ事て本統に願つたり叶つたりと互ひに歡ぶ事に
 なるかも知れません遠慮せず仰有るが好うございませうと一尺
 ほど其顔を突出せりア、嬢が身は危しと云ふも仲々なり

第三十三回 (足音)

ア、紫紋嬢が身は危しと云ふも中々なり今一分の中に彼の秀雄必
 らず婚姻の事を言出さん言出さば如何になるべきや秀雄に心醉せる
 母の事なれば飛附きて承諾せん嬢は傍目も振らず編物をしながら
 も洩さず秀雄の言葉を打聞けり去れど嬢が様子に少しも異りし
 所なき故秀雄も實の嬢の心を探り兼て言も出さず躊躇ふなり此時
 嬢の何か物音を訝る如く「オヤ」と云ひて背後を向き様子ありげに此
 方彼方を眺むるにぞ母も秀雄も怪しみて其故を問へば(嬢)何だか
 背後で足音がした様に思ひまして「此一言に秀雄の驚き若しや彼の
 お添が執念深くも引返し來りて我様子を伺へるにあらぬかと同
 じく四方を見廻せとお添に似寄りたる者もなし初て先づ安心しな
 二離も見居る氣遣ひのありませんと云へば夫人も之に調子を合
 せ爾サ若し帆足銳夫さんが卑劣な心を出してお前と秀雄さんの様
 子を附廻して居さへせねば外に誰も背後から立聞などをする者の